

## 鳩間方言の住関係語彙

著者	加治工 真市
出版者	法政大学沖縄文化研究所
雑誌名	琉球の方言
巻	15
ページ	51-106
発行年	1991-03-25
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/11963">http://hdl.handle.net/10114/11963</a>

# 鳩間方言の住関係語彙

加治工 真 市

アイク [ʔaiku] (名) 「<sup>あうこ</sup>枋」の義か。物を荷う棒。タキアイク [tākiaiku] (竹製の枋), ニーカタミアイク [ni:katami-ai̯ku] (荷をかつぐ棒) などがある。木製のアイクは、タルキ、キチなどを利用して作った。直径約6～7センチの若木を利用して、両端を尖らせて鉤状にし、紐がこの部分にかかるようにして、荷物を両端に吊し担ぐようにしたもの。例, アイクシ ミジ<sup>ミ</sup>カタ<sup>ミ</sup> [ʔaikuʃi midʒi kātami] (棒で水を担げ)

アカガーラ [ʔakaga:ra] (名) 赤瓦。沖縄産の赤瓦のこと。鳩間島の人は赤瓦を買うためにイガガラス [ʔigagarasu] (イカの塩漬), カツヌ・バタガラ<sup>ス</sup> [kāt̚sunu·batagarasu] (鰹の腸の塩漬) などを沖縄本島へ輸出した。水産物を売って毎年建築用材を購入したものである。例, アカ<sup>ラ</sup>ガー<sup>ラ</sup>ン<sup>コ</sup> ヤ<sup>キ</sup>ヌ ヨー<sup>ム</sup>ノ<sup>ー</sup> <sup>コ</sup>シ<sup>ディ</sup> パ<sup>リ</sup>ノ<sup>ス</sup> [ʔakaga:ra:n jakinu jo:muno: ʃidi parisu] (赤瓦も焼成の弱いものは風解していく)

アカル [ʔakaru] (名) 障子のこと。老人層の人が用いる。七十歳代以下の人は、ほとんど使用しない。ソー<sup>ジ</sup> [so:gʒi] (障子) を多用する。おそらく共通語の影響であろう。例, ムカ<sup>シ</sup>プ<sup>ソー</sup> ソー<sup>ジ</sup>バ<sup>コ</sup> アカル<sup>コ</sup>ティ アゾー<sup>ッ</sup>タ<sup>コ</sup>ル セー [mukaʃip̚so: so:ṁdʒiba ʔakaruti ʔadzo:t̚taru se:] (昔の人は障子を「あかり」とおっしゃったよ。そうそう思い出したよ)

アカル [ʔakaru] (名) 「<sup>あかり</sup>明<sup>かり</sup>」の義か。明障子のこと。老人層はアカル [ʔakaru] を多用するが、壮年以下ではあまり使用しない。ほとんど理解語の程度にとどまっている。例, ムカ<sup>シ</sup>プ<sup>ソー</sup> ヨー ソー<sup>ジ</sup>バ アカル<sup>コ</sup>ティ アゾー<sup>ッ</sup>タ<sup>コ</sup>ヨ<sup>ー</sup> [mukaʃip̚so: jo:so:dʒiba ʔakaruti ʔadzo:t̚ta jo:] (昔の人はねえ、障子を、アカルと言われたよ)

アキパタックン [ʔakipatakkuŋ] (他動) ①「開けはたける」の意。すっかり開け広げる。家の戸を全部開け放つこと。②着物の裾などをすっかり開け広げてしまう。③見せてはならない所まで開放して公開してしまう。アキパタッカヌ [ʔakipatakkanu] (開け広げない), アキパタッキティ [ʔakipatakkiti] (開け広げて), アキパタッキ<sup>コ</sup>プ<sup>サン</sup> [ʔakipatakki-p̚saŋ] (開け広げたい) 例, <sup>コ</sup>ヤ<sup>ド</sup>ウ アキパタッキ<sup>コ</sup> [jadu ʔakipatakki] (戸を全部開け放しなさい)

アクン [ʔakuŋ] (他動) 開ける。<sup>コ</sup>ヤ<sup>ド</sup>ウ アクン<sup>コ</sup> [jadu ʔakuŋ] (戸を開ける)。アカヌ [ʔakanu] (開けない), アキティ [ʔakiti] (開けて), アキフイー<sup>リ</sup> [ʔakiffi:ri] (開けてくれ), アキ<sup>コ</sup>プ<sup>サン</sup> [ʔakip̚saŋ] (開けたい)。例, シト<sup>ム</sup>ム<sup>コ</sup>テ<sup>ー</sup> ロク<sup>コ</sup>ジ<sup>ナー</sup> <sup>コ</sup>ヤ

ドゥ アクン [ʃitumute: rokudzina: jadu ʔakuj] (朝は六時に戸を開ける)。フチ<sup>フ</sup> アキ<sup>フ</sup>バ [Φutʃi ʔakiba] (口を開けなさいよ)

アサ<sup>フ</sup>ニビ [ʔasanibi] (名) ねぼう (寝坊)。「朝寝」の義。農家は朝が早いので、嫁が寝坊をすると舅や姑に嫌われた。鳩間島で歌われている『でんさ節』では「朝<sup>アサ</sup>にびしょうる女<sup>ミドゥム</sup> 朝<sup>アサ</sup>引<sup>ビキ</sup>きしょうる女<sup>ミドゥム</sup> うりからどう きはめて むんどうや くぬみょうるでんさ」と般われている。例, キナイヌ ムンドー<sup>フ</sup>ヤ アサ<sup>フ</sup>ニピラティ ムカ<sup>フ</sup>シパナセー<sup>フ</sup>アル [kinainu mundo:ja ʔasanibirati mukafi panafe: ʔaru] (家内の問答《喧嘩》は朝寝坊から始まると昔の人の教にある《昔話にある》)

アダナ<sup>フ</sup>シジナ [ʔadanaʃidzina] (名) アダンの気根の繊維で編った縄。「アダナシ網」の義。アダンの気根 (直径 5～7 センチ, 長さ, 60～80 センチ) を切ってきて, 皮を剥ぎ, 約 2 ミリ程の厚さに裂いて乾燥し, それを細かく裂いて編いあげた網。直径 3 ミリ程の太さに編う縄をユー<sup>ル</sup>ル [ju:ru] (「撚り」の義か) という。この縄は民具のアン<sup>フ</sup>スク [ʔansyuku] (弁当入れ。魚籠。物入れ) やアウ<sup>フ</sup>ダ [ʔauda] (もっこ) を作るのに重宝された。

また, このユー<sup>ル</sup>ルは正月の「凧揚げ」用の縄としても用いた。正月の二ヶ月前から, 子供たちはユー<sup>ル</sup>ルを編うためにアダナ<sup>フ</sup>シを切って乾燥した。出来るだけ細かく裂くことが細いユー<sup>ル</sup>ル [ju:ru] (「小撚り」の義か) を編う上で必要であった。例, アダナ<sup>フ</sup>シ フサキティ アダナ<sup>フ</sup>シ・ジナトゥ ピキダマ トッバシユー<sup>ル</sup>ル ナーディ<sup>フ</sup>ー [ʔadanaʃi sakiiti ʔadanaʃi-dzinatu pikidama tubaʃi-ju:ru na: di:] (アダンを裂いて, アダナシ網と凧揚げ縄を編おうよ)

アダナ<sup>フ</sup>パー・ムス [ʔadampa: musu] (名) 「アダナ葉筵」の義。アダンの葉の刺を除いて陰干しにし, 1 センチ幅の大きさに裂いて, ムスフミ<sup>フ</sup>・ヤマ [musu Φumi-jama] (筵編み機) で編んだもの。粗い筵であるから, 座敷用には使わず, 炊事場の床や, 戸外の本陰などに敷いて子供を遊ばせたり, 午睡の際に利用したりした。アダナ<sup>フ</sup>シの繊維で編った小縄で編むので, ゴツゴツした肌触りであるが, かえてこれが涼をとるのに好都合であった。

アナ<sup>フ</sup>プリヤ [ʔanapurija:] (名) 「穴掘屋」の義。掘って建て小屋。普通, 30～40 センチ程の穴を掘って柱を立て, 穴の囲りに砂利や小石を詰めて土を混ぜ, 突き固める。土に埋まる部分を火で焼いておくと腐蝕しにくいと言われている。アナ<sup>フ</sup>プリヤーは, 普通は炊事用小屋, 農具保管用小屋, 牛小屋, 鶏小屋などを作るのに用いた建築法である。例, トー<sup>フ</sup>ラー アナ<sup>フ</sup>プリヤー ダー<sup>フ</sup> [to:ra: ʔanapurija: da:] (炊事小屋は穴掘り小屋だよ)

アフ [ʔaΦu] (名) 「灰汁」のこと。灰を水に浸してそのうわ澄みを取ったもの。汚れ落しや染物に用いた。アク→アフと音韻変化して生成された形。ku→fu は法則的である。ッフォン [ffoŋ] (黒い), ッフン [ffuŋ] (食う), マッフア [maffa] (枕)。例, パイヌ<sup>フ</sup>

アフシ アラウカー ユグリモー ウティルン [painu ʔaΦuʃi ʔarauka: juguri-muno: ʔutirug] (灰の灰汁で洗うと汚れものは落ちるよ)

アマダラ [ʔamadara] (名)「雨垂れ」の義か。軒先のこと。アマダランッサーラ [ʔamadaranssa:ra] (「雨垂の下」の義, 軒下のこと)。例, アマダランッサーンヌ イシェー ワー アマダラミジヌ ウティクー ウビシ アナ ピッカリ ベー [ʔamadaranssa:nnu ʔife: wa: ʔamadara-midzinu ʔutiku: ʔubifi ʔana pikkari be:] (軒下の石は, まあ, あなた, 雨垂れ水が落ちてくるだけで, 穴があけられているよ)

アマドウ [ʔamadu] (名)「雨戸」の義。ヌキヤー [nukija:] (貫き家)の戸のこと。板張りの外戸。幅3尺, 長さ6尺に作ることが普通であった。窓の外側に, シキー [ʃiki:] (敷居)とカムイ [kamui] (鴨居)をとりつけて, それにアマドウ (雨戸)を立てて, 引き戸 (ヤドゥパシル)にするもの。例, ヲヨイ ソール ヲピンマー アマドー ムール パンツァシタ [joi so:ru pimma: ʔamado: mu:ru pantsaʃita] (祝い事をされるときはアマドは全部はずした)

イーフル [ʔi:ru] (名)錐。木材などに小さな穴をあけるための道具。直径約2センチ, 長さ約20センチの円錐形の柄に, 直径約5ミリ, 長さ約10センチの鉄線を打ちこみ, 先端部を三角錐状に研いで尖らせたもの。両手で揉みながら押して穴をあける。ヲイダフニ (板舟, サバニ)は, これで穴をあけ, 竹釘を打ちこんで接いでいく。例, イールシ アナ ピックバ [ʔi:ruʃi ʔana pikkiba] (錐で穴をあけなさいよ)

イーローマ [ʔi:ro:ma] (名)小さな錐の意。イーフル [ʔi:ru] (錐)に, 指小辞「-マ」が下接したもの。「マ」は沖縄本島方言の-グワー [gwa:], 宮古方言の「-ガマ」[-gama]と同じ。鳩間方言の指小辞は, 「ガマ」と共通する形態的特徴をもっている。例, イーローマ イーネーラ カリクー [ʔi:ro:ma ʔi:ne:ra kariku:] (小さな錐を西隣の家から借りてきなさい)

イシジ [ʔiʃidʒi] (名)礎石。珊瑚石の一つ, 菊目石 (海花石)の死殻を取って来て, 頭頂を削って, 柱の土台となる礎石としたもの。イシジを置く際, その下の部分に砂利 (ザラ [dzara] という)や碎石を穴につめて突き固める。そのための道具をヤッサー [jasse:] (直径30センチ, 長さ約1メートル程の丸大に, 数本の把手をつけ, それを持って, 数人一組で地面を打ちつけて地固めをするもの)という。歌をうたいながら村人が集まって地固めをした。

イス [ʔisu] (名)椅子。共通語よりの借用語。老人層は, ビリダイ [biridai] (座り台)という。背もたれの付いたもの。例, イスナー ヌーリ パナンギ シーベンケンマー ブリウティ ナーヌ [ʔisuna: nuri panangi ʃi:be:ŋkemma: buriuti na:nu] (椅子に乗って, いたずらしている中に, 折れてしまった)

イチバン<sup>7</sup>ザ [ʔitʃibandza] (名)「一番座」の義。家の中で最上の部屋。東側に面し、採光もよく、大切な客を接待するのに用いる。通常、ザー<sup>7</sup>トウク [dzartʉku] (床の間)をしつらえて、掛軸などを飾り、香炉を置き、コン<sup>7</sup>ジン [kondʒin] (金神)を信仰している。金神に向って行くことを、コン<sup>7</sup>ジン カミ [kondʒin kami] (金神に向って)といい、タブーとされている。例、イチバン<sup>7</sup>ザー カンダカー<sup>7</sup>ン [ʔitʃibandza: kandaka:ŋ] (一番座は、神高い<<神霊が高い>>)

イツァ<sup>7</sup>クビ [ʔitsa-kubi] (名)板壁。板で葺いた壁のこと。普通は、サンブ<sup>7</sup>・イツァ [sambuʔitsa] (三分板、杉板の最も薄いもの)を用いて壁を葺くのにした。杉板が導入される以前は、西表の山中より、フクイキー [Φy̥kui-ki:] (ウラジロエノキ)を切り出して、それを<sup>7</sup>バキティ [bakiti] (木挽きして)壁板を作ったという。茅壁は小屋を作る際に作った。例、イツァ<sup>7</sup>クベー カジヌ<sup>7</sup> フカ<sup>7</sup>バン ソーヤ ナー<sup>7</sup>ヌ [ʔitsakube: kadʒinu Φy̥kaban soʒa na:nu] (板壁は風が吹いても心配はない)

イッス<sup>7</sup>ビン [ʔissu-biŋ] (名)一升瓶。酒やソーユ [soʒu] (醤油)などを入れるガラス製の容器。イッス<sup>7</sup>クビン [ʔissu-kubiŋ] ともいう。パイ<sup>7</sup>ター [paɪta:] (「南方端」の義か。西表島上原から赤離までの北岸一帯。水田地帯)へ行く時や、イガメー [ʔigame:] (「イカ海」の義、イカ釣り漁で出漁すること)などへ出る際には、イッスクビンに水を詰めて、二本ほど持参した。西表では、ナマ<sup>7</sup>ミジ [namamidʒi] (生水)を飲むと、プーキ [pu:ki] (「風気」の義。風土病、マラリヤのこと)にかゝるといわれていたので、水は島から持参した生水を夏場には飲んだ。イガメーに出漁する際にも、一晩の飲み水として一升瓶1本分。予備として1本を持参した。例、パイ<sup>7</sup>ター トーサ<sup>7</sup> トゥリン ピームドゥル シー<sup>7</sup>パルピンマー イッス<sup>7</sup>ビンナー ミジ フミ<sup>7</sup> ムティパリ<sup>7</sup>シタ [paɪta: to:sa turim pi:muduru ʃi: parupimma: ʔissu-binna: midʒi Φumi muti pariʃita] (南方端<<西表>>へ田草取りに日帰りで行くときは、一升瓶に水を汲んでもっていった。

イツァ<sup>7</sup>フン [ʔitsaΦuŋ] (名)「板釘」の義。板(三分板)は戸や壁に用いるが、それに打つための釘は短かい一寸釘か、七分釘を用いた。その短い、壁板、戸板用の釘を特にイツァ<sup>7</sup>フンという。例、イツァ<sup>7</sup>フン<sup>7</sup>マー イシ<sup>7</sup>カーマヌ フンバ<sup>7</sup> シウカイオール<sup>7</sup>ヌ ウリバ<sup>7</sup> イツァ<sup>7</sup>フンティ アズ<sup>7</sup> [ʔitsaΦumma: ʔisika:manu Φumba ʃikaio:runu ʔuriba ʔitsaΦunti ʔadzu] (板釘は短い釘を使われるが、それを板釘という)

イラ<sup>7</sup>カ [ʔiraka] (名)薨。家の上棟。棟瓦。ヤー<sup>7</sup>ヌ・ティジ [ja:nu-tidʒi] (家の頂)ともいう。瓦葺きの場合は、頂上に土をのせて、その上に雄瓦を乗せてムチ [mutʃi] (漆喰)を塗り、形を整えて仕上げる。東の面と西の面も漆喰で化粧塗りを仕上げる。

例、カー<sup>7</sup>ラ・ヤー<sup>7</sup>ヌ イラ<sup>7</sup>カナ パトゥザ<sup>7</sup>ヌ トゥマリ ベー [ka:ra-ja:nu ʔirakana paʔudzanu tumari be:] (瓦家の薨に鳩が止っている)

ㇿイン [ʔiŋ] (名) 縁, 縁側。トゥーシ [tu:ʃi] のこと。ㇿマンタヌ・イン [mantanu ʔiŋ] (前の縁。家の南面の縁), アンタヌㇿ・イン [ʔantanu ʔiŋ] (東側の縁) のようにいう。例, ㇿマンタヌ・インラ アンタヌㇿ・イン バーㇿキ ゴーㇿキンシ ッスリㇿ [mantanu ʔinra ʔantanu ʔin ba:ki dzo:kinʃi ssuri] (前の縁から東の縁まで, 雑巾でふきなさい)

ㇿイン [ʔiŋ] (名) 縁側, 「縁」の義。トゥーシ [tu:ʃi] ともいう。アンタヌㇿ・イン [ʔantanu-iŋ] (東側の縁), ㇿマンタヌ・イン [mantanu-iŋ] (前方の縁, 南側の縁), インタヌㇿ・イン [ʔintanu-iŋ] (西側の縁) などがある。一番座, 二番座, 三番座の囲りを縁側にして, 板張りにした床面。普通は, 幅3尺, 長さ九尺程度に作るのが多い。例, ㇿマンタヌ・インナ バーㇿキ マイダーラㇿ シミㇿシケー [mantanu inna ba:ki maida:ra ʃimi ʃike:] (前の縁側にまで米俵を積んでおいてある)

インタㇿ・ヤドウ [ʔinta-jadu] (名) 西側の戸, 「西屋戸」の義か。普通は勝手口の戸をさす。マーシャドウ [ma:ʃi-jadu] (「回わし屋戸」の義。ドア形式の戸のこと。回わして開閉するのでいう) になっていたり, ピキヤドウ [pi:kijadu] (引き戸) 形式になっていたりする。例, インタㇿ・ヤドウ アキティㇿ キボーシㇿ ンザㇿン [ʔinta-jadu ʔakiti kibo:ʃi ʔndzaʃi] (西の戸≪勝手口の戸≫を開けて煙を出しなさい)

ウーガーㇿラ [ʔu:ga:ra] (名) 雄瓦。ミーガーㇿラ [mi:ga:ra] (雌瓦) の接続部に粘土を盛り, その上に被せて連結するのに用いる瓦。内径約11センチ, 長さ約25センチの半円柱状の瓦。片方の先端部に接ぎ手を作っている。例, ウーガーㇿラㇿヌ シギフチㇿナー ムチ ヌーリㇿバ [ʔu:gara:nu ʃigiΦʉtʃina: mutʃi nu:riba] (雄瓦の接ぎ目に漆喰を塗りなさいよ)

ウールパイ [ʔu:rupai] (名) 「珊瑚灰」の義か。石灰のこと。鳩間島では枝珊瑚の枯れたものを集めて, 浜辺で焼き, それを土の中に埋めて作っていた。そのウールパイに稲藁を5~6センチ程に切ったものを混ぜ, 水を加えて搗き, 混合して漆喰に仕上げていた。漆喰を捏ねることをムチアーㇿシ [mutʃi-ʔa:ʃi] という。例, ウールㇿ ヤキティ ウールパイㇿ スクㇿラ ディㇿー [ʔu:ru jakiti ʔu:rupai sykura di:] (珊瑚を焼いて石灰を作ろうよ)

ウキル [ʔukiru] (名) 燠, 消炭。鳩間島では, 西表島北岸の田地の囲りから, マーキ [ma:ki] (「真木」の義か。樹木を燃料としたもの。薪) のタムㇿヌ [tamunu] (薪) が豊富にとれた。そのマーキを燃やして出来る燠のことをいう。ユシㇿキキー [juʃʃi:ki-ki:] (すすき) の燃え残りは燠にならない。例, カマチェーㇿラ ウキル プサイㇿ ピバㇿチナ ウティㇿケー [kamatʃe:ra ʔukiru pʉsai pibatʃina: ʔutiku:] (竈から燠を拾い, 火鉢に入れて移してもってきなさい)

ウシヌㇿ・ヤー [ʔuʃinu-ja:] (名) 「牛の家」の義。牛舎のこと。屋敷内に牛小屋を作った家はごく小数で, 普通は原野の木陰に牛をつなぐか, 村はずれの空き屋敷に牛小屋を建てて,

雨や台風の時にその中に入れて、カキン<sup>カ</sup>グ [k̄a:k̄ingu] (保護) した。

例、ウシ<sup>ウ</sup>ナー<sup>ナ</sup> アガ<sup>ア</sup>ダンヌ<sup>ン</sup> ブリ<sup>ブ</sup>ンダ<sup>ン</sup> ヤー<sup>ヤ</sup>ヌ<sup>ヌ</sup> カク<sup>カ</sup>ナー<sup>ナ</sup> ウシ<sup>ウ</sup>ヌ<sup>ヌ</sup>・ヤー<sup>ヤ</sup> スク<sup>ス</sup>ラン<sup>ラ</sup>セン [ʔuʃina: ʔagadannu buribunda ja:nu kakuna: ʔuʃinu-ja: s̄ukarans̄eŋ]  
(牛には、だにがいるから、屋敷の中に牛小屋を作らなかった)

ウジ<sup>ウ</sup>ル [ʔud̄ḡiru] (名) 燃料の一つ。マーキに対して、下等な燃料である。島の畑の周辺にある雑木の小枝を畑仕事の合間に刈り取って枯らせ、家に持ち帰って燃料とした。柴。小柴を燃料としたもの。バン<sup>バ</sup>スル [bansuru] (バンザクロ、グワバ) の木の小枝や、ゴー<sup>ゴ</sup>ナー<sup>ナ</sup>キー [go:naki:] (桑の木の小枝) などが多くウジ<sup>ウ</sup>ルとして利用されていた。例、ウジ<sup>ウ</sup>ル ス<sup>ス</sup>リ<sup>リ</sup>キー モー<sup>モ</sup>シ<sup>シ</sup>バ [ʔud̄ḡiru suriki mo:ʃiba] (小柴を刈りてきて燃やしなさいよ)

フ<sup>フ</sup>ズ [ʔudzu] (名) 布団、綿を布地にくんで寝る時にかけて使うもの。夜具。昔は一枚の布団に四方から足を入れて寝るのが普通であった。布団の中身は、網状に張った木綿糸に綿花を掛けて仕立ててあった。

例、ピー<sup>ピ</sup>ヤカー<sup>カ</sup> フ<sup>フ</sup>ズ ウラ<sup>ウ</sup>シ<sup>シ</sup> カ<sup>カ</sup>ビ<sup>ビ</sup> ニビ<sup>ニ</sup>バ [pi:jaka: ʔudzu ʔuraʃi kabi nibi:] (寒かったら布団をおろして被って寝なさい)

ウズ<sup>ウ</sup>ヌ<sup>ヌ</sup>・バタ [ʔudzunu-bata] (名) 「布団の腹わた。中身」の義。布団の中身に入れる綿のこと。まわたりや屑綿を布団の中身に入れて、重い布団を作っていた。例、ドゥ<sup>ド</sup>ク<sup>ク</sup>ヌ<sup>ヌ</sup> フ<sup>フ</sup>ズ ピ<sup>ピ</sup>キシ<sup>シ</sup>ナー<sup>ナ</sup> ウズ<sup>ウ</sup>ヌ<sup>ヌ</sup>バタ<sup>タ</sup> キ<sup>キ</sup>シ<sup>シ</sup>ナー<sup>ナ</sup>ヌ<sup>ヌ</sup> [dukunu ʔudzu pi:k̄iʃikina: ʔudzunu-bata kiʃina:nu] (あんまり布団を引っぱるので、布団の中身の綿が切れてしまったよ)

ウズ<sup>ウ</sup>ヌ<sup>ヌ</sup>・カー [ʔudzunu-ka:] (名) 「布団の皮」の義。布団の表。布団の中身の綿を包んだ布地。タカ<sup>タ</sup>バ<sup>バ</sup>タ [t̄akabata] (高機) やジバ<sup>ジ</sup>タ [d̄zibata] (地機) で織りあげ、藍染めにしたものが多かった。例、フ<sup>フ</sup>ズ<sup>ズ</sup>ーン<sup>ン</sup> ピ<sup>ピ</sup>ッ<sup>ッ</sup>キ<sup>キ</sup>カー<sup>カ</sup> キ<sup>キ</sup> シー<sup>シ</sup>ナー<sup>ナ</sup>ン<sup>ン</sup>バ<sup>バ</sup> ウズ<sup>ウ</sup>ヌ<sup>ヌ</sup>・カー<sup>カ</sup> フ<sup>フ</sup>パ<sup>パ</sup>ギ<sup>ギ</sup>ティ<sup>ティ</sup> クー<sup>ク</sup>シ<sup>シ</sup> [ʔudzu:m pikki-ka:ki ʃina:mba ʔudzunu-ka: pagiti ku:ʃi] (布団もあっちこっち穴があいてしまったので、表を剥がして補修しなさい≪つぎあてをしなさい≫)。

ウダ<sup>ウ</sup>ティ<sup>ティ</sup> [ʔudati] (名) 「税」の義か。梁の上に立てて、棟木を支える短い柱。四寸角の角材で、30～40センチ程度の長さの柱につくる。「梁上柱謂<sup>ニ</sup>之<sup>ノ</sup>税<sup>ノ</sup>」 宇<sup>ウ</sup>太<sup>タ</sup>知<sup>チ</sup> (『和名抄』)。「アー<sup>ア</sup>パー<sup>パ</sup>レー」歌に、「ヤー<sup>ヤ</sup>なん<sup>ン</sup>つ<sup>ツ</sup>あ<sup>ア</sup>が<sup>ガ</sup>に<sup>ニ</sup>ば う<sup>ウ</sup>だ<sup>ダ</sup>て<sup>テ</sup>い<sup>イ</sup>しー ヤー<sup>ヤ</sup>ば<sup>バ</sup>す<sup>ス</sup>くり あ<sup>ア</sup>ん<sup>ン</sup>て<sup>テ</sup>い<sup>イ</sup>す」(ああ、銀の建材を税にして、家を造ってあるという) とある。例、ム<sup>ム</sup>ニ<sup>ニ</sup>ギ<sup>ギ</sup>タ<sup>タ</sup>バ<sup>バ</sup> シ<sup>シ</sup>ウ<sup>ウ</sup>カ<sup>カ</sup>イ<sup>イ</sup>ブ<sup>ブ</sup>ー<sup>ー</sup> シ<sup>シ</sup>ウ<sup>ウ</sup>カ<sup>カ</sup>バ<sup>バ</sup>ラー<sup>ラ</sup>バ<sup>バ</sup>ル<sup>ル</sup> ウダ<sup>ウ</sup>ティ<sup>ティ</sup>ティ<sup>ティ</sup> アズ<sup>ア</sup>ダー<sup>ダ</sup> [munigitaba s̄̄kaibu: s̄̄kabara:baru ʔudatiti ʔadzuda:] (棟桁を支えている束柱のことを、税というのだよ)。  
ウダ<sup>ウ</sup>ティ<sup>ティ</sup>ティ<sup>ティ</sup> アズ<sup>ア</sup>ダー<sup>ダ</sup> フ<sup>フ</sup>メー<sup>メ</sup> シ<sup>シ</sup>ウ<sup>ウ</sup>カ<sup>カ</sup>バ<sup>バ</sup>ラー<sup>ラ</sup>ヌ<sup>ヌ</sup> ピー<sup>ピ</sup>ー<sup>ー</sup>チ<sup>チ</sup> ゲ<sup>ゲ</sup>ラ<sup>ラ</sup> ナー<sup>ナ</sup> [ʔudatiti ʔadzuka: me: s̄̄kabara:nu pi:t̄ʃi gera na:] (税といえば、いわば、束柱の一種さねえ)

ウブ<sup>おほ</sup>パク [ʔubu-paku] (名) 大きな箱。大型の箱。「大箱」の義。パコー<sup>おほ</sup>マ [pako:ma] (小箱) の対。例、パコー<sup>おほ</sup> ギューチン<sup>おほ</sup> アリ<sup>おほ</sup>ブタヌ ウブ<sup>おほ</sup>パコー モミ<sup>おほ</sup>パク<sup>おほ</sup> フター<sup>おほ</sup> チル<sup>おほ</sup> アッ<sup>おほ</sup>タ [pako: gju:tʃin ʔaributanu ʔubupako: momipaku Φʊta:tʃiru ʔatta] (箱はいくつもあったが、大きな箱は、<sup>おほ</sup>箱二つがあった<sup>おほ</sup>《<sup>おほ</sup>箱が二つしかなかった<sup>おほ</sup>》)。

ウブ<sup>おほ</sup>ピバ<sup>おほ</sup>チ [ʔubupibatʃi] (名) 大火針。縦約50センチ、横約70センチの箱に、中央部分に約30センチ四方の灰入れの小箱を作って据え、両側に引き出しをつけて小物が収納できるようにした火針。老人のいる、限られた家にしか利用されなかったようである。例ウブ<sup>おほ</sup>ピバ<sup>おほ</sup>チ<sup>おほ</sup>ヌ<sup>おほ</sup> コ<sup>おほ</sup>ピー<sup>おほ</sup> ダ<sup>おほ</sup>キ<sup>おほ</sup> ヌ<sup>おほ</sup>ク<sup>おほ</sup>ミ<sup>おほ</sup> ナ<sup>おほ</sup>ライ<sup>おほ</sup>ティ<sup>おほ</sup> コ<sup>おほ</sup>ス<sup>おほ</sup>ブ<sup>おほ</sup>ット<sup>おほ</sup>ウ<sup>おほ</sup> ナ<sup>おほ</sup>リ<sup>おほ</sup> ベ<sup>おほ</sup>コー<sup>おほ</sup> [ʔubupibatʃinu pi: daki nukumi naraiti subuttu nari be:] (大火針の火を抱いて暖をとり慣れて、働かない怠け者になってしまっている)

ウブ<sup>おほ</sup>ミ<sup>おほ</sup>チ [ʔubumitʃi] (名) 大きな道。大通り。村中の道。例、ヤ<sup>おほ</sup>ラ<sup>おほ</sup>ビ<sup>おほ</sup> シ<sup>おほ</sup>ェ<sup>おほ</sup>ン<sup>おほ</sup>コ<sup>おほ</sup>ケ<sup>おほ</sup>ン<sup>おほ</sup>マ<sup>おほ</sup> ム<sup>おほ</sup>ラ<sup>おほ</sup>ナ<sup>おほ</sup>カ<sup>おほ</sup>ヌ<sup>おほ</sup> ウ<sup>おほ</sup>ブ<sup>おほ</sup>ミ<sup>おほ</sup>チ<sup>おほ</sup>ナ<sup>おほ</sup>ール<sup>おほ</sup> ア<sup>おほ</sup>サ<sup>おほ</sup>ブ<sup>おほ</sup>タ<sup>おほ</sup>ティ<sup>おほ</sup> ウ<sup>おほ</sup>ム<sup>おほ</sup>ン<sup>おほ</sup>コ<sup>おほ</sup>ド<sup>おほ</sup>ウ<sup>おほ</sup> マ<sup>おほ</sup>ナ<sup>おほ</sup>コ<sup>おほ</sup>マ<sup>おほ</sup> ギ<sup>おほ</sup>ー<sup>おほ</sup>ミ<sup>おほ</sup>ル<sup>おほ</sup>カー<sup>おほ</sup> ク<sup>おほ</sup>ビ<sup>おほ</sup>ッ<sup>おほ</sup>チ<sup>おほ</sup>ン<sup>おほ</sup>コ<sup>おほ</sup>ヌ<sup>おほ</sup> ミ<sup>おほ</sup>チ<sup>おほ</sup>ェ<sup>おほ</sup>ー<sup>おほ</sup>コ<sup>おほ</sup>マ<sup>おほ</sup> ツ<sup>おほ</sup>ォ<sup>おほ</sup> [jarabi ʃe:ŋkemma muranakanu ʔubumitʃina:ru ʔasabutati ʔumu:ndu manama gi: miruka: kubittʃinnu mitʃe:ma tso:] (子供の頃は村中の大通りで遊んだと思っているが、今 島に行ってみると、これ ぼっちの小路なんですよ)

ウブ<sup>おほ</sup>ヤ<sup>おほ</sup>ー [ʔubujaz] (名) 母屋、「大きな家」の義。屋敷の中で中心となる、主要な建物。ト<sup>おほ</sup>ー<sup>おほ</sup>ラ<sup>おほ</sup> [to:ra] (炊事小屋) の対。明治末期頃から瓦葺きの家が建てられるようになった。家のシン<sup>おほ</sup>マイ [ʃimmai] (間取り) は、南側にイチ<sup>おほ</sup>バン<sup>おほ</sup>コ<sup>おほ</sup>ザ<sup>おほ</sup> [ʔitʃibandza] (一番座)、ニー<sup>おほ</sup>バン<sup>おほ</sup>コ<sup>おほ</sup>ザ<sup>おほ</sup> [ni:bandza] (二番座)、サン<sup>おほ</sup>バン<sup>おほ</sup>コ<sup>おほ</sup>ザ<sup>おほ</sup> [sambandza] (三番座) があり、北側には、ユ<sup>おほ</sup>コー<sup>おほ</sup> [juko:] (裏座) がある。ウ<sup>おほ</sup>ラ<sup>おほ</sup>コ<sup>おほ</sup>ザ<sup>おほ</sup> [ʊradza] (裏座) ともいう。イチ<sup>おほ</sup>バン<sup>おほ</sup>ウ<sup>おほ</sup>ラ<sup>おほ</sup>コ<sup>おほ</sup>ザ<sup>おほ</sup> [ʔitʃibanuradza] (一番裏座)、ニー<sup>おほ</sup>バン<sup>おほ</sup>ウ<sup>おほ</sup>ラ<sup>おほ</sup>コ<sup>おほ</sup>ザ<sup>おほ</sup> [ni:banuradza] (二番裏座) などがある。ウ<sup>おほ</sup>ラ<sup>おほ</sup>コ<sup>おほ</sup>ザ<sup>おほ</sup>は青年に達した息子や娘たちの寝室に当てられるのが普通であった。子供が幼小の頃は、裏座は物置きに利用するか、米倉に利用した。西側は、ナ<sup>おほ</sup>カ<sup>おほ</sup>コ<sup>おほ</sup>ザ<sup>おほ</sup> [nakadza] (土間) にして、壁側に粘土でカ<sup>おほ</sup>マ<sup>おほ</sup>チ<sup>おほ</sup> [kamatʃi] (竈) を作った。東側と南側には、コ<sup>おほ</sup>イン<sup>おほ</sup> [ʔiŋ] (縁側)、ト<sup>おほ</sup>ー<sup>おほ</sup>シ<sup>おほ</sup> [tu:ʃi] (縁) があった。

エ<sup>おほ</sup>ント<sup>おほ</sup>ウ<sup>おほ</sup>ツ<sup>おほ</sup> [ʔentutsu] (名) 煙突。共通語からの借用語。鯉節工場が鳩間島に建てられるようになって、煙突が作られるようになった。戦前、鉄筋コンクリートの納屋が建てられ、コンクリート造りの煙突も建てられたが、戦災で破壊された。例、アン<sup>おほ</sup>タ<sup>おほ</sup>ヌ<sup>おほ</sup>コ<sup>おほ</sup> カ<sup>おほ</sup>ツ<sup>おほ</sup>シン<sup>おほ</sup>ヌ<sup>おほ</sup> シ<sup>おほ</sup>ー<sup>おほ</sup>ゾ<sup>おほ</sup>ー<sup>おほ</sup>コ<sup>おほ</sup>ヤ<sup>おほ</sup>ー<sup>おほ</sup>ナ<sup>おほ</sup>ー<sup>おほ</sup> エ<sup>おほ</sup>ント<sup>おほ</sup>ツ<sup>おほ</sup>ン<sup>おほ</sup>コ<sup>おほ</sup> ア<sup>おほ</sup>リ<sup>おほ</sup>コ<sup>おほ</sup>ブ<sup>おほ</sup>タ<sup>おほ</sup> [ʔantanu kɔtsuʃinnu ʃi:dzo:ja:na: ʔentotsun ʔaributa] (東の鯉船の製造屋には煙突もあっていて《あった》)

オー<sup>おほ</sup>コ<sup>おほ</sup>ヌ<sup>おほ</sup>・ヤ<sup>おほ</sup> [ʔo:nu-ja:] (名) ①「豚の家」の義。豚舎。コ<sup>おほ</sup>ン<sup>おほ</sup>ケ<sup>おほ</sup>ー<sup>おほ</sup> [ʔoŋke:] (豚舎) ともいい、オー<sup>おほ</sup>コ<sup>おほ</sup>ヌ<sup>おほ</sup> マ<sup>おほ</sup>キ<sup>おほ</sup> [ʔo:nu maki] (「豚の牧」の義か。豚舎) ともいう。②豚小屋のよ



うに汚れて、掃除をしていない家に対する蔑称としても用いられる。「汚い家」の意。

石積みの豚舎は、屋敷の北西の角を利用して作るのが普通であった。石垣を、円字形に積み、二室（二牧）に二頭飼育したり、多頭飼育したりした。豚舎の中は石畳を敷き、汚水を流せるようにした。茅を投入して敷き、豚に踏せて堆肥として利用した。昔は人糞を与えていたが衛生上の問題から禁止された。豚舎には、ヤダン<sup>マ</sup>ブレ [jadambure]（ソデガイの仲間）を吊して、ヌキ<sup>マ</sup>ムヌ [nukimunu]（魔除け）とした。豚舎の神は魔除けの力が大きいと信じられていた。夜、外で魔物におそわれたりした時は豚舎に行って豚を起こすことにより、憑き物が落ちると信じられていた。

オシ<sup>マ</sup>イレ [ʔoʃiire]（名）押入れ。布団などを収納、保管しておく所。標準語からの借用語であろう。二番座のトゥクニ [tɯkuni]（仏壇）の西側に幅半間、高さ1間を上、下二段に仕切って作った上半分の部分。下半分はトゥダ<sup>マ</sup>ナ [tudana]（戸棚）といい、酒器類を収納しておくのに用いた。例、オシ<sup>マ</sup>イレナー ヲウズ タク<sup>マ</sup>ミ イリリ<sup>マ</sup>ヨー [ʔoʃiire na: ʔudzu tɯkumi ʔiririjor]（押入れに布団を畳んでいれなさいね）

オン<sup>マ</sup>ギ [ʔoggi]（名）「扇」の義。総称。あおいで涼をとる道具。クバオンギ [kuba-oggi]（くば扇）、セン<sup>マ</sup>スル [sensuru]（せんす）、ブドウル・オンギ [buduru-oggi]（踊り用扇）、ミルクヌ・オンギ [mirukunu-oggi]（弥勒神の持つ扇）などがある。団扇に対してもオンギという。例、<sup>マ</sup>ドゥク <sup>マ</sup>アツァティ オン<sup>マ</sup>ギシ アウ<sup>マ</sup>リティル ヤットウ<sup>マ</sup>シ ニバシタ [duku ʔatsati ʔoggifi ʔauritiru jattufi nibafita]（あんまり暑いので、扇であおって、やっとのことで寝かせた）

オンギ<sup>マ</sup>ドウル [ʔoggiduru]（名）「扇とり」の義か。親が子供を寝かせるために、クバ扇をあおいで風を起こしてやること。夏の暑い時期は、子供のために、母親も横になりながらパタパタ扇をあおいで、とうとう自分も寝てしまって、時たま無意識のうちに手を動かして扇を煽いで寝かせていた。そういう動作をオンギ<sup>マ</sup>ドウル スン [ʔoggiduru sug]（扇どりをする）といった。オンギ<sup>マ</sup>ドウル シー<sup>マ</sup> ニバシタ [ʔoggiduru ʃi: nibafita]（扇どりをして寝かせた）

オンギ<sup>マ</sup>ヌ カジ [ʔogginu kadʒi]（連語）「扇の風」の義。昔から扇を煽って起こす風は薬だといわれていた。子供に対しても適度に涼風を送ることができるし、病人に対しても、病状に応じて扇を煽って、涼しい風を送り看病することができたからである。例、オンギ<sup>マ</sup>ヌ カゼー フチ<sup>マ</sup>ル ヤリバ<sup>マ</sup> アツァ <sup>マ</sup>ピンマー オン<sup>マ</sup>ギ ッフィーリ<sup>マ</sup>バ [ʔogginu kadze: Φɯtʃiru jariba ʔatsa pimma: ʔoggi fʃi:riba]（扇の風は薬だから暑いときは煽いでやりなさいよ）

オンケー [ʔogke:]（名）「豚の家」の義か。豚舎。便所のこと。<sup>マ</sup>フル [Φuru] ともいう。屋敷内では、フルの神は最も霊力が高いと信じられている。外出していて、何か「憑き物」にとりつかれた場合、帰宅して豚舎の豚を起こすと、「憑き物」は落ちるといわれて

いる。口碑によると、フル<sup>ツ</sup>ヌカン [Φ<sup>u</sup>runukaŋ] (フル神) は、日頃は頭を地面につけて、尻を立てて寝ているという。豚舎の軒には、ヤダンブレ [jadambure] (さそりがい) を吊して魔除けとした。昔は便所と豚舎が一つになっていて人糞を与えていたが、戦後、衛生上の問題から禁止され、豚舎から切り離された。例、ユー<sup>ル</sup> ミチ<sup>ツ</sup>ナーティ<sup>ツ</sup> ム<sup>ツ</sup> ヌン<sup>ツ</sup> ウソー<sup>リ</sup><sup>ツ</sup>カー ヤー<sup>ツ</sup>キー<sup>ツ</sup> オンケー<sup>ツ</sup>パルカー ウティ<sup>ツ</sup>ルン<sup>ツ</sup> ツォー [ju:<sup>u</sup>ru mitʃina:ti munun ʔuso:rika: ja:ki: ʔogke: ʔparuka: ʔuti<sup>u</sup>run tso:] (夜、道でモノ<sup>ツ</sup> 《悪霊》におそわれると《とりつかれると》、家に来て便所に入ると落ちるそうだ)。

オー<sup>ツ</sup>ヌ・マキ [ʔo:nu-maki] (名)「豚の牧」の義か。豚舎のこと。オー<sup>ツ</sup>ヌ・ヤー [ʔo:nu-ja:] (豚の家) ともいう。屋敷の北西部に石垣を円字形に積み、テーブルサンゴでカタピサ<sup>ツ</sup>・ヤー [kətapisa-ja:] (片平屋根) をかけたり、木で屋根を作り、茅で葺いたりして豚を飼育するために作った所。普通の農家では、一戸に3～4頭の豚を飼育していた。豚舎の床は石畳みを敷き、トーニ [to:ni] (「田舟」の義か。60～70センチの長さの木材を削りぬいて舟形に作った「飼い葉桶」) を置いて飼料を与え、飼育した。畑の帰りにイモカズラや茅を刈りてきて投入した。豚はイモガラスもよく食べるし、煮イモや生イモもよく食べる。夏はカツオの頭を煮てそのだし汁とイモを混ぜて与えた。冬場はタク<sup>ツ</sup>ヌ フル [takunu Φ<sup>u</sup>uru] (蛸の墨袋) などをだし汁にして飼料を作って与えた。例、ムカ<sup>ツ</sup>セー マー<sup>ツ</sup>ン<sup>ツ</sup>ナーン オー<sup>ツ</sup>ヌマケー アリ<sup>ツ</sup>ブタ [mukase: ma:nna:n ʔo:nu-make: ʔaributa] (昔はどこにも《どの家にも》豚舎はあった)

カー [ka:] (名) 井戸。「カワ」の転か。「川」は、「カーラ」といい、「井戸」と区別されている。村井戸として、シンタ<sup>ツ</sup>・カー [ʃinta-ka:] (「後の井戸」の義、西村の井戸)、ウイヌ<sup>ツ</sup>・カー [ʔuinu-ka:] (「上の井戸」の義、中岡の北側にある井戸)、アンヌ<sup>ツ</sup>・カー [ʔannu-ka:] (「東の井戸」の義、東村の井戸)、パチンガ<sup>ツ</sup>・カー [pəʃiŋga-ka:] (「初井戸」) の義か。ウイヌ<sup>ツ</sup>・カーの側にある)。サクラ<sup>ツ</sup>・カー [səkra-ka:] (「塩辛井戸」) の義か。タチバル [tatʃibaru] の海岸近くのウブシケー [ʔubʃike:] 《大城家》の畑の側にある井戸。現在は埋まりかけている) などの井戸がある。主として、インヌ<sup>ツ</sup>・カー、アンヌ<sup>ツ</sup>・カー、ウイヌ<sup>ツ</sup>・カーの水を生活用水として用いた。アンヌ<sup>ツ</sup>・カーは、ウリ<sup>ツ</sup>カー [ʔurika:] (自然の鐘乳洞が地表から約30メートル地下に、斜坑状に形成され、最底部に湧水が溜まるのを利用した井戸) になっており、水量も多かった。ウイヌカーの水は最も甘くおいしいといわれていた。村井戸から水を汲み、タン<sup>ツ</sup>グ [taggu] (水担桶) に入れて家へ運ぶ仕事は主として娘たちが担当した。夏の旱天が続くと、順番で水を汲み、水の湧くのを待って夜を徹することもあった。例、<sup>ツ</sup>シンタ<sup>ツ</sup>・カー<sup>ツ</sup>ラ ミジ<sup>ツ</sup> カタ<sup>ツ</sup>ミクー [ʃinta-ka:re midʒi katamiku:] (後の井戸《西村の井戸》から水を汲んで担いできなさい)

カー<sup>ツ</sup>ラ [ka:ra] (名) 瓦。粘土を一定の形に成型し、焼成した屋根葺き用材。ウー<sup>ツ</sup>ガー<sup>ツ</sup>ラ

[<sup>2</sup>u:ga:ra] (雄瓦), ミーガー<sup>ラ</sup> [mi:ga:ra] (雌瓦) の二種がある。屋根のユチル [jutjiru] (えつり) に粘土をこねて乗せ、雌瓦を二枚ずつ重ねて並べていき、その継ぎ目に粘土を乗せて、さらにその上に雄瓦を被せ、連結して葺きあげていく。最終的には、継ぎ目に漆喰を塗って固定させ、屋根葺きを完成させる。例、<sup>ラ</sup>ミツァ クナシティ<sup>ラ</sup> ユチル<sup>ラ</sup>ナ ヌーシティ ウン<sup>ラ</sup>ナ ミーガー<sup>ラ</sup> ニンマイ<sup>ラ</sup>ナー カサビ<sup>ラ</sup> ナラビティ ウヌ<sup>ラ</sup> シギフチ<sup>ラ</sup>ナ <sup>ラ</sup>ミツァ ムリティ ウーガー<sup>ラ</sup> カバ<sup>ラ</sup>セーティ カー<sup>ラ</sup>ラヤーヤ フコー<sup>ラ</sup>ツタ [mitsa kunafjiti jutjiruna nu:fiti <sup>2</sup>unna mi:ga:ra nimmaina: kasabi narabiti <sup>2</sup>unu fiji Φ<sup>ラ</sup>utjina mitsa muriti <sup>2</sup>u:ga:ra kabaseti karaja:ja Φ<sup>ラ</sup>ko:tta] (粘土をこねてエツリに乗せて、それに雌瓦を二枚ずつ重ね並べてその継ぎ目に粘土を盛って被せ、瓦屋根を葺いたものだ)

カーラ<sup>ラ</sup>シキ [ka:ra:fjiki] (名) 瓦しき。瓦で屋根を葺く際に、軒の先端部分に幅約5寸の鋭三角形の板を打ちつけたもの。瓦がずり落ちないように、瓦どめの機能をもたせた板。通常は角材を対角線に製材したものを使った。フクンキー [Φ<sup>ラ</sup>kuŋ-kii] (福木) などを多く利用していた。例、タルキ<sup>ラ</sup>ヌ ウイ<sup>ラ</sup>ナ カーラ<sup>ラ</sup>シキ <sup>ラ</sup>ウキティ フン<sup>ラ</sup>ウティ [tarukinu <sup>2</sup>uina kd:ra:fjiki <sup>2</sup>ukiti Φ<sup>ラ</sup>un <sup>2</sup>uti] (垂木の上に瓦しきを置いて釘を打ちつけなさい)

カイ [kai] 筥。「筥<sup>け</sup>, 盛<sup>け</sup>食器也」(『和名抄』)とある。鳩間島では木製の衣装箱をいった。「長持」のこと。衣類や調度品などを入れるに用いる。簞筥が家庭に出まわる以前は、このカイ [kai] が嫁入り道具の一つとして重宝された。例、<sup>ラ</sup>アボー タンシ<sup>ラ</sup>トゥ カイヤー<sup>ラ</sup> マナー<sup>ラ</sup>マ<sup>ラ</sup>キン ヤー<sup>ラ</sup>ナー <sup>ラ</sup>アン [<sup>2</sup>abo: tanʃitu kaija: manama:kin ja:na <sup>2</sup>aŋ] (お母さんの簞筥と衣装入れの筥<カイ>は、今まである)

カイ [kai] (名) 「筥」の義。衣類を入れる箱。衣類を入れておく長方形の蓋のある箱。長持ち。大正頃までの嫁入り道具の一つとされていた。例、ワッ<sup>ラ</sup>テヌ <sup>ラ</sup>アボー <sup>ラ</sup>ニービキヌ <sup>ラ</sup>バス ムティ オー<sup>ラ</sup>ツタ カイヤー<sup>ラ</sup> マナー<sup>ラ</sup>キ アン<sup>ラ</sup> [wattenu <sup>2</sup>abo: ni:bikinu basu muti <sup>2</sup>o:tta kaija: mana:ki <sup>2</sup>aŋ] (あなたの家のお母さんが嫁入りのときにもってこられた筥は今まで<今も>ありますか)。

カイダン [kaidaŋ] (名) 階段。借用であろう。長い段。ナカン<sup>ラ</sup>ブレ<sup>ラ</sup>ーミチ [nakambure:mitʃi] (中岡へ通ずる道) や、ウイヌ<sup>ラ</sup>・ウガン [<sup>2</sup>uinu-ugaŋ] (友利御願) にはコー<sup>ラ</sup>セー<sup>ラ</sup>マ・イシ [ko:se:ma-iʃi] (砂岩) を削って作った階段の道がある。例、ウイヌ<sup>ラ</sup>・ウガン<sup>ラ</sup>ヌ ペー<sup>ラ</sup>リ<sup>ラ</sup>・フ<sup>ラ</sup>チュー カイダン<sup>ラ</sup> ナリ ブー<sup>ラ</sup>ダー [<sup>2</sup>uinu-ugannu pe:ri-Φ<sup>ラ</sup>utʃe: kaidan nari bu:da:] (友利御願の入り口は階段になっているよ)

カキ [kʰaki] (名) 「<sup>カキ</sup>垣」のこと。垣根。竹やススキで作った垣根のこと。鳩間島では石を積んで作った屋敷の「石垣」を特にグス<sup>ラ</sup>ク [gusuku] というが、海の「魚垣」として積む石垣は、「カキ」[kʰaki] という。田の猪垣は、ター<sup>ラ</sup>ヌ カキ [ta:nu kʰaki] (田の垣)

といい、ターヌ カキ フムン [ta:nu k̄aki Φumug] (猪垣を編む) という。カキウクスン [k̄aki ʔukusug] (魚垣を積む) のようにいう。西表島の北岸、伊武田の海岸に積まれた魚垣は、深い所で、約80センチ程度に積まれていた。干潮時には、魚垣の一部分の石積を崩してサバニ (アイダフニ [ʔidaΦuni] 「板舟」の義か) を出し入れしなければならなかった。舟の出し入れが済むと、石垣をもとにもどしておいた。猪垣を積むことを、シー ウクスン [ʃi: ʔukusug] ともいう。猪垣を積んで囲った所を、シーヌウチ [ʃi:nu-utʃi] といい、伊武田地域をそう呼んでいる。

カキソージ [k̄akisodʒi] (名) 掃除。「掻き掃除」の義か。庭の塵を掻き取ったり、掃いたりしてきれいにすること。例、ヤーヌ カキソージン サリティ イッケナ アザケーン ダー [ja:nu k̄akisodʒi:n sariti ʔikkena ʔadzake:n da:] (家の中の掃除もなされており、大変清潔だよ)。ソージ [so:dʒi] (掃除) の強調表現。

カキナー [k̄akina:] (名) 「掛け縄」の義か。茅葺きの家の躰を作る際、シダル [ʃidaru] (竹簾) を被せて、その上からフーカラジナ [Φu:kara-dʒina] (棕櫚の繊維で編んだ縄) を掛けわたして、ヨー [jo:tʃi] (棟に両側から差しこんだティブク《手矛》で、躰を固定するもの) に掛け、引き締めて躰を固定するに用いる縄。風雨に晒されても腐敗しにくい、棕櫚の繊維で編むのが一般である。

カクガニ [k̄akugani] (名) 「角鉄」の義か。角鉄材のこと。鋼材の意。比喩表現の一つで、鋼材のように強い建築用材木の意。古謡「アーパーレー」の中に謡われている。「かくがにはば ぱらーばし やーばすくりあんです (以下略)」(鋼材のように強い材木で家を作っているという) の意。五寸角、六寸角の角材で家を建築することができるということは最高の喜びであり、そのような角材を「カクガニ」と表現した。

カサ [k̄asa] (名) 「傘」の義か。ランプヌカサ [rampunu-k̄asa] (ランプの傘) ともいう。ランプにつける傘状の反射板。ガラス状の厚さ約3ミリ程度の円形をしており、中心部は火屋が通過できるよう、直径約6センチほどの穴がある。ランプの ヤマ [jama] (針金でできた枠) にはめる。例、ランプヌ カサ ウタシ バリナーヌ [rampunu k̄asa ʔutaʃi barina:nu] (ランプの傘を落して割ってしまった)

カザリ・クビン [kadzari-kubiŋ] (名) 「飾瓶」の義か。白磁製の大型燗瓶。錫製のものもある。カンニンガイ [kanniggai] (名) 「神願い」、神行事の際に用いる。紅白の紙を重ねて折り、山型の三角錐状に折って、瓶の栓とした。正月や祝儀の際にも酒を入れて床の間の神前に供えた。重箱にパナングミ [panaggumi] (初米) を盛ったものの左右にカザリクビンを置いて神前に供えた。紅白の紙でヅァウ [dzau] (栓) をさして飾った。

カジバナ [kadʒibana] (名) 風がよくあたる所。台風などが直に当たる所。強風が吹きつける所。普通は海岸ばたの、防風林(フクン [Φukun] (福木) やガジマル [gadʒimarun] (カジマル・榕樹) がなくて、海風や台風などが直接吹きつけるような所をいう。例、

クマー カジバナ ヤルンダ カジボーン<sup>ㄅ</sup> パジ<sup>゛</sup>ダー<sup>ㄅ</sup> [kuma: kadʒibana jarunda kadʒibo:m padʒi da:] (ここは風のよく当たる所だから、風が強いはずだよ)

カシンガイ [kəʃiŋgai] (名)「銚」の義。かすがい(銚)。「録 加須加比」(『新撰字鏡』)「拳銚 阿介須須加比」(『和名抄』)。木材や板などの接合部分をつなぎとめる<sup>ㄣ</sup>型の釘。イダフニ(板舟)をパウ [pau] (接ぐ)時に、板の接合部分に軽く打って、ずれないように固定し、タキフン(竹釘)やフンドゥを入れるために用いる工具。梁と桁の間に打つこともある。例、フー<sup>ㄅ</sup>タイナー カシン<sup>ㄅ</sup>ガイ ウティ [Φu:taina: kaʃiŋgai ʔuti] (梁に銚を打ちこめ)

カタジキ<sup>ㄅ</sup>ルン [kəʔadʒikiruŋ] (動)かたづける。カタジキラヌ [katadʒikiranu] (片づけない), カタジ<sup>ㄅ</sup>キティ [kəʔadʒikiti] (片づけて), カタジキ<sup>ㄅ</sup>プサン [kəʔadʒikipusaŋ] (片づけたい), カタジキ<sup>ㄅ</sup>ルカー [kəʔadʒikiruka:] (片づけたら)。例、クヌ シグトゥ カタジ<sup>ㄅ</sup>キティ マーズン<sup>ㄅ</sup> パラ [kunu ʃigutu kəʔadʒikiti ma:dzum para] (この仕事を片付けて一緒に行こう)

カチリカザ [kəʔʃirikadza] (名)豚の飼料などが腐敗しかけたときに放つ臭気。鯉節工場などの鯉の煮汁が腐敗しかけたときの臭気に対してもいう。例、シーゾーヤ<sup>ㄅ</sup>ヌ イズネーシジルヌ<sup>ㄅ</sup> ッサリティ カチリカザ シー<sup>ㄅ</sup> ンカーラヌ [ʃi:dzɔ:janu ʔidzune:ʃidʒirunu ssariti kəʔʃirikadza ʃi: ʔɯka:ranu] (製造屋≪製造工場≫の魚を煮る煮汁が腐敗して、カチリカザがしてとても側に寄れない)

カツァ [katsa] (名)蚊屋、蚊張。夏季になると蚊が発生するので、それを防ぐために寢床に吊す網状のとばり。麻糸で編んだ細目の網状のとばり。六畳用、四畳半用、八畳用の蚊屋があった。蚊屋の四隅、また六箇所、に、カツァヌ<sup>ㄅ</sup>・ミン [kəʔsanu-miŋ] (「蚊屋の耳」の義。蚊屋吊り)をとりつけて、それを部屋の四隅につけた吊り具にかけて吊した。ガザン<sup>ㄅ</sup>ヌ ブンダ<sup>ㄅ</sup> カツァ ピキ [gadzannu bunda kəʔsa piki] (蚊がいるので蚊屋を引け≪吊りなさい≫)

カツァヌ<sup>ㄅ</sup>・ミン [kəʔsanu-miŋ] (名)「(蚊屋)蚊張の耳」の義。蚊屋の四隅または六箇所につけてある吊り具。蚊屋吊りのこと。吊り手の先に金属製の輪っか(直径約5センチほどのもの)をとりつけてあった。これを部屋の四隅または六箇所から吊した、吊り糸に結んで蚊張を吊ったものである。例、ニビスクチナー<sup>ㄅ</sup>ティ カツァヌ<sup>ㄅ</sup>ミン ピキ・キシナー<sup>ㄅ</sup>ヌ [nibisʉkuttʃinarti kəʔsanu-mim piki:ʃi:na:nu] (寝相が悪くて蚊屋の耳を引き切ってしまった)。

カトン<sup>ㄅ</sup>クン [kəʔoŋkuŋ] (動)①傾く。②横になる。カトンカ<sup>ㄅ</sup>ヌ [katɔŋkanu] (傾かない。横にならない), カトン<sup>ㄅ</sup>キティ [kəʔoŋkiti] (傾いて、横になって), カトンキン<sup>ㄅ</sup>ギサン [kəʔoŋkiŋgisəŋ] (傾きそう、横になりそう), カトン<sup>ㄅ</sup>クカー [kəʔoŋkuka:] (傾いたら、横になったら)。例、ンメー<sup>ㄅ</sup>マナー カトン<sup>ㄅ</sup>キティ カーリ<sup>ㄅ</sup>バ [ʔmme:mana kəʔoŋkiti

kariba] (少しずつ横になってから、交替しなさいよ)

カナ [kana] (名) 鉋。木材の面を削って平滑にするための工具。幅約9センチ、長さ約25センチ、厚さ約4センチのㇿカシンキー [kafɕinki:] (オキナワウラジロガシ) の台木に刃を斜めに勾配をつけて仕こんだもの。例、クヌ キーㇿヤ アラキジ シーㇿ シケーバ カナㇿ シキㇿ ヨー [kunu ki:ja ʔarakidzi ʃi: ʃike:ba kana ʃikijo:] (この木は荒削り<<粗削り>>してあるので、鉋をつきなさい<<鉋をかけなさい>>ね)。

カナックル [kanakkuru] (名) 「鉋殻」の義か。鉋をかけるときに、削り殻が紙をくると巻きとるように出てくるもの。よくきれる鉋で、腕のたつ職人が鉋をかけると、2メートルも、3メートルも切れずに連続して出てくるものだった。これを乾燥させると、焚きつけ用に利用され、重宝された。例、カナックル アツァㇿミ ㇿキー ピー タシキㇿリ [kanakkuru ʔatsami ki: pi: tafɕikiri] (鉋くずを集めてきて火を焚きつけなさい)

カナックル [kanakkuru] (名) 鉋屑のこと。「鉋殻」の義か。木材や板に鉋をかけるとき、紙のように薄い削り屑が出てくる。島の人々は、これを集めて焚き付けに用いた。例、ヤースクリヤーㇿヌ ㇿトンラ カナックル イーㇿリキー ピー タシキㇿムー シーㇿバ [ja:sɕurija:nu tonra kanakkuru ʔi:riki: pi: tafɕikimu: ʃi:ba] (家造り家<<建築現場、家を造っている家>>の所から鉋屑を拾ってきて焚き付けにきなさいよ)

カナダライ [kanadarai] (名) 「金盥」の義。金属製の盥。戦後、ジュラルミンや亜鉛などで作られたものが出まわった。木製の盥は重く、乾燥すると水もれしたが、金属製のはそれがなく普及するのが早かった。例、カナダライヤㇿ ティダナ プスㇿタンティン サリル ソーヤ ナーㇿㇿセン [kanadaraija tidana pɕsutantin sariru so:ja na:nseg] (金盥は太陽に干しても乾燥する心配もなかった)。

カニフン [kaniɸun] (名) 「金釘<sup>カネクギ</sup>」の義。鉄製の釘。イッスンㇿクギ [ʔissunɕugi] (一寸釘)、サンズンㇿクギ [sandzunɕugi] (三寸釘)、ゴッスンㇿクギ [gossunɕugi] (五寸釘) などがある。壁板には、イッスンㇿクギ (一寸釘) か、シチブㇿㇿクギ [ʃitɕibu-kugi] (七分釘) などを使った。「釘 久岐<sup>くぎ</sup>、鉄杙也」(『和名抄』) とある。例、カニフンㇿシ イツァㇿクビㇿウティ [kaniɸunʃi ʔitsakubi ʔuti] (鉄釘で板壁をうちなさい)

カビㇿ・ウズ [kabiudzu] (名) 「被り布団」の義。掛け布団のこと。kaburi→kabiudzu のように音韻変化して形成された語。鳩間方言では、布団は、ㇿカブン [kabun] (被る) という。子供らは、布団を頭から被って寝たので、冬期には唇がカラバル [karabaru] (あかぎれ状に唇が切れること) する子が多かった。例、オシㇿイレラー カビㇿウズ ウラㇿシ [ʔoʃiirera: kabiudzu ʔurafi] (押し入れから掛け布団を降しなさい)

カビオンギ [kabioggi] (名) 「紙扇」の義。団扇のこと。幅約2センチ、長さ約30センチの竹を、柄の部分に10センチほど残し、他を細く割って骨とし、それに紙を張って円形の団

扇にしたもの。沖縄や石垣あたりから輸入してきたもので、豊年祭などのお祭りのときに使っていた。紙製のため、長もちしなかった。例、カビオンゲー カイ<sup>1</sup>ヤー アル<sup>1</sup>ヌ ナガムテー サヌ [kabiŋge: kaija: ʔarunu nagamute: sanu] (紙扇はきれいではあるが長もちはない)

カマイ<sup>1</sup>・ヌ・カキ [kamai-nu-kaki] (連語)。「猪の垣」の義。猪害を防ぐために作った垣。直径3センチ～4センチの若木や木の枝で、高さ約6尺の垣を編み田を囲ってあるもの。約3センチ間隔に若木や枝木を土に刺し込んで、上、中、下段に横木をわたして、それにクー<sup>1</sup>ジ [ku:dzi] (とうずるもどき) で強く結び、編みわたしたもの。例、カマイ<sup>1</sup>ヌ カキ<sup>1</sup> フミ スーラ<sup>1</sup>スン [kamainu kaki Φumi su:rasuŋ] (猪垣を編んで強化する) カマチフチ [kamatji Φɯtji] (名)「竈口」の義か。台所のこと。シム [ʃimu] (下) ともいう。カマチフチ・マール [kamatji Φɯtji-ma:ru] (台所まわりをすること、台所漁りをする) は、男の場合、恥かしいこととされていた。マーキ [ma:ki] (薪、木を割って乾燥させた薪) のない時は、ススキの枯れたのを燃料としたので、竈の前は枯れ葉が散乱して火事になりやすいとして特に気を配った。

カムイ [kamui] (名) 鴨居。障子や襖、戸などをたてるために、上部にかけわたす溝のある横木。普通二条の溝を掘って用いる。「鴨柄 功程式云鴨柄賀毛江 今案本文未詳」(『倭名類聚鈔』) とある。雨戸の場合にも、上部の溝付きの横木をカムイという。例、カムイヌ<sup>1</sup> ミー プリ<sup>1</sup>ヨ<sup>1</sup>ヌ ダー<sup>1</sup>ツサ ナー<sup>1</sup>ヌ [kamuinu mi: purijo:nu da:ssa: na:nu] (鴨居の溝の掘り方が、あまりよくない)

ガヤー [gaja:] (名) 茅。<sup>1</sup>ガー [ga:] ともいう。マーガヤ [ma:gaja] (「真茅」の義か。鍋蓋などを編むのに用いる長い茅。約150センチほどの長さがある)。ガヤー<sup>1</sup>・ヌー [gaja:nu] (茅の生えた原野)、ガヤー<sup>1</sup>・スリ [gaja:suri] (茅刈り)。例、<sup>1</sup>ガヤー <sup>1</sup>スリ キー <sup>1</sup>ヤー フキ<sup>1</sup> ヨー [gaja: suri ki: ja: Φɯki jo:] (茅を刈りてきて、屋根を葺きなさいね)

ガヤー<sup>1</sup>クビ [gaja:kubi] (名)「茅壁」の義。茅で葺いた壁のこと。現在は、小屋などの壁を葺く際に用いるが、昔は母屋の壁も茅で葺いた家が多かったという。「新室の壁草刈りにいまし給はね」(『万葉』-2351) はそれを忍ばせる。壁にする部分に棧を入れ、柱と柱を連結して、ユチル [jutʃiru] (えつり) を編む。その上に、下から順に茅を並べてティ<sup>1</sup>ブク [tibuku] (木茅) で押さえ、締め縄で締めて上へと葺きあげていく。

ガヤー<sup>1</sup>・ヌー [gaja:nu:] (名)「茅野」の義。ガー<sup>1</sup>・ヌ [ga:nu:] ともいう。原野一般をさす。畑が放置されて茅が生えるような状態に荒れている様にもいう。例、ウシクラシム ノー<sup>1</sup> パタキ<sup>1</sup>ヌ <sup>1</sup>ツサーンツァン ソーラムティ<sup>1</sup> ガヤー<sup>1</sup>・ヌー <sup>1</sup>ナシ <sup>1</sup>シケー [ʔuʃikuraʃimuno: pʌtakinu ssa:ntsʌn so:ramuti gaja:nu: nafi ʃike:] (怠け者めが、畑の草も取らずに《除草もせずに》、茅野にしてあるよ《畑を荒れさせて放置してあ

る≫)

ガル [garu] (名) あかり (明) の義。灯。灯火。トゥールヲヌ ガル [tu:runu garu] (ランプの明り)。例, パトゥマナ デンキヲヌ シカリヲター パトゥマヌヲ ヤーヲヌ ガロー ウイバローヲラーン フノーヲラーン ミラリヲス ダーヲ [pātumana daḡkinu ſ̄j̄karita: pātumanu ja:nu garo: ʔuibaro:ra:n Φuno:rara:m mirarisu da:] (鳩間に電気がついたので, 鳩間の家の明りは上原村からも, 船浦部落からも見られるよ)

カndan・イシ [kandan-ifi] (名) 家の軒下の部分を庭先の地面より約1尺ほど盛土して上げ, 山石などを削って縁どり用に並べてある石。例, ヤドゥヲフチェーラ クルビヲ ウティティ カndanヲイシナー スブヲル バリヲ シケー ツォー [jadu Φʉtʃe:ra kurubi ʔutiti kandanʔiʃina: suburu bari ſ̄j̄ke:] (戸口より転んで落ちて, かんだん石に頭を打って怪我してある)

カンビン [kambig] (名) 「燗瓶」の義か。神事の際に酒を入れて供えるのに用いる。細長くて口のせまい, 酒を入れるための陶製の容器。例, カンビン フタックヲナー サキサイティヲ ッスヲカビシ ヲザウ スクヲリティ ヲッシ ヲシケーモー ウヤプスヲヌ ヲマイ シ キ ヲ バ [kambin Φʉtakkuna: s̄aki saiti ssukabiʃi dzau s̄ȳkuriti ſ̄fi ſ̄j̄ke:mo: ʔujapusunu mai ſ̄j̄kiba] (燗瓶二個に酒を注いで, 白紙で栓を作ってさしてあるものは先祖の前に供えなさい)

キー・アイヲク [ki:aiku] (名) 「木杓」の義。木製の杓。水桶で水を運び際に, この木製の杓を用いた。天秤棒。両端に荷をかけて担ぐ木製の天秤棒。ヲカシンキー (オキナワウラジロガシ) や, シターヲマキー (エゴノキ) 等の若木を利用して杓を作った。例, キーアイヲクシ ミジタンクヲ カタヲミ ミジ フミクー [ki:aikufi midʒitaggu k̄atami midʒi Φumiku:] 木杓で水桶をかついで, 水を汲んできなさい)

キーツカラ [ki:kkara] (名) 木屑。材木をはつたときに出る削り殻のこと。「木殻」の義か。木材をはつて角材に仕上げていく際に, 削り屑として出てくる木屑。木っ端。木片。例, ヲキー キジオーヲル ヲトンナー キッカラーマヲヌ イッパヲイ ヲアリ ベーヲティ プ サ イ ヲ クー [ki: kidʒio:ru tonna: kikkara:manu ʔippai ʔari beʔti p̄saiku:] (木を削っておられるところには木っ端がたくさんあるので拾ってきなさい)

キーバキ・ヌキヲル [ki:baki-nukiru] (名) 木材を切る鋸。これで薪などを切った。山鋸では薪炭用の木を切ることは許さなかった。家庭で薪炭用の木を切るに用いる鋸は, 山鋸を廃棄したものである場合が多かった。例, キーバキ・ヌキヲルセー ヤマヲワザー シララヌ [ki:baki-nukiruse: jamawadza: ſ̄iraranu] (材木用の鋸では, 山仕事はできない)

キーヲパク [ki:p̄aku] (名) 木箱。杉で作った箱。ヲガンガンパク [gaggamp̄aku] (鉄板で作った箱) やカニパク [kanipaku] (鉄箱) の対となるもの。例, ヲガンガンパコー サビフイヲスバ キーヲパクナ イリリヲヨー [gaggam-p̄ako: sabiΦuisuba ki:p̄akunaʔiririjo:]



(鉄板製の箱は錆びるから、木製の箱に入れなさいね)。サー<sup>7</sup>ヤ キー<sup>7</sup>パクナ イリリ<sup>7</sup>  
[saɽja ki:pəkuna ʔiriri] (茶は木箱に入れなさい)

キー<sup>7</sup>フタ [ki:ɸɯta] (名) 木製の蓋。普通は松や杉の五分板を利用して作った。汁物を煮る鍋の蓋はキー<sup>7</sup>フタ (木蓋) が一般的に用いられた。イモを煮るシンマイ<sup>7</sup>ナビ [ɕimmainabi] (四枚鍋, 大鍋) の蓋は、茅を乾燥させて編んだ円錐状の蓋を用いた。鍋蓋といえば一般的にそれをさし、木製の蓋をキー<sup>7</sup>フタと特称した。例、スーナビ<sup>7</sup>ヌ キー<sup>7</sup>フタシ フタ フィ<sup>7</sup>バ [su:nabinu ki:ɸɯtaɕi ɸɯta ɸuiba] (汁鍋の木蓋で蓋をしめなさいよ)

キー<sup>7</sup>・フン [ki:ɸɯŋ] (名) 「木釘」の義。「栓 岐久岐 木釘也」(『和名抄』)とある。柱や桁材に直径約2センチほどの穴をあけて、それにカシンキー [kaɕiŋki:] (オキナワウラジロガシ) で作った棒状の木釘を打ちこんでジョイント部分を強化するもの。大形ドリルで予め穴をあけ、それに木釘を打ち込む。

キー<sup>7</sup>ボーン [ki:boŋ] (形) 煙たい。キー<sup>7</sup>ボナー<sup>7</sup>ヌ [ki:bo:na:nu] (煙たくない), キー<sup>7</sup>ボナルン [ki:bo:naɾuŋ] (煙たくなる), キー<sup>7</sup>ボーカー [ki:bo:ka:] (煙たかったら)。例, <sup>7</sup>アイ スン<sup>7</sup>ケン キー<sup>7</sup>ボーカー ワー<sup>7</sup> カマチフチェー クーン<sup>7</sup>ブリバ [ʔai suŋkeŋ ki:bo:ka: wa: kamatɕi ɸɯtɕe: ku:na] (あれほど煙たいのなら、君は 竈ぐち《へっついのまわりに》へは来ないでおりなさいよ《来るなよ》)。

キー<sup>7</sup>マツ<sup>7</sup>ファ [ki:maffa] (名) 「木枕」の義。芳香のある木を利用して枕に作ったもの。台湾産の樟 (楠の木) は、樟腦の芳香が頭痛やのぼせ (逆せ) の持病に効くといって枕の材料に重用された。例、キー<sup>7</sup>マツ<sup>7</sup>ファ サン<sup>7</sup>カー ヌビ<sup>7</sup>カジ コー<sup>7</sup>リティ <sup>7</sup>バーニバラヌ<sup>7</sup> [ki:maffa saŋka: nubikadzi ko:riti ba: nibaranu] (木枕をして寝ないと、首筋が凝って、私は寝ることができない)。「しきたへの吾が木枕」(『万』-2630)

キールン [ki:ruŋ] (動, 自) 消える。火が消える。キー<sup>7</sup>ラヌ [ki:ranu] (消えない), キー<sup>7</sup>ティ [ki:ti] (消えて), キール<sup>7</sup>カー [ki:ruka:] (消えたら), キーン<sup>7</sup>ギサン [ki:ŋgisan] (消えそう)。例, ピー<sup>7</sup>ヌ キールン [pi:nu ki:ruŋ] (火が消える), ギューサ ミジ<sup>7</sup>カキ ケー<sup>7</sup>スタンティン キー<sup>7</sup>ラン<sup>7</sup> ツォー [ɡju:sa midzi kɕaki ke:ɕitantiŋ ki:ran tso:] (いくら水をかけて消しても消えないそうだ)

<sup>7</sup>キタ [kɕita] (名) 桁。桁材。梁。屋根を支えるために柱の上に横にわたす材木の総称。ンニギタ [ʔnnigita] (「棟木桁」の義か) は「棟木」のこと。例, カー<sup>7</sup>ラヤーヌ <sup>7</sup>キター<sup>7</sup>イゾイキー シュ<sup>7</sup>カー<sup>7</sup>ン<sup>7</sup>カー ムタ<sup>7</sup>ヌ [ka:raja:nu kɕita: ʔidzoiki: sɕka:ŋka:mutanu] (瓦家の桁材は、イゾイ《モクコク》の木を使用しないと、もたない《瓦の重さに耐え難い》)

<sup>7</sup>キチ [kɕitɕi] (名) 垂木のこと。棟から軒へかけわたした材木。よく利用される樹種に、シター<sup>7</sup>マ [ɕita:ma] (エゴノキ) がある。<sup>7</sup>キチ [kɕitɕi] は、普通12~13センチ角のものを

いい, タル<sup>ㇿ</sup>キ [táruki] は, 直径8～9センチの丸太である。例, ヤー<sup>ㇿ</sup>ヌ <sup>ㇿ</sup>キチ キ  
シ<sup>ㇿ</sup>プス タナマ<sup>ㇿ</sup>リ フィーラ<sup>ㇿ</sup>ヌ [ja:nu kítʃi kʲiʃi-pʲusu tanamari ffi:raranu] (家  
のキチ材を伐る人として頼まれてくれないか)

-キブル [-kiburu] (助数詞)「けぶり」の義。軒。戸数を数えるときの単位。プスキブル  
[pʲusukiburu] (一軒), フタキブル [ɸʲɹtakiburu] (二軒), ミーキブル [mi:kiburu] (三  
軒), ユーキブル [ju:kiburu] (四軒), イチキ<sup>ㇿ</sup>ブル [ʔitʃikiburu] (五軒), ムーキブル  
[mu:kiburu] (六軒), ナナキブル [nanakiburu] (七軒), ヤーキブル [ja:kiburu] (八  
軒), クヌキブル [kunukiburu] (九軒), トゥーキブル [tu:kiburu] (十軒)

キボーシ [kibo:ʃi] (名) 煙。「烟 介布利」(『最勝王経音義』)。キボーシ<sup>ㇿ</sup> フチ<sup>ㇿ</sup>マルン  
[ki:bo:ʃi ɸʲɹtʃimarun] (煙がくすぶる)。タム<sup>ㇿ</sup>ノー アミ<sup>ㇿ</sup>ヌ フー<sup>ㇿ</sup>ター シミック<sup>ㇿ</sup>エ  
<sup>ㇿ</sup>リ ティ ムイラ<sup>ㇿ</sup>ヌ<sup>ㇿ</sup> キボーシ<sup>ㇿ</sup> フチ<sup>ㇿ</sup>マリ ティ キーボー<sup>ㇿ</sup>ヌ ナラ<sup>ㇿ</sup>ヌ [tamuno:  
ʔaminu ɸʲɹta ʃimikke:riti muiranu kibo:ʃi ɸʲɹtʃimariti ki:bo:nu naranu] (薪は  
雨が降ったので湿って燃えない。煙がくすぶって煙たくてしかたがない)

キンプシ<sup>ㇿ</sup>・サウ [kimpyʃi-sau] (名)「着物干し竿」の義。物干竿のこと。竹竿や木の竿が  
あった。庭に二本の股木を立て, それらに竹竿や木の竿をわたして, 洗濯物を干すのに用  
いるもの。例, キン<sup>ㇿ</sup>マー アライ<sup>ㇿ</sup> ブナシ<sup>ㇿ</sup>ティ<sup>ㇿ</sup>ティ<sup>ㇿ</sup> キン<sup>ㇿ</sup>プ・シ<sup>ㇿ</sup>サウナ<sup>ㇿ</sup>ー ヌ<sup>ㇿ</sup>キティ  
<sup>ㇿ</sup> プシバ ヨー<sup>ㇿ</sup> [kimma: ʔarai bunaʃititi kimpyʃi-sauna: nukiti pʲʃiba jo:] (着  
物は洗って, ゆすいで物干竿に貫き通して干しなさいねえ)

キンプシ<sup>ㇿ</sup>・トン [kimpyʃi-ton] (名)「着物干し所」の義。洗濯物干し場。普通はナカグス  
<sup>ㇿ</sup>ク [nakagusʲuku] (目かくし。ひんぷん)の内側や, トー<sup>ㇿ</sup>ラ [to:ra] (炊事小屋)の南  
側あたりに干し場を作った。着物干竿にかけて干したが, 昔は洗濯物をグス<sup>ㇿ</sup>ク  
[gusʲuku] (石垣)やナカグス<sup>ㇿ</sup>クなどにもかけて干していた。例, キン<sup>ㇿ</sup>プシ<sup>ㇿ</sup>・トンマ<sup>ㇿ</sup>  
<sup>ㇿ</sup>ナー アル<sup>ㇿ</sup>ワ [kimpyʃitomma: mana: ʔaruwa] (洗濯物干場はどこにありますか)

クー<sup>ㇿ</sup>スン [ku:sun] (動)こわす。クーサ<sup>ㇿ</sup>ヌ [ku:sanu] (こわさない), クー<sup>ㇿ</sup>シ<sup>ㇿ</sup>ティ  
[ku:ʃiti] (こわして), クーシン<sup>ㇿ</sup>ギサン [ku:ʃigisʲan] (こわしそうだ), クー<sup>ㇿ</sup>スカー  
[ku:syka:] (こわしたら)。例, <sup>ㇿ</sup>ヤー クー<sup>ㇿ</sup>シ<sup>ㇿ</sup>ティ ミーヤー<sup>ㇿ</sup> スク<sup>ㇿ</sup>ロー<sup>ㇿ</sup>ル ツォー  
[ja: ku:ʃiti mi:ja: sykuro:ru tso:] (家をこわして新しい家を作られるそうです)

クー スン [ku: sun] (動句)つくろう。つぎをあてる。衣類の乏しかった頃, 服の尻や,  
膝, 肘のあたりに穴があくと, 布地をあてて, 継ぎあてをした。つくろうこと。例, キン  
<sup>ㇿ</sup>ヌ <sup>ㇿ</sup>クー スン<sup>ㇿ</sup> [kinnu ku:sun] (服の継ぎを当て)。ナビ<sup>ㇿ</sup>ヌ <sup>ㇿ</sup>クー スン  
[nabinu ku: sun] (鍋の底に穴があいたのを鉄板を切って継ぎを当て, バーナーで焼  
いて接着する)

クール [ku:ru] (名)「庫裡」の義か。糶俵などを積んで保管しておく所。裏座や, トー<sup>ㇿ</sup>  
ラ [to:ra] (炊事小屋)の一角に保管場所を作って積んでおくのが一般であった。老年層

(80歳以上)の人の使用する語で若年層では死語となっている語である。例、ベーㇿヌㇿ  
クロー ウブヤーㇿヌ サンㇿヌパー ㇿシヌナー アㇿㇿタ [be:nu ku:ro: ʔubuja:nu  
sannu-pa: jinuna ʔatta] (我が家の倉裡は母屋の申の方の角にあった)

グスㇿク [gusyuku] (名) 石垣。石を積み上げて屋敷を囲ってあるもの。屋敷の前方の、マ  
イグスㇿク [maigusyuku] (前方の石垣) は二重に積み、ナカフクㇿル [nakaΦyuku] (「中  
袋」の義か。中間部) にバㇿㇿイシ [bataiʃi] (腹石) と呼ばれる小石を詰めて崩れないよ  
うに積みあげてあったが、後方、及び両側の石垣には、バㇿㇿイシは詰めないで二重積み  
にしたものが多かった。例、マイグスㇿクナーヤ バㇿㇿイシ ㇿシミティ シムンダ ガ  
ンㇿゾータン ヤシーヤシ クーㇿㇿル ㇿクトゥーン ナーンㇿシェン [maigusyukuna:ja  
bataiʃi ʃimiti ʃimunda gandzotaŋ jaʃi:jaʃi kuʃiru kʉtu:n na:nʃeŋ] (前石垣には、  
腹石などを詰めて積むから頑丈で強かった。やすやすと崩れることもなかった)

グトウㇿク [gutuku] (名) 「五徳」の義。ㇿシチリン [ʃitʃiriŋ] (七輪) やウブピバㇿチ  
[ʔubupibatʃi] (大火鉢) の中に脚の附いた輪型を据えて、ㇿヤコン [jakon] (薬罐) や鉄  
瓶などをかけて湯を沸かししたりするのに用いる道具。例、ピバㇿチナ グトウㇿク ビシ  
ティ ㇿヤコン ㇿカキ シキㇿルカー ナンクㇿㇿル ㇿユー フクン [pibatʃina gutuku  
biʃiti jakon kaki ʃikiruka: naŋkukuru ju: Φyukuŋ] (火鉢に五徳を据えて薬罐をか  
けておくと自然に≪ひとりでに≫湯は沸く)

クバオンギ [kubaongi] (名) 「クバ扇」の義。ピロウの葉で作った団扇。クバ [kuba] (ピ  
ロウ) の葉を切って陰干しにし、押し板で押して広げ、半円型に成形して仕あげたもの。  
軽くて、よく風を送るので最高の団扇である。長もちするし、背中や腹部をこれで軽く撫  
でながら扇いでやると気持ちがよい。夏の夜、縁側で子供を寝かせながら、サーッ、  
サーッと扇いでくれる母親の側で、子供は平和な、幸福な眠りにつくのが常であった。

クビ [kubi] (名) 「壁」の義。イツァㇿクビ [ʔitsakubi] (板壁)、ガヤーㇿクビ [gaja:kubi]  
(茅壁) などがある。板壁に用いるサンプㇿイツァ [sambuitsa] (三分板) は本土産の杉  
板を購入していたが、それ以前は、フクイキー [Φyukui-ki:] (ウラジロエノキ) などのよ  
うな軟い材質の木を製材して用いた。小屋などは茅で壁を葺き、竹やススキで「あじろ」  
に編んで仕上げた。あじろに編んだ壁を、ティブクで押さえ、締め縄でしっかりと締めて  
固定した。

ケースン [ku:suŋ] (動) 消す。火を消す。字を消す。ケーサヌ [ku:sanu] (消さない)  
ケーシティ [ke:ʃiti] (消して)、ケーシㇿプサン [ke:ʃipusaŋ] (消したい)、ケーㇿカー  
[ke:suka:] (消すなら)。ケツァースン [kettsa:suŋ] (ゴシャゴシャと消す)。例、ウキ  
ローㇿ カマチェーㇿㇿ カキンザㇿシティ ミジㇿ ウティティ ケーシㇿヨー [ʔukiro:  
kamatʃe:ra kəkɪndzaʃiti midʒi ʔutiti ke:ʃijo:] (燠は竈から掻き出して、水をうって  
消しなさいねえ)

コーリ [ko:ri] (名)「行季」の義。竹や柳を編んで箱形を造り、蓋付の荷物入れとしたもの。日清戦争や日露戦争で兵役について帰ってきた人が内地よりもたらしたのが始まりだといわれている。その時、兵役から帰った人が半年や1年で鳩間方言を忘れたと言って、標準語で島人に語ったという笑話話が伝わっている。ヤナギゴリー [janagigo:ri] (柳行季)ともいう。内地旅行や台湾旅行の際に荷物を入れるのに利用したという。

ゴザ [godza] (名) 莫座。蘭草の茎で編んだ筵。輸入品の高級な筵をゴザといった。普通は畳の上に、直接に座って、寝る時にゴザを敷いて寝た。起床すると筵をとり、箒で座敷を掃くのが生活習慣であった。ハナゴザ [hana-godza] (「花莫座」の義か。花模様のついた上質の莫座) は来客用に用いた。例、トゥーシナ ゴザ シキティ ニビバ [tu:ʃina godza ʃikiiti nibiba] (縁側に莫座を敷いて寝なさい)

ゴッスンクギ [gossun-kugi] (名)「五寸釘」の義。屋根のタルキ [taruki] (垂木) を桁材に打ちつける際に用いる大きな釘のこと。五寸釘で打ちつけることは、頑強に固定することを意味する。例、ヤーヌ ヤドゥパシロー ゴッスンクギシ ウティシケーバ タイフーヌ クータンティン ソーヤ ナーヌ [ja:nu jadupaʃiro: gossunkugifi ʔutiʃike:ba taiΦu:nu ku:tantin so:ja na:nu] (家の戸は五寸釘で打ちつけてあるので台風が来ても心配はない)

コーブク [ko:buku] (名) 香箱。カンプス [kampusu] (「神人」の義、サカサ、ティジリビをさす) がウガン [ʔugag] (「お願」の義、お嶽のこと) へ持参する線香類を入れる木製の小箱。幅約10センチ、長さ約30センチ、深さ約10センチの、蓋付きの箱。例、カンプスンケーヤ ナーメーメーヌ コーブクナ ウガンラヌ ウサンダイ イリム トー ヲ タン [kampusugke:ja na:me:me:nu ko:bukuna ʔuganranu ʔusandai ʔiri muto:ttag] (神人たちは各自の香箱に、お嶽での供物を入れて持ち帰られた)。

ザートウク [dza:tyku] (名) 床の間、家の中で一番の上座である、イチバンザ (一番座) に設けられるのが一般である。幅約一間、奥行き約2尺5寸。そこに家主のコンジン [kondʒin] (「根神」の義か。戸主の信仰する神) を祭るコーロ [ko:ro] (香炉) や、妻や姉妹たちのコーロも設けておいた。姉妹たちが嫁入りする際は、ここのコーロを廃して、嫁入り先の家や分家した家の床の間にコーロを設けてコンジンを拝んだ。コンジン タティフルン [kondʒin tʃirun] (根神をたてる) とか、コンジン トースン (ピクン) [kondʒin to:sun (piku)] (神神を倒す《引く》) といって、分家の床の間に香炉を設けたり、里の家や本家の床の間から本人たちの香炉を取り下げたりした。それにも一定の儀式を伴っていた。

床の間には、「福祿寿」の掛け軸や、松竹梅に鶴亀と白髪の老夫婦の絵と描いた掛け軸をかけて長寿を祈願する習慣があった。また、虎の絵の掛け軸も珍重された。島では専門の絵師がいないので、絵心のある若者が古い掛軸を模写して親戚や友人に与えていた。コー

ブク [ko:buku] (香箱) なども床の間に置かれていた。四角の花活には、トゥラヌ・ズー [turanu-dzu:] (虎の尾, チャセンシダ科の常緑シダ) を好んで活けた。例, ザー  
トックヲヌ ヲパナ イキヲリ [dzartukunu pana ʔikiri] (床の間の花を活けなさい)

サーラ [sa:ra] (名) 蘭草の一種。シチトウイ。西表島の水田地帯や湿地帯に植えていた。  
地上約1～1.5メートルぐらいに伸びる。これを刈りて乾燥させ、アダナヲシ [ʔadanaʃi]  
(あだんの気根の繊維) で縛った縄で筵に編んだ。例, サーラヲ スリティ カンヲソー  
シティ ヲムス フモーツタ [sa:ra suriti kanso: ʃiti musu Φumo:tta] (サーラを  
刈りて, 乾燥して 筵を編んだ)

サイクヌキヲル [saikunukiru] (名) 大工用の鋸, 細工用の鋸の総称。一般的に鋸の歯が小  
さく, 板やサンガマチ [sanggamatʃi] (戸や障子の骨) などをひき切るのに用いる。両方  
に歯のついたものと, 片方にのみ歯のついたものがある。例, サイクヌキヲルシ タムヲヌ  
ンドーレー キスヲナ [saikunukiruʃi tamunundo:re: kʲisuna] (大工用の鋸で薪などを  
切るな)

サカシキ [sakaʃiki] (名) 「酒盃」の義か。杯, 盃のこと。ちょこ (猪口)。酒類を注ぎ入  
れて飲むのに用いる陶製の容器。神事の際の酒を供える時にも用いるし, 酒の座でも用い  
た。例, サカシキヲナー サキ サイティヲ オッティヲ カミティ オー シヲバ  
[sakaʃikina: saki saiti ʔotti kamiti ʔo:ʃiba] (杯に酒を注いで, 頭の上に捧げて,  
お返しなさい≪返杯しなさい≫)

サキ・クビン [saki-kubig] (名) 酒瓶。酒を入れる容器。瓶。普通はガラス製の容器が用い  
られた。ニンゴーヲ・ビン [niggo:big] (二合瓶), サンゴーヲ・ビン [saggo:big] (三合  
瓶), グンゴーヲ・ビン [gunngo:big] (五合瓶), イッスヲ・ビン [ʔissu-big] (一升瓶) な  
どがある。例, カイヲリティ サキクビンヲ ウタヲシ バリナーヲヌ [kairiti sʲakikubin  
ʔutaʃi barina:nu] (つまずいて酒瓶を落して割ってしまった)

サキスッカー [sʲakisukka:] (名) 「酒急須」の義。酒を入れるための急須。土瓶状の, 小型  
の急須。陶製のものが多い。例, イッスヲクビンラ サキスッカーヲナ サキ サイヲ ウ  
ツァヲシ [ʔissu-kubinra sʲakisukka:na saki sai ʔutsaʃi] (一升瓶から 酒急須に 酒  
を注いで移しなさい)。サキスッカーヲマ [sʲaki-sukka:ma] は, 小型の酒急須のこと。

サクラヲ・カー [sʲakura-ka:] (名) 「塩辛井戸」の義。例, タチバルヲヌ ヲウブンケヌ パタ  
キヲヌ ヲアザナー サクラヲカー アルダーヲ [taʃibarunu ʔubufʲikenu paʃakinu  
ʔadzana: sʲakuraka: ʔaruda:] (立原の大城家の畑の畔に サクラカーはあるんだよ)

ヲサジ [sadʒi] (名), てぬぐい (手拭)。日本タオルや西洋タオルも同様にいう。女性はサ  
ジを広げて「姉さん被り」にし, その上にヲシケー [ʃike:] (頭上運搬用のクッション)  
を置いて, イモの入った箆を頭に乘せたり, 米俵を乗せたりして運んだ。男は頭に巻いた  
り, 腰帯にぬきさしたりして用いた。例, ヲサジ スブヲリティ ヲドゥー ツスリヲバ

[sadʒi suburiti du: ssuriba] (手拭を絞って体を拭きなさいよ)

ザシ<sup>フ</sup>キ [dʒaʃʃiki] (名)「座敷」の義。部屋のこと。上座の部屋。一番座、二番座のように  
来客をもてなす所、部屋。例、<sup>フ</sup>シザ・ウヤンケーヤ ウイヌ ザシ<sup>フ</sup>ケー シカシ オー  
ラ<sup>フ</sup>シ [ʃidza-ujankeja ʔuinu dʒaʃʃike: ʃikafi ʔu:raʃi] (長老の方々は、上の座敷へ御  
案内しなさい)

サシムヌヤー [saʃimunu-ja:] (名)「指物屋」の義か。指物細工のこと。鳩間島にはい  
なかった。大工の心得のある者が必要に応じて作っていた。本格的なものは、石垣島から購  
入してきた。石垣島には、サシムヌヤー (指物屋)、ギリギリ<sup>フ</sup>ヤー [giriɡiri-ja:] (木を  
削って椀や皿などを作る家)があった。例、サシムヌ・ヤーナ ジブク<sup>フ</sup>トゥ ジン<sup>フ</sup>  
アチ<sup>フ</sup>ライシケー [saʃimunuja:na: dʒibukutu dʒin ʔatʃiraifʃike:] (指物屋に重箱とお膳  
を誂えておいてある)

<sup>フ</sup>サッ<sup>フ</sup>ン [saʃʃʃuŋ] (名)「シャボン」の転訛したもの。石鹸のこと。外来語。石鹸のな  
かった昔は、ウンヌ<sup>フ</sup>・カザ [ʔunnu-kadza] (イモかずら。葛)などを揉んで、その青汁  
で頭髮を洗ったり、アガミツァ<sup>フ</sup> [ʔagamitsa] (「赤にた」の義か。赤土のこと)で女性は  
長い頭髮を洗ったりしていた。80歳以上の人しか使用しないことばで、若い人たちは、そ  
の語を知らない。ほとんどの人は、<sup>フ</sup>セッケン [sekkɛŋ] (石鹸)しか知らない。若年層で  
は死語化しつつある。例、ムカ<sup>フ</sup>シ・プソー <sup>フ</sup>セッケンバ <sup>フ</sup>サッ<sup>フ</sup>ンティ アゾー<sup>フ</sup>ッ  
タ・ヨー [mukaʃʃi-pʊso: sekkemba saʃʃʃunti ʔadzɔtta-jo:] (昔の人は石鹸をばサッ  
<sup>フ</sup>ンと言われたよ)。

<sup>フ</sup>ザラ [dzara] (名)砂利。枝珊瑚が死んで、その死骸が砂利状になったものにもいう。鳩  
間島と西表上原の中間の海中に枝珊瑚の砂利が集積して出来た砂利の島がある。終戦直後  
までは周囲200メートル程の島状をなしていた。これを鳩間では、ユニ [juni] (「寄丹」  
「寄土」の義か)という。例、<sup>フ</sup>ザラ アツァ<sup>フ</sup>ミ ヌーシ<sup>フ</sup>クー [dzara ʔatsami  
nu:ʃiku:] (砂利を集めて、積んでもってきなさい)

サンゴー<sup>フ</sup>・ビン [saŋgo:biŋ] (名)三合瓶。サンゴー<sup>フ</sup>・クビン [saŋgo:kubiŋ] (三合瓶)  
ともいう。ヨイヌ<sup>フ</sup>・ムヌ [joinu-munu] (祝儀の贈り物、供え物)や、ソッコ<sup>フ</sup>・ムヌ  
[sokko:munu] (「焼香物」の義か。法事などの際に親戚筋には、<sup>フ</sup>ゲシ・パナ [guʃi-  
pana] ≪酒と初米<sup>パナングミ</sup>とカウ [kau] ≪線香≫を贈るもの)を供えるが、その際、酒をサン  
ゴー<sup>フ</sup>クビン [saŋgo:kubiŋ] (三合瓶)に入れて供える風習がある。また、ユミ<sup>フ</sup> クイン  
<sup>フ</sup>パル [jumi kuim paru] (嫁を乞いに行く)際、サキムイ [sɔkimui] (「酒盛」の義か。  
結納の前段階の儀式に相当するもの)と称して、男の側から二、三人でサンゴー<sup>フ</sup>ビンに酒  
を持参して相手側の家に行き、嫁とりの話を内々にまとめたりした。サンゴー<sup>フ</sup>ビンを  
持っていくというと、その目的が何であるか、察知できたものである。

<sup>フ</sup>サンジャクマドウ [sandʒaku-madu] (名)「三尺窓」の義。タカ<sup>フ</sup>マドウ [taʔkamadu] (高

窓)ともいう。この種の窓は、鰹工場が建てられるようになって、ナヤ [naja] (納屋) などにつけられたことから始まったようである。例、<sup>7</sup>サンジャク・マドー カツシンヌ<sup>7</sup> ナヤ<sup>7</sup>ナール アッ<sup>7</sup>タ ナー [sandzaku-mado: katsu<sup>7</sup>sinnu najana:ru <sup>7</sup>atta na:] (三尺窓は、鰹漁船の納屋に(ぞ)あったなあ)

サンバン<sup>7</sup>ザ [sambandza] (名)「三番座」の義。ナカ<sup>7</sup>ザ [nakadza] (台所の土間)に面した座敷で、日常生活では、ここで食事をとる。親戚や隣人たちは、ここに上がりこんで雑談する。この部屋の北側の隅にはミー<sup>7</sup>スカミ [mi:sukami] (味噌瓶)やマー<sup>7</sup>スカミ [masukami] (塩瓶)、<sup>7</sup>ミンスブ [minsubu] (「耳壺」の義か。調味料入れの壺)などが置かれていた。

シー<sup>7</sup>シ [ʃi:ʃi] (名) 煤。煙が塵や埃といっしょになって固まったもの。天井裏や床下などに入ると頭や体いっばいにシー<sup>7</sup>シがくつついた。例、ティン<sup>7</sup>ゾー ヌー<sup>7</sup>リ ソー<sup>7</sup>ジ シタ<sup>7</sup>クトー ガマ<sup>7</sup>ジナー イッ<sup>7</sup>パイ シー<sup>7</sup>シ <sup>7</sup>カビ ベー<sup>7</sup> [tindzo: nu:ri so:dzɕi ʃɪtakuto: gamadgina: <sup>7</sup>ippai ʃi:ʃi kabi be:] (天井に登って掃除したところ、髪にいっばい煤をかぶっている)

シウカイ・キー [sɿkai-ki:] (名) 支え柱のこと。支柱。夏の台風シーズンになると、しばしば大型台風に襲われるので、母屋をはじめ炊事小屋などの四隅に、シウカイ [sɿkai] (支え、支柱)を入れる。これに用いる材木をシウカイキーという。シウカウ<sup>7</sup>ン [sɿkaun] (支える)は動詞。例、ウブヤー<sup>7</sup>ヌ ユー<sup>7</sup>シヌ<sup>7</sup>ナー シウカイキー<sup>7</sup> イリ<sup>7</sup>リ<sup>7</sup> [ʔubu:ja:nu ju:ʃinuna: sɿkaiki: <sup>7</sup>iriri] (母屋の四隅に支柱を入れなさい)

シウカ<sup>7</sup>バラ [sɿkabara:] (名)「束柱」の義か。桁材の上に立てる短い垂直の柱。これで屋根の勾配を作る。桁材の上に、30～40センチの長さの4寸角の角材を用いることが多い。ウダ<sup>7</sup>ティ [ʔudati] に似た柱である。例、ザイギ<sup>7</sup>ヌ パシパセー<sup>7</sup> シティラン ドー<sup>7</sup>シ シウカ<sup>7</sup>バラ スク<sup>7</sup>リ [dzaiginu paʃipase: ʃɪtiran do:ʃi sɿkabara: sɿkuri] (材木の切れっぱしは捨てないで、束柱を作りなさい)

シキー [ʃɿki:] (名) 敷居。闕。引き戸や障子、襖などをたてるために、その下に溝の掘った横木をわたして、すべらせて開閉できるようにしたもの。「闕、門限也、闕、一名闕、之岐美、俗云二度之岐美」(『和名抄』)とある。例、アマ<sup>7</sup>ヌ ヤド<sup>7</sup>フジ シー<sup>7</sup>ナー シキー<sup>7</sup>ン<sup>7</sup> キジ ファー<sup>7</sup>リ ナー<sup>7</sup>ヌ [ʔamanu jaɖu<sup>7</sup>udzi ʃi:na: ʃɿki:n kidʒiffa:ri nanu] (あんまり戸を開けしめするので、敷居がすれてしまった)

シキウズ [ʃɿkiudzu] (名) 敷き布団。「敷きうず」の義。鳩間島では特定の家以外では敷き布団はなかった。冬期においてもそれを必要とするほどの寒さはなかったし、それを作る余裕もなかった。例、バトゥ<sup>7</sup>マ・プソー シキウズ<sup>7</sup>ティ スー<sup>7</sup>モー<sup>7</sup> シウカイオー<sup>7</sup>ラン<sup>7</sup>セン [paɖuma-pɿso: ʃɿkiudzuti su:mo: sɿkaio:ranseŋ] (鳩間の人は、敷き布団なんていうものは使われなかった)。

シキダイ [ʃikidai] (名) 突き台。漁船の舳先に、魚を釣ったり、突いたりするために作っている台。ツキセン [tsukiseg] (突き船、カジギを突き、漁をする船) の舳先きには、そのための台が前方に突き出ている。カツシンヌ<sup>ㇿ</sup> イチバンゾー<sup>ㇿ</sup>ヤ シキダイ<sup>ㇿ</sup>ナー  
 ビリティ ホー<sup>ㇿ</sup>ス [kʌtsufinnu ʔitʃibandzo:ja ʃikidaina: biriti ho:su] (鯉船の一番  
 竿≪一番釣手≫は突き台の上に座って鯉を釣る)

シキダイビリ [ʃikidaibiri] (名) あぐら。男の坐り方。両足を正面で組みあわせて坐る坐り方。姿勢が堂々とした坐り方になるので、目上の人の前でこの坐り方をすると横柄な態度だと注意されたものである。例、ヤラ<sup>ㇿ</sup>ビ アタル<sup>ㇿ</sup> ムヌヌ プスヌ<sup>ㇿ</sup> マンタナー シ  
 キダイビリバ セー<sup>ㇿ</sup>ティ アー<sup>ㇿ</sup>ク [jarabi ʔataru mununu pʊsunu mantana: ʃikidaibiri serti ʔa:ku] (子供のくせに人の前であぐらをかいているよ)

シキダ<sup>ㇿ</sup>キ [ʃikidaki] (名)、まっち (隣寸)。「付け竹」の義か。火をおこして、焚きつけに用いることから命名されたものであろう。鳩間島にマッチが導入されたのは、日露戦争に出征して帰島した通事家の先祖がもたらされたのが最初だという。竹串の先から火が出る不思議な物として、部落中の者がそれを見に集まったという (加工工伊佐談)。例、シキ  
 ダ<sup>ㇿ</sup>キ ヲッシ<sup>ㇿ</sup> ピー シキ<sup>ㇿ</sup>リ [ʃikidaki ʃʃi pi: ʃikiri] (マッチをすって火をつけなさい)

シキ<sup>ㇿ</sup>タン [ʃikitag] (名) 石炭。西表島北岸の下離 (ヲシザバナリ [ʃidzabanari] という) には大正期に炭坑が掘られ、昭和期には上原地区、ウラン<sup>ㇿ</sup>ザキ [ʔurandzaki] (宇奈利崎) に炭坑が開かれ、石炭が採掘された。例、ウボー<sup>ㇿ</sup>ダーラ ニシミジ<sup>ㇿ</sup>ヌ ウンタヌ<sup>ㇿ</sup>  
 ヌーナ ヲタン<sup>ㇿ</sup>コーヌ ヲアリティ シキ<sup>ㇿ</sup>タン プロー<sup>ㇿ</sup>ツタ [ʔuborda:ra niʃimidʒinu ʔuntanu nu:na taŋko:nu ʔariti ʃikitam puro:tta] (ウボーダからニシミジの上の野に炭坑があって石炭を掘られた)

シキタン<sup>ㇿ</sup>ユー [ʃikitanju:] (名)「石炭油」の義。油。現在では、ほとんどの人が石油を、シキ<sup>ㇿ</sup>ユー [ʃikiju:] (石油) という。シキタン<sup>ㇿ</sup>ユー [ʃikitanju:] は昭和初期頃まで (『八重山語彙』) は生活語彙であったが、今日では八十歳以上の人の理解語彙となっている。六十歳以下ではほとんど理解されないものと思われる。

シダ<sup>ㇿ</sup>ル [ʃidaru] (名) 簾。タキ・シダル [tʌkiʃidaru] (竹簾), ユシ<sup>ㇿ</sup>キ・シダル [juʃikiʃidaru] (ススキ簾) があるが、薨をおそって被せるのに用いるのは、タキ・シダルである。ダディ<sup>ㇿ</sup>ク・ダキ [dadiku-daki] (ダディク山からとれる竹) を利用して編んだもの。例、シダ<sup>ㇿ</sup>ロー イラ<sup>ㇿ</sup>カナ カバ<sup>ㇿ</sup>シティ シミ<sup>ㇿ</sup>ナー ヲカキティ シミ<sup>ㇿ</sup>リ [ʃidaro: ʔirakana kabaʃiti ʃimina: kaʃiti ʃimiri] (簾を薨にかぶせて締縄を掛けて締めなさい)

シチブ<sup>ㇿ</sup>・クギ [ʃitʃibu-kugi] (名)「七分釘」の義。壁板を打つに用いる釘で、小型の釘。一般的に、家庭で用いられる釘はこの型のものが多い。長さが一寸に足りない、七分の釘



の意。例、シチブ<sup>ツ</sup>クギ <sup>ツ</sup>サンギンブカラ カイ<sup>ツ</sup>クーカー クビウティ<sup>ツ</sup>モー タラウン<sup>ツ</sup>カヤー [ʃɪtʃibukugi saggimbukara kaiku:ka: kubiutimo: taraugkaja:] (七分釘を三斤ほど買って来たら、壁打ち用の釘は足りるでしょうか)

<sup>ツ</sup>シチリン [ʃɪtʃirig] (名)「七輪」の義。炭火用の素焼きの<sup>ツ</sup>焔炉。戦後の一時期輸入されたことがある。農家では炭火を使って炊飯するほど生活は悠長でないためか、ほとんど流行しないうちに、石油コンロやガスコンロの時代へと流れていった。例、<sup>ツ</sup>シチリンマー パトゥ<sup>ツ</sup>マナテ <sup>ツ</sup>シカイミ<sup>ツ</sup>チェー <sup>ツ</sup>ナー<sup>ツ</sup>ン<sup>ツ</sup>セン [ʃɪtʃirimma: pātumanate: sɪkaimitʃe: nānʃen] (七輪は鳩間島では使いみちがなかった)

シティハギ [ʃɪtihaɡi] (名)ハギ柱の外側にさらに軒を出して、それを支えるために立てた柱のこと。シティハギを出すことで、軒下を利用して漁具や農具類を置くのに使った。例、シティハギ スイザシティ <sup>ツ</sup>ナー<sup>ツ</sup>ラ<sup>ツ</sup>シスク<sup>ツ</sup>フリ スコー<sup>ツ</sup>レー [ʃɪtihaɡi suidzafiti narafi sɯkuri sɯko:re:] (シティハギを添え出して、衣類掛け場を作っておかれてある)

シナカキ<sup>ツ</sup>ヤマ [ʃinakakijama] (名)「綱掛やま」の義か。「-ヤマ」は「機械」とか「仕掛け」の意である。縄を三本縊り合わせて一本の太い綱に仕上げる器具。一枚の厚い板に3個の穴をあけ、回転式ハンドルを附けて地面にたてたポールに固定する。他方の板には1個の穴をあけ、同じ回転式ハンドルを附けておく。三本の縄の片端をそれぞれのハンドルにつけ、もう一方のハンドルには3本の縄を結び、それぞれのハンドルを逆方向に回わして縄を縊る。適当に縊ったところで三つ又を当て、3本の縄を結んだハンドルを他方と逆方向に回転すると、太い縄が縊りあがっていく。鳩間島では、フー<sup>ツ</sup>カラジナを、このようにして太いロープに<sup>ツ</sup>緬いあげ、船のロープを作っていた。例、キュー<sup>ツ</sup>ヤ <sup>ツ</sup>シナ カキ<sup>ツ</sup>ラティ <sup>ツ</sup>ウ<sup>ツ</sup>ムイ <sup>ツ</sup>ベ<sup>ツ</sup>ー<sup>ツ</sup>ティ <sup>ツ</sup>ワー <sup>ツ</sup>テー<sup>ツ</sup>ナイ <sup>ツ</sup>シー<sup>ツ</sup>ツ <sup>ツ</sup>フィー<sup>ツ</sup>リ [kju:ja ʃinakakirati ʔumui berti wa: te:nai ʃi: fʃiri:] (今日は綱を掛けようと思っているので、君、手伝ってくれ)

<sup>ツ</sup>シナフクビ [ʃinaɸukubi] (名)「綱きき帯」の義か。「きき帯」は、「くくり帯」の音韻転訛したものであろう。農家の人は、畑や田仕事に出る際は、藁縄で作業衣を強くしめて出かけたものである。力仕事にはワラ縄の帯をしめ、山刀や鋸、鎌などを腰にさして行った。例、ター<sup>ツ</sup>パタキ<sup>ツ</sup>ヌ <sup>ツ</sup>シグ<sup>ツ</sup>トゥ <sup>ツ</sup>スー<sup>ツ</sup> <sup>ツ</sup>ピン<sup>ツ</sup>マー <sup>ツ</sup>シナフクビ <sup>ツ</sup>フン<sup>ツ</sup>サマリ<sup>ツ</sup>ティル <sup>ツ</sup>ソー<sup>ツ</sup>ッ<sup>ツ</sup>タ [ta:patakinu ʃigutu su: pimma: ʃinaɸukubi ɸunsamaritiru soɽta] (田畑の仕事をするときは、綱帯をひきしめてなされた)。

シビナー<sup>ツ</sup>ジナ [ʃibina:dʒina] (名)「注連縄綱」の義か。悪霊の侵入を防ぐために張りめぐらす左<sup>ツ</sup>緬いの綱。藁の尻を長く出して左<sup>ツ</sup>緬いにして<sup>ツ</sup>緬いあげる。これを張りめぐらせば悪霊は侵入しないと信じられているので、<sup>ツ</sup>シラ [ʃira] (産褥)に張りめぐらしたり、村の出入口や屋敷の門などにも張った。例、シマ<sup>ツ</sup>ッサル<sup>ツ</sup>ヌ <sup>ツ</sup>ピン<sup>ツ</sup>マー <sup>ツ</sup>ム<sup>ツ</sup>ラヌ<sup>ツ</sup>ウ<sup>ツ</sup>リ<sup>ツ</sup>ダ<sup>ツ</sup>チ

ナー シ ビ ナー ジ ナ パ ロー ッ タ [ʃimassarunu pimma: muranu ʔuridatʃina: ʃibina:dʒina parotʃta] (島くさらしのときには村の出入口にシビナージナを張られた)

シミヲナ [ʃimina] (名) 墨縄, 大工用の工具の一つ、シンヲスブ (墨縄) についている縄。

木綿の小糸や麻の糸が用いられる。材木に直線をひくために、墨壺の墨をつけて墨壺の先の穴から引き出し、材木の端に刺し、墨壺を他の端につけて、縄を弾いて直線をひく。シミヲナー パンヲクン [ʃimina: paŋkug] (墨縄を弾く) とか、シミヲナー ヲウトウン [ʃimina: ʔutug] (墨縄を打つ) のようにいう。「あたらしき猪名部の<sup>ラクミ</sup>工匠<sup>スミナハ</sup>撃し須弥<sup>スミナハ</sup>讎<sup>ハ</sup>磔」(『雄略紀』十三年), 「墨縄をはへたる如く」(『万葉』-894), 「かにかくに物は思はず飛驒人の打つ墨縄のただ一道に」(『万葉』-2648)。「縄墨, 端直不<sup>レ</sup>曲, 喩如<sup>二</sup>縄墨<sup>一</sup>, 須美奈波<sup>スミナハ</sup>」(『和名抄』) などとある。

ヲジルー [dʒiru:] (名) 「地炉」の義。床を切ってこしらえた炉。産婦が産褥に入る際にジルーを作った。普通は二番裏座か、三番裏座に作られた。床を一部切り落して、シンマイナビ [ʃimmainabi] (「四枚鍋」の義か。大鍋のこと) の破損したものをすえ、砂を入れ、その上に薪を燃した。産褥は四周をシビナージナ [ʃibina:dʒina] (注連縄) で張りめぐらし、悪霊の侵入を防いだ。島で出産する人がいなくなって、地炉も消えた。

シルヌ・ウチ [ʃirunu-utʃi] (名) 屋敷内。古謡語。「アーパーレー」(新室寿歌) の中で「しるうちぬ めーぬうち」のように用いられる。「代内」の義。田、田地、一定の区域、部分の意。転じて、屋敷の意となる。例、ヤーヲシルティン カイヲ アラヲシ マイフナーヲ ドー [ja:ʃirutig kai ʔarafi maɪfuna: do:] (家代<sup>いえしろ</sup>≪屋敷≫でも買い求めることができて、(君は) 立派だよ≪働き者だよ≫)

ジンギ [dʒiggi] (名)、缶詰罐。ブリキ製の罐。ジンヲギリ [dʒinggiri] ともいう。ジンギレーヲマ [dʒingire:ma] (小さな罐) などがある。例、カンゴフヲヌメーヤ ギュタールン オーリヲブリ ナーメーメヌヲ ジンギレーヲマナ フチヲル イリヲ ムティオーッタヲヌ イッ ケンヲ スク タンヲサー [kaggo ʔunume:ja gju:ta:run ʔo:riburi na:me:me:nu dʒingire:mana ʔutʃiru ʔiri mutio:ttanu ʔikken sʉkutansa:] (看護婦の方々は何人もいらっしゃって、銘銘の小罐に薬品を入れて持っておられたが、大変よく効いたよ)

シンヲスブ [ʃinsubu] (名) 墨壺、大工用の工具。舟型をした木製の墨壺。片方に巻取り用の輪があり、これに木綿の糸をとりつけ、墨壺の小穴へ通して墨をつけ、舟型の先端部の小穴からくぐらせて引き出し、針に結びつける。材木に直線を打つとき、針をつまんで糸を引き出し、木材の一方に刺して立て、墨壺を材木の他方の一点につけて、縄を弾くと材木の表面に直線の墨痕がひかれる。

墨壺

竹筆

シン<sup>7</sup>ダ [ʃinda] (名) 針金。金属を細長く糸状に延ばして、建築用、または船具用に用いるもの。その太さによって用途が異なる。直径1ミリ程度の針金は、釣り具に利用されたり、竹箒などを作る際に利用された。例、シン<sup>7</sup>ダシ タキポーキ<sup>7</sup> シミ フバル<sup>7</sup>カーウーカ<sup>7</sup>ヌ [ʃindaʃi təkipo:ki Φubaruka: ʔu:kanu] (針金で竹箒を締め括ると、動かないよ)

シンダー<sup>7</sup>マ [ʃinda:ma] (名) 小さな針金。「~マ」は指小辞。垣根を作る際に縄の代りに締めつけるのに用いる。鯉節製造工場のセイロー [seiro:] (蒸籠、カツオを焙乾する籠) の竹を編むのにも多くシンダーマを使った。例、シーゾーヤー<sup>7</sup>ヌ セイロー<sup>7</sup>ヌ<sup>7</sup> スコー<sup>7</sup> シンダー<sup>7</sup>マシ タキ<sup>7</sup> フモー<sup>7</sup>ツタ [ʃi:dzɔ:janu seiro:nu suku: ʃinda:maʃi taki Φumo:tta] (製造家の蒸籠の底は小さな針金で竹を編まれた)

ジン<sup>7</sup>パク [dʒimpaku] (名) 錢箱。お金を入れる箱。お店などでお金を入れておくのに用いる箱。例、ハー ウン<sup>7</sup>ネヌ ジン<sup>7</sup>マー ジン<sup>7</sup>パクナー アバッカイルン<sup>7</sup>ケン<sup>7</sup><sup>7</sup>ア<sup>7</sup>ン ティ ダー<sup>7</sup> [hā: ʔunnenu dʒimma: dʒimpakuna: ʔabakkairuŋkeŋ ʔanti da:] (はあ、もう、その家のお金は、錢箱にあふれるほどあるそうだよ)

シンマイ [ʃimmai] (名) 間どり。部屋のとり方。部屋の作り。シンマイ トゥリ<sup>7</sup>ヨー [ʃimmai turi:jo:] (部屋の作り方。間どりの仕方)、シンマイヌ<sup>7</sup> カナイティ ミサンダー [ʃimmainu kanaiti misan da:] (部屋の作りが、適っていていいですよ)。クヌヤー<sup>7</sup>ヤ シンマイヌ ナン<sup>7</sup>ゾー ダー<sup>7</sup>ッサナー<sup>7</sup>ヌ [kunu ja:ja ʃimmainu nandzo: da:ssananu] (この家は、間どりが、それほどよくない) 普通は、イチバン<sup>7</sup>・ザー [ʔitʃiban-dza:] (一番座)、ニーバン<sup>7</sup>・ザー [ni:ban-dza:] (二番座)、サンバン<sup>7</sup>・ザー [samban-dza:] (三番座)、イチバン<sup>7</sup>・ウラ<sup>7</sup>ザ [ʔitʃiban-uradza] (一番裏座)、ニーバン<sup>7</sup>・ウラ<sup>7</sup>ザ [ni:ban-uradza] (二番裏座)、サンバン<sup>7</sup>・ウラ<sup>7</sup>ザ [samban-uraʔdza] (三番裏座)、ナカ<sup>7</sup>ザ [nakadza] (土間) のように間取りをとるのが伝統的な農家のあり方であった。

シンタ・カク [ʃinta-kaku] (名) 後の家の屋敷。ペー<sup>7</sup>ヌ シンタ・カク<sup>7</sup>ナ イビ<sup>7</sup>シケー<sup>7</sup>タ<sup>7</sup> バサー イッケナ<sup>7</sup> ナレーン<sup>7</sup> ダー [be:nu ʃinta kaku:na ʔibifike:ta ʔbasa: ʔikkena nare:n da:] (我が家の後の屋敷に植えておいた芭蕉は、よくみのったよ。《たくさん実をつけたよ》)

ス<sup>7</sup>クイ [sykui] (名) 麻笥。紡いだ麻糸や芭蕉の糸を入れておくのに用いる木製の箱。縦30センチ、横30センチ、深さ15センチほどの箱。戦前までは、女性は夜業をしながら麻糸や芭蕉糸を紡いでス<sup>7</sup>クイに入れた。「処女らが麻<sup>を</sup>笥に垂れたるうみ麻<sup>を</sup>なす」(万-3243)。例、<sup>7</sup>ブー ウー<sup>7</sup>ムカー ス<sup>7</sup>クイナ<sup>7</sup> イリ<sup>7</sup>ティ<sup>7</sup> タ<sup>7</sup>モー<sup>7</sup>ツタ [bu: ʔu:mu:ka: sykui:na: ʔiriti tamot:ta] (麻糸を紡ぐと麻<sup>を</sup>笥に入れてためられた)

ス<sup>7</sup>ブ<sup>7</sup>チ<sup>7</sup>ダマ [subutʃi-dama] (名) 海花石。菊目石。ピー [pi:] (干瀬) やイノー [ʔino:]

(礁内湖)の海底に棲息する石珊瑚の死殻。直径約30センチ～40センチ程度の球塊状をしているものを取って来て、頭頂を削り、礎石に利用した。これをイシジ [ʔʃidʒi] (礎石)という。スブチダマは古謡語である。「すぶちだま いしじばしー やーばすくりあんでいす、以下略」のように謡われている。

ㄱセメンガーラ [semegga:ra] (名)セメン瓦の義。セメントで作った瓦のこと。鳩間島には全く使用されなかった。石垣島ではセメンガーラで葺いてある家がよく見かけられた。灰色のセメント瓦は、赤瓦を見慣れた島人にとっては、あまり喜ばれなかったもののようである。例、ㄱセメンガーラー パトゥㄱマナーテター ターンㄱ シュカイオーランㄱシェン [semegga:ra: patumana:te: ta:n s̺kaio:ranʃeŋ] (セメン瓦は、鳩間島では、誰も使われなかった)

センㄱスル [sensuru] (名)「扇子」の義。竹や木で骨格部を作り、末広になるよう要をとじ、紙を張って折りたためるようにしたもの。舞踊や儀式の際に用いた。舞踊に用いる扇子を、特にブドウルオンギ [buduru-oggi] (踊り扇)という。日の丸を入れたのをヒノマルオンギ [çinomaru-oggi] (日の丸扇)といい、舞踊などによく用いられた。センスルは、センス(扇子)が訛った形。

ㄱゾー [dzo:] (名)門の外側の道路。沖縄本島では、「門」を「ジョー」というが、鳩間方言では、門の外側の通路一般をいう。バンㄱテヌ ゴー [bantenu dzo:] (私の家の門の外側の道)、ワッㄱテヌ ゴー [wattenu dzo:] (君の家の門の外側の道)。例、エㄱー ンガマサㄱヌ ㄱゾーナ ギーㄱ アサビㄱバ [ʔe: ʔɸgamasanu dzo:na gi: ʔasabiba] (おい! うるさいから、門の外側の道へ行って遊びなさいよ)。

ゾーㄱキン [dzo:kin] (名)雑巾。共通語からの借用語。昔はヤリㄱカコー [jarikako:] (ぼろ《檻樓》)を利用して雑巾としたり、濡れた所を拭いたり、足拭きにしたりしたものである。ひどい汚れを落すには、藁を束ねたり、藁縄を用いたりして、水をかけながら拭き洗いして落した。例、ゾーㄱキン スブㄱリキー トゥーシㄱ フカンㄱノーレー [dzo:kin suburi-ki: tu:ʃi ʔɸkanno:re:] (雑巾をしぼってきて縁側を拭いてくれないか)

ソーヂヌㄱ・サン [so:dʒinu-saŋ] (名)「障子の棧」の義。共通語の転訛したものであろう。島では、障子のある家はごく限られた数しかなかった。例、ㄱソングチマイ ヤリバソーヂヌㄱ・サン スナカㄱナ ムティギーㄱ アライㄱ クー [soggatʃimai jariba so:dʒinu san sunakana mutigi: ʔarai ku:] (正月前だから障子の棧を海に持って行って洗ってきなさい)

ㄱゾーントア・ヤー [dzo:nta-ja:] (名)「門の家」の義か。石垣島の士族の家の門には、屋根をかけ、瓦で葺いたものがあつた。鳩間島の人々は、それをゾーントアヤーといった。

ゾーントアヤーで雨宿りをしていて、その家の人から親切を受けたことがよくあつたという。例、イサナキヌㄱ ユカラブスㄱヌ ㄱヤーナール ㄱゾーントアヤーヤ アッタㄱダー

[ʔisanakinu jukarapɯsunu ja:naru dzo:ntaja:ja ʔatta da:] (石垣島の士族の家に  
ゾータヤーはあったよ)

ㇿダイ [dai] (名) 台。机、テーブル等にもいう。物を載せたり、飾ったりする際に用いる  
器具。普通は背もたれの無いものにいう。例、ナカザㇿナー ㇿダイ スクㇿリ ビスㇿカー  
イッケナㇿ シュカイミチエーㇿ アリブヌ [nakadza-na: dai sykuri bisuka: ʔikken  
sɯkaimitʃe: ʔaribunu] (土間に台を作って置くと、非常に使い道《用途》が多い)。

タカㇿマドウ [takamadu] (名) 「高窓」の義。ハンㇿマドウ [hammadu] (半窓) ともいう。  
壁の上半分を窓にし、下半分(3尺)を壁にした窓。本来の島の建築様式ではなく、鯉節  
製造工場が建てられるようになって導入された窓の様式。例、タカㇿマドウ スクㇿリシ  
ケーンドウ カジン ペーラㇿヌ .キクツァㇿヌ ナラㇿヌ [takamadu sykuriʃike:ndu  
kadʒim pe:ranu kɯkutsanu naranu] (高窓を作っているが風も入らない。むしろ暑くて  
たまらない)。

タキアイク [tɕkiaiku] (名) 「竹杣」の義。直径7センチほどの、鯉釣り用の釣り竿を利用  
して作った。この竹竿は九州あたりから輸入されていた。沖縄ではこの種の竹は産しない  
ようである。例、タキアイコー カローㇿンアリ スーㇿワン アンダー シュカイヤㇿ  
サン [tɕkiaiko: karo:n ʔari: su:wan ʔanda: sɯkaijassan] (竹杣は軽くもあり、強く  
もあるので、使いやすい)。

タキフン [tɕkiɸun] (名) 「竹釘」の義。カツホーシㇿ・サウ [kɕtsuho:ʃi-sau] (鯉釣り竿)  
の竹を利用し、箸の大きさに削って、先端を尖らせ、錐で穴をあけた所に打ちこむのに用  
いる釘。イダフニ [ʔidaɸuni] (板舟、サバニ) には鉄釘は使えないので、このタキフン  
(竹釘)を用いた。錆つかないからである。板と板の合わせ目には、フンドウ [ɸundu]  
という㊄型の、イヌ楨で作った一種のカスガイを打ちこんで、補強した。

タキポーキ [tɕkipo:ki] (名) 竹箒。竹製の箒。ポーㇿキ・ダキ [po:kidaki] (箒竹) を伐っ  
てきて、五、六本結えて作った簡単な箒。筆状の形態をしており、誰にでも手軽に作れた。  
広い屋敷はこの種の箒を用いるのが便利である。例、ㇿドゥーシ スクㇿレー タキポーキ  
ㇿ アランㇿカー ナガムテー サヌ [du:ʃi sykure: tɕkipo:ki ʔaraŋka: nagamute:  
sanu] (自分で作った竹箒でないと、長もちはしないよ)。

タタミ [tɕtami] (名) 畳、藁を糸でさしかためた床に、ビー [bi:] (藁) で編んだ表をつけ  
たもの。イツァフンㇿツァ (板床) やタキフンツァ (竹編みの床) に敷く。縦1間、幅半  
間の長方形に作る。ㇿサンジャク・タタミ [sandzaku-tɕtami] (3尺畳) は、その半分の  
大きさの畳。例、タタミヌㇿ ウムㇿティ カウター ミームㇿ ナリベㇿ [tataminu  
ʔumuti kauta: mi:mu naribe:] (畳の表を替えたので新品にかわっている)。

タタミヌㇿ・ピル [tɕtaminu-piru] (名) 畳のへり。畳の縁取りとして、絹布や上質の布で  
飾ったもの。亀甲模様の布や黒色の布などを幅約3.5センチ、長さ6尺または3尺にして、

畳の両側を縁取ったもの。例、ムカ<sup>カ</sup>シ・プソー タタミヌ<sup>フ</sup>・ピロー フンクナ<sup>フ</sup>ヨーッ  
ティ シー ナ ラー <sup>フ</sup>ソーッ タ [mukaʃipɯso: t̚ataminu-piro: Φ ugkunaʃoɾtti ʃi:  
nara:soɾtta] (昔の人は、畳の縁は踏むなよといって教えられた)。

タナ [tana] (名)「棚」のこと。タム<sup>フ</sup>ヌ・タナ [tamunu-tana] (薪を乾燥させる棚)、ミジ  
ン<sup>フ</sup>ダナ [midʒindana] (食器や鍋類を乾燥させる棚) などがある。また、<sup>フ</sup>イダフニ  
[ʔidaΦuni] (サバニ) にとりつける、タナ [tana] (幅約25センチ、長さ約6尺の板) も  
ある。例、ヤー<sup>フ</sup>ヌ ナカ<sup>フ</sup>ナー タナヌ ナーン<sup>フ</sup>カー シュカイグリ<sup>フ</sup>サン [ja:nu  
nakana: tananu na:ŋka: ʃ̥kaigurisag] (家の中に棚がないと使いにくい)。

タナ [tana] (名)「船棚」の義。<sup>フ</sup>イダフニ [ʔidaΦuni] (「板舟」の義、サバニ) に荷を積  
むと、<sup>フ</sup>アシ ビルン<sup>フ</sup> [ʔaʃi biruŋ] (喫水が坐る≪喫水が深くなる≫) ので、両舷にタ  
ナ [tana] (棚板。幅約25センチ、長さ約6尺の板。継ぎ足しができるよう、工夫されて  
いる) を掛けて、海水が船に入らぬようにしたもの。キュー<sup>フ</sup>ヤ ムサヌ<sup>フ</sup> ンジブンダ<sup>フ</sup>  
タナ<sup>フ</sup> カキ<sup>フ</sup>リ [kju:ja musanu ʔndʒibunda tana kakiri] (今日は白波が立っている  
ので、タナを掛けなさい)。

タマガラ<sup>フ</sup>ス [tamagarasu] (名)「玉ガラス」の義か。ガラスのこと。もともと、ガラスを  
「タマ」と言ったものと思われる。タマウ<sup>フ</sup>キ [tamau:ki] (「玉桶」の義、桶の底をガ  
ラスで張ったもの。漁師がサバニを操船しながら、それで水中をのぞき、魚や貝類を探す  
のに用いるもの) の「タマ」はガラスをさしている。タマガラ<sup>フ</sup>ス バリティ ミーカン<sup>フ</sup>  
ガン スク<sup>フ</sup>リ [tamagarasu bariti mi:kanggan ʃukuri] (ガラスを割って水中めがねを  
作りなさい)。

タム<sup>フ</sup>ヌ・タナ [tamunu-tana] (名)「薪棚」の義。各家には竈の上に「つり棚」をかけてお  
いて、その上にバリダムヌ [baridamunu] (割った薪) を積んでおき、乾燥させて用いる  
ようにしたもの。その棚のこと。家にタム<sup>フ</sup>ヌが切れないうに絶えず補給するのが男の  
仕事の一つで、主婦はそれを誇りにしたものである。例、タム<sup>フ</sup>ヌ・タナナ タム<sup>フ</sup>ヌ キ  
サス<sup>フ</sup>ナ [tamunu-tanana tamunu k̥sasuna] (薪棚に薪を切らすな)。

タライ [tarai] (名)「盥」のこと。「手洗い」の義か。衣類を洗濯するのに用いる板製の容  
器。カナダライ [kanadarai] (亜鉛やジェラルミン等の金属板で作った洗濯盥のこと) は、  
戦後出まわるようになった。例、ユグリ・キンマー <sup>フ</sup>タライナー イリティ<sup>フ</sup> ミジ<sup>フ</sup>  
ナー フクラシ<sup>フ</sup> シキ<sup>フ</sup>リヨ <sup>フ</sup> [juguri-kimma: taraina: ʔiriti midʒina: Φukuraʃi  
ʃ̥kirijo:] (汚れた着物は盥に入れて水につけておきなさいねえ)。

タル<sup>フ</sup>キ [taruki] (名)「垂木」の義。屋根のユチル [jut̚firu] を支えるために棟から軒に  
わたす材。直径11~12センチ、長さ約4メートルの丸太。西表島の山中より、シター<sup>フ</sup>マ  
[ʃ̥ita:ma] (「えごのき」の一種か)、アゴ<sup>フ</sup>チ [ʔagot̚ʃi] (「もくたちばな」の一種か) な  
どの若木を伐って使っていた。例、タル<sup>フ</sup>ケー ゴーラ<sup>フ</sup>ヤ シター<sup>フ</sup>マ<sup>フ</sup>バ シュカイブタ

[taruke: goraja ʃi̥ta:maba sɯ̥kai-buta] (垂木は、多くはシターマを使っていた)。

タン [taŋ] (名) 炭。昭和30年代初め頃まで、冬場になるとよく炭焼きをしたものである。西表島の北岸から雑木を伐り、鳩間島に運んで、砂浜で炭焼竈を造って炭焼きをしたものである。生木を約40センチの長さに切り、砂浜を掘って作った竈に並べて積みあげ、その上に茅をかぶせて砂を盛り排煙口をつけて入り口の方から燃やし続ける。1～2時間焚きつけて生木が燃えると入口を塞ぎ一晩中燃した後、排煙口を塞いで消火する。二、三日放置した後、盛り砂を除くと、真黒の木炭が出てきた。自家用の木炭はこうにして童児たちが製造した。販売用の木炭は西表島の山中で焼いた。それをタング [taŋgu] (ススキ《薄》を編んで作った木炭入れ) に詰めて石垣島へ輸出した。例、ガジマルヲヌ ユダヲキシティ タンヲ ヤクタンヲ [gadʒimarunu juda kiʃiti taŋ jakutaŋ] (ガジマル《榕樹》の枝を切って炭をやいた)。

ヲダン [daŋ] (名) 段、階段。カイダン [kai-daŋ] (階段) ともいう。「階段」は借用語であろう。ドゥダŋ [dudaŋ] (土段) が多用される。ドゥダŋは、普通は「盛土」して平らし、コーサーヲマイシ [ko:se:ma-iʃi] (砂岩) などで縁どりし、その上に家を建築したものである。例、ペーラヲフチェー ウブヲ・イシ キジティヲ ダン スクヲリシケー [pe:ra-Φʉtʃe: ʔubuiʃi kiʒiti daŋ sʉkuri ʃi:ke:] (入口《門》は大きな石を削って段を作っている)。

タング [taŋgu] (名) 「炭籠」の義か。ススキを約50センチの長さに切って編み器で編み、直径約25センチの円筒形の容器に編みあげ、それに木炭を詰めて運ぶのに用いた。タングはイッピーュー [ʔippju:] (一俵) ヲニヒュー [niɕu:] (二俵)、ヲサンビュー [sambu:] (三俵) のように数えた。例、タング ヲフミティ タン イリラ [taŋgu Φ umiti taŋ ʔirira] (タングを編んで炭を入れよう)。

ヲタンコー [taŋko:] (名) 炭坑。西表島には大正期に、ナミノヲウエタンコー [naminoue-taŋko:] (波之上炭坑、船浦の対岸、サーラヲミジ [sa:ramidʒi] 《ひない滝》の所で採炭し、下離から積み出した)、があり、昭和期になってヲノダタンコー [noda-taŋko:] (野田炭坑) が浦内地区で開かれた。ウランザヲキ [ʔurandzaki] (宇奈利崎) あたりの炭坑で掘った石炭を浦内から白浜港へ運び、そこで台湾航路の定期船(ゾーキ [dzo:ki] 《蒸気船》)に積みこまれた。

タンヲシ [taŋʃi] (名) 簞笥。ヲニービキ・タンシ [ni:biki-taŋʃi] (結婚簞笥。娘が嫁入りする際に持参させる簞笥)。昔は、娘が誕生すると、シンヲダン・キー [ʃindaŋki:] (梅檀) を植え、20年後の嫁入りの時にその梅檀を伐って簞笥の材料にしたという。例、パトウマ・プソー シンヲダン・キーバ キシホル タンヲシ スクラヲソーッタ [pə̌tuma-puso: ʃindaŋki:ba kiʃiru taŋʃi sʉkuraso:tta] (鳩間の人は、梅檀を伐って簞笥を作られた)。

ダン<sup>ラ</sup>トウク [dan̄guku] (名) 仏壇の裏側の空間を利用して、押入れ風の物置きに作った所。通常は二番裏座と二番座の間に作られるが、二番裏座側に引き戸を作って開閉できるようにし、ジン [d̄gig] (膳) や、ジブ<sup>ラ</sup>ク [d̄gibuku] などの漆器類を収納しておいたり、ピル [piru] (大蒜) の漬物や、味噌 (マイヌ・ミー<sup>ラ</sup>ス [mainu-mi:su] ≪米味噌≫) を詰めた甕などを保管しておくのに利用された。

トー<sup>ラ</sup> [to:ra] (名) 炊事小屋、普通は母家の西側に建てられた。アナ<sup>ラ</sup>プ<sup>リ</sup>ヤー [ʔana-purija:] (「穴掘家」の義、掘って建て小屋) で茅葺き (ガ<sup>ラ</sup>ヤ<sup>ラ</sup> [gajaja:]) であった。炊事場と農具置き場を兼ね、シブル [ʃiburu] (冬瓜) やカブ<sup>ツ</sup>チ [kabuttʃi] (カボチャ、南瓜) を保存しておくのに利用した。例、トー<sup>ラ</sup>ヲ<sup>ヌ</sup> ウ<sup>ブ</sup>ヲ<sup>ナ</sup>ビ<sup>ナ</sup>ー オー<sup>ヲ</sup>ヌ ヲ<sup>イ</sup>ーバ<sup>カ</sup>シ<sup>ヲ</sup> [to:ranu ʔubunabina: ʔo:nu ʔi: bakaʃi] (トー<sup>ラ</sup>の大鍋で豚の飯≪飼料≫を炊きなさい)。

チ<sup>パ</sup>ル [tʃiparu] (名) 「突張り」の義か。つかい棒。支柱のこと。ム<sup>ヤ</sup>ー<sup>バ</sup>ラ [muja:bara:] (母屋柱) とム<sup>ヤ</sup>ー<sup>バ</sup>ラーの間に、X字状の貫きを入れて、更に横二段に貫きをわたして、耐震構造を強化したもの。チ<sup>パ</sup>ルやヌ<sup>キ</sup>には、ッ<sup>サ</sup>ビ (楔) を両側から打ちこんで固定するので、釘は使用しない。例、ヲ<sup>ヤ</sup>ー<sup>ナ</sup> チ<sup>パ</sup>ル イ<sup>リ</sup>ティ スー<sup>ラ</sup>ヲ<sup>シ</sup> [ja:na tʃiparu ʔiriti su:raʃi] (家にチ<sup>パ</sup>ルを入れて、柱を強化しなさい)。

チャ<sup>ブ</sup>ダイ [tʃabudai] (名) 「卓袱台」の中国語音の転訛したものといわれている。鳩間方言へは共通語から借用されたものであろう。円形のものが戦前から使用されていた。短い脚の食台の一種で、脚の部は折り畳み式で収納できる、新式のハイカラな食台であった。例、ワッ<sup>ヲ</sup>テ<sup>ヌ</sup> プ<sup>ソ</sup>ー<sup>ヲ</sup> イ<sup>チ</sup>ル<sup>ヲ</sup> チャ<sup>ブ</sup>ダイ カイ<sup>オ</sup>ー<sup>ヲ</sup>タ [wattenu p̄so: ʔitʃiru tʃabudai kaio:tta] (あなたの家の人は、いつチャ<sup>ブ</sup>ダイをお買いになりましたか)。

チョー<sup>チ</sup>ン [tʃo:ʃig] (名) 提灯、共通語からの借用語か。主として、七月のお盆に仏壇につるして祖霊を迎え、もてなすのに用いた。日常生活で提灯を用いることはほとんどなかった。仏壇を飾るものとして、石垣島から購入してきたものである。例、チョー<sup>チ</sup>ン<sup>ヲ</sup> マー ソー<sup>ヲ</sup>ラン<sup>ナ</sup>ール トウ<sup>ク</sup>ニ<sup>ヲ</sup> カザ<sup>ル</sup>ン<sup>テ</sup>ィ<sup>ヲ</sup> カイ<sup>オ</sup>ー<sup>ヲ</sup>タ [tʃo:ʃimma: so:ran-na:ru tykuni kadzarunti kaio:tta] (提灯はお盆に仏壇を飾るために購入された)。

ッ<sup>サ</sup>ビ [ssabi] (名) 「楔」の義。枿穴に貫き材を通して、その間に枿穴の両側から楔を打ち込んで柱の骨格を固定し、強化したもの。◁形の、長さ約20センチ程の楔。建築用材の切端を利用して作った。kusabi→ssabi のように融合変化したもの (逆行同化)。例、ク<sup>マ</sup>ン<sup>ヲ</sup>ト<sup>ン</sup>マー ツ<sup>サ</sup>ビ ホー<sup>サ</sup>ン<sup>ヲ</sup>タ<sup>ン</sup>ティ<sup>ン</sup> ヲ<sup>ミ</sup>サン [kumantomma: ssabi ho:santantim misaŋ] (ここの所は楔を喰わせなくても≪打たなくても≫よい)。

ツス<sup>ル</sup>ン [ssuruŋ] (動) 拭く。「<sup>ツスル</sup>擦る」の転訛したものか。kosuru→Φusuru→ssuruŋの変化過程が考えられる。布巾などで軽く拭くのも、ツス<sup>ル</sup>ンといい、雑巾などで縁側の床板



を力をこめて拭くのもツスルンという。例、マンタヌ トゥーシ ゴーキンシ ッスリ  
ティ アサビバ [mantanu tu:ʃi dzo:kinʃi ssuriti ʔasabiba] (前の方の縁側の床板  
を雑巾で拭いてから遊びなさいよ)。

ティブク [tibuku] (名)「手矛」の義か。屋根を葺く際に、茅を押さえるのに用いる直径  
約3～3.5センチ、長さ約3メートル程の若木や竹。先端(根の所)削って矛状にし、そ  
れを茅に突き刺し、シミナー [ʃimina:] (締縄)で締め結えながら連結していく。屋根  
葺人は、内側からパルシキ・プスが突き出すパル(竹矛)の穴に締縄を通して、タルキ  
に掛けさせ、それをこのティブクに掛けて強く締め、茅を押さえて葺きあげるのである。  
足で、トントンと踏み固めて締めつけ、葺き進める。葺き手と内側のパルシキ・プスの呼  
吸が合わないと上手に葺けないので、掛け声をかけ合いながら葺き進めた。例、シミナ  
ーヤ タルキトウ ティブクナ カキティル シミシキ ヤーヤ フクタ [ʃimi-  
naja tarukitu tibukuna kəkɪtɪru ʃimiʃiki ja:ja ɸukuta] (締め縄は垂木と手矛に掛  
けて締めつけて、屋根は葺いた)。

ティンダティ [tindati] (名)起工式のこと。吉日を選んで着工する。イチバンザイ  
[ʔitʃibandzaiku] (一番大工、棟梁のこと)と家主、ユイプス [jui-pʊsu] (結い人)らが、  
材木にシミナー [ʃimina:] (墨縄)で墨線を入れたり、枿穴を掘ったり、枿を作ったり  
して建築工事を開始すること。例、ウンネヌ ヤーヤ ティンダテソーレン  
[ʔunnenu ja:ja tindate: so:re:ŋ] (その家の家は、起工式はすでにすまされた)。

ティンゾー [tindzo:] (名)天井。ティンゾーヌ サン [tindzo:nu saŋ] (天井の棧)。  
ティンゾーイツァ [tindzo:ʔitsa] (天井板)。ティンゾーヌ ウラ [tindzo:nu ʔura]  
(天井の裏。天井裏のこと)。例、ティンゾー ヌーリティ ドゥル カキ ウラシ  
(天井裏にのぼって、土(砂)を掻きおろしなさい)。古い家では、瓦を葺く際に粘土を  
捏ねて屋根にのせるが、これが古くなると落ちて天井裏につもるようになる。

トゥイ [tui] (名)樋。屋根を流れる雨水を受けて、水タンクや水甕などに流す半筒形のも  
の。普通は、直径12～13センチ、長さ約2間ほどの大竹を二つに割ったものを利用した。  
若い人は共通語の影響で「トゥイ」というが、老人層は、ビー [bi:] (樋)という。例、  
ヤーヌ ヌキナー トゥイ カキラ ディー [ja:nu nukina: tui kəkira di:]  
(家の軒に樋を掛けようよ)。

トゥーシ [tu:ʃi] (名)「通し」の義か。縁側、廊下。板張りの縁側。杉板のなかった時代に  
は、フクン [ɸukun] (福木)の角材を厚さ約7分の板に挽いて、フンツァイツァ [ɸ  
untsa-itsa] (「踏み板」の義か。床板のこと)を作った。これを、イツァ バクン [ʔitsa  
bakun] (板を分く)という。従って縁側の板張の床板は、凹凸があったが、夏場は、こ  
の板の間が涼風を呼び、子供らは涼を求めて、このトゥーシに寝たものである。戸を開放  
したまゝ、トゥーシに寝ると、自然の冷気で熟睡することができた。夏場は掛け布団も無

用であった。潮騒の音を枕元に聞きながら、天然の音楽を楽しむことのできる寝室でもあった。例、トゥーシ<sup>フ</sup>ナー ナーパイ シー<sup>フ</sup> ニビベ<sup>フ</sup> モー ター<sup>フ</sup>ヤ [tu:ʃina: na:pai ʃi: nibibe: mo: ta:ja] (縁側の板の間に身を伸ばして寝ているのは誰か)。トゥーシは、イツァフンツァ [ʔitsaΦuntsa] (板張りの床、「板踏み板」の義か) が普通である。

トゥー<sup>フ</sup>ジン [tu:dʒiŋ] (名)「灯心」の義。綿糸で織った厚手の布で、灯油に浸して油を浸みこませ、火をともしのに用いるもの。普通は幅約2センチ、厚さ約1.5ミリ程度のもので、これを、ゴブトゥー<sup>フ</sup>ジン [gobutu:dʒiŋ] (五分灯心) といい、大きいものはハチブトゥー<sup>フ</sup>ジン [haʃibutu:dʒiŋ] (八分灯心) といった。例、トゥー<sup>フ</sup>ジン ンジダー<sup>フ</sup>ヌンメーマ<sup>フ</sup> シミ<sup>フ</sup>リ [tu:dʒiŋ ʔndʒida:nu ʔmme:ma ʃimiri] (灯心が出すぎているので心し締めなさい)。

トゥー<sup>フ</sup>ル [tu:ru] (名) ランプ、「灯籠」の義か。八十歳代以上の人が日常的に用いる。昭和三十年代までは電気がなかったので、日常的にトゥールを用いていたが、その頃でも若い人(三十歳代まで)はランプと称していた。今日では電灯が点灯し、トゥー<sup>フ</sup>ルは文化財と化している。例、ムカ<sup>フ</sup>セー トゥー<sup>フ</sup>ル フシケーティル ホンヌン<sup>フ</sup> ユモー<sup>フ</sup>ツタ [mukase: tu:ru ʃike:tiru honnun jumotta] (昔は灯籠《ランプ》をつけて本も読まれた)。

トゥクガマチ [tykugamatʃi] (名) 床框。床の間の鴨居と敷居にある横木。クル<sup>フ</sup>キー [kuruki:] (「黒木」の義、黒檀の木) の若木を使用した。トゥクブチ [tykubutʃi] ともいう。一種の装飾品である。例、トゥクガマチ<sup>フ</sup> ピカラ<sup>フ</sup>シ カザリバドゥ ヤー<sup>フ</sup>ユンカイ<sup>フ</sup>ヤル [tykugamatʃi kadzaribadu ʃa:ʒuŋ kaija:ru] (床框を光らして飾ればこそ家も美しくなるというものだ)。

トゥクニ [tykuni] (名) 仏壇。普通は奥行3尺、間口6尺の大きさに作る。高さ約80センチの所から段を作り、3段にして、最上段に位牌(イーパイ [ʔi:pai]) を安置し、両側にパナ<sup>フ</sup>イキ [panaiki] (花活) を置く。その下の段には、コーロ [ko:ro] (香炉) を置く。下段には供物(シキムヌ [ʃikimunu]) を供える。例、トゥクニヌ<sup>フ</sup> ウヤブス<sup>フ</sup>ン フマイナー ティー<sup>フ</sup> ッサイ<sup>フ</sup>リ [tykuninu ʔujapysuŋ maina: ti: ssairi] (仏壇の先祖の前に合掌なさい)。

トゥクブチ [tykubutʃi] (名)「床縁」の義。床の間の前端にある装飾用の横木。黒檀の木を使うのを常とした。トゥクガマチ [tyku-gamatʃi] (床框) に同じ。黒檀がない場合は、キャンギ [kja:ŋgi] (楨、イヌマキ) などの化粧木を使った。例、トゥクブチヌ<sup>フ</sup> クル<sup>フ</sup>キーシ サンシン<sup>フ</sup> スク<sup>フ</sup>リ スコー<sup>フ</sup>レーヌ ナールン<sup>フ</sup>ダー [tykubutʃinu kuruki:ʃi sanʃin sykuri syko:re:nu na:ruŋ da:] (床縁の黒檀で三味線を作っているが、よく鳴るよ)。

トゥダナ [tudana] (名)、「戸棚」の義か。オシイレの下半分に引き戸を入れて、神行事、仏事等に用いる酒器や什器類を収納しておく所。サキクビン [saki-kubiŋ] (酒瓶)、サキスッカー [sakisukka:] (酒急須)、サカシキ [sakaŋiki] (盃、酒盃の義か)、カンビン [kambiŋ] (燗瓶)、カザリクビン [kadzari-kubiŋ] (「飾瓶」の義か。白磁製の大型燗瓶。錫製のものもある)などを収納、保管しておくのに利用していた。

トゥルクビ [turukubi] (名)「取り壁」の義か。茅で戸を作り、取り外し式にした戸。茅を約5センチの厚さにして、竹やススキをあじろに編んだもので挟み、棧をわたして、両側から強く締めて戸の形に仕上げたもの。取りはずし式の戸で、雨戸をひくようなものではない。両手で支え持って、開閉した。例、トゥルクビ スクフリ タティフリ [turukubi sŋkuri taŋiri] (トゥル壁を作って立てなさい)。

トゥズムン [tudzumun] (動) 終える。完結する。完了する。トゥズマヌ [tudzumanu] (終えない)、トゥズミティ [tudzumiti] (終えて)、トゥズミンギサン [tudzumigisaŋ] (終えそうだ)、トゥズムカー [tudzumuka:] (終えたら)。例、クヌ シグトゥー トゥズミティルメー フカヲヌ シグトー ティーカキラリル [kunu ŋigutu tudzumitiru me: ɸŋkanu ŋiguto: ti:kakirariru] (この仕事を終えてから、他の仕事は手がけられるというものだ)。

トゥマルン [tumarun] (動) 泊る。旅先きの宿に宿泊する。鳩間島の人<sup>1</sup>は田地耕作のため、西表島北岸の田小屋に四、五日の泊りがけで耕作した。トゥマラス [tumaranu] (泊らない)、トゥマリティ [tumariti] (泊って)、トゥマリプサン [tumaripusaŋ] (泊りたい)、例、クヌ タベー パイヲタナー トゥマラン ドーヲシ ピームドゥル スー [kunu tabe: paitana: tumarando:ŋi pi:muduru su:] (今度の旅は南方端《西表北岸》に泊らないで、日帰りする)。

トゥルヌ・ヤー [turunu-ja:] (名)、「鳥の家」の義。鶏舎のこと。鶏は普通、放し飼いにされていたが、鶏の容姿で、どの家の鶏かが見分けられた。鶏舎のない家の鶏は、庭木や屋敷林の樹上にとまって寝るので、木の枝には鶏糞が溜っていて不潔であった。子供が知らずにその木の下を通ると、タイワンポ<sup>2</sup>ー [taiwambo:] (頭髮の毛根部に白癬のように発症する皮膚病)に罹ると言われていた。鶏舎は、中が約半間、長さが約一間、高さが約5尺程度の小屋。内部は、二段、三段に竹の棚をかけて作り、止まり木にした。下段の奥には藁で巣を作っておくと、それに産卵した。地面に作った巣は、産卵後、卵を孵化させ、雛を育てるのに用いた。早朝、小屋の戸を開けると鶏は舎外に出て餌を求め、夕刻には自然に小屋に帰って寝た。庭先きで糶摺りをしたり、米搗きをすると、碎米を啄みに鶏が集まってきた。糶を日干しにしたり、豆類を日干しにする際にも、それを啄みに集まるので、鶏を追い払うのに苦労させられた。鶏舎の鶏は、夜中の3時頃から鳴きはじめる。最初の鶏鳴は、イチバン・ドゥル [itiban-duru] (一番鶏)といい、順次、ニーバ<sup>3</sup>ン・ドゥ

ル [ni:ban-duru] (二番<sup>ドリ</sup>鶏)、サンバン<sup>ン</sup>・ドゥル [samban-duru] (三番鶏) といった。鳥では、一番鶏が鳴いたら、悪霊や魑魅魍魎の類は活動を停止すると信じられていた。子供が夜中に目覚めると、暗闇の恐怖から逃れるために、一番鶏の鳴くのを待ち続けた。一番鶏の鶏鳴を確認すると、やっと安心して寝つくことができた。一番鶏が鳴いた後は夜中に使に出されても、怖いことはなかった。例、トゥルン<sup>ン</sup>・ヤーナ トゥルヌ コー<sup>マ</sup> マナシシケー [turun-ja:na turunu ko:ma naʃiʃiʃi:ke:] (鶏舎に鶏が卵を産んである)。

トーフ<sup>ン</sup>パク [to:Φ<sup>u</sup>-paku] (名)「豆腐箱」の義。豆腐を作る際、箱型に入れて水分をきり、固めるのに用いるもの。幅約12センチ、長さ約20センチ、深さ約12センチの木製の箱。この箱の内側に綿布を敷き、煮た豆腐汁を入れて蓋をし、重石をかけて押し、水分を切って固めるのに用いる。例、トーフ<sup>ン</sup>パクナ トーフ<sup>ン</sup> シミティ カタミラン<sup>ン</sup>ノーレー [to:Φ<sup>u</sup>pakuna to:Φ<sup>u</sup> ʃimiti kaʔamiranno:re:] (豆腐箱に豆腐を入れて固めないか《そうしてくれよ》)。

ドブ [dobu] (名) 汚水の溜っている所。台所の流しの水が溜っている所。排水溝などに下水が溜っている所。屋敷内では西北方などに穴を掘って下水を溜めてある家もあった。例、ドブナ<sup>ー</sup> アウバイヌ<sup>ン</sup> シディティ<sup>ン</sup> カーラヌ<sup>ン</sup> [dobuna: ʔaubainu ʃiditi ʔka:ranu] (ドブに青蝇が発生して手がつけられない)。

ナーブ<sup>ン</sup>ク [na:buku] (名) 縄箱。漁師が出漁するに際して、釣り針や釣り糸の漁具を必要な分と、その予備を縄箱の中蓋に揃えて、底の方にはマッチ、タバコ等貴重品を入れて持参する箱。大きなナーブ<sup>ン</sup>クには、縦約50センチ、横約60センチ、深さ約40センチのものがあり、これには衣類まで収納されていた。小さなナーブ<sup>ン</sup>クは、縦約25センチ、横約20センチ、深さ約12センチ程の小箱であった。これをナーブ<sup>ン</sup>コー<sup>マ</sup>といった。

ナー<sup>ン</sup>ムス [na:musu] (名)「長筵」の義。幅3尺、長さ9尺ほどの筵。普通は長さ6尺程度であるが、六畳の座敷に敷くために長くしたもの。三枚続きになっていて、折り畳んで収納する。トゥーシ [tu:ʃi] (縁側) などに敷くのは、幅3尺に、長さ9尺程のものがよく使われる。例、マンタヌ<sup>ン</sup> ナー<sup>ン</sup>ムス シキ<sup>ン</sup>バ [mantanu ʔinna: na:musu ʃikiba] (前方の縁に、長筵を敷きなさいよ)。

ナーラ<sup>ン</sup>シ [na:raʃi] (名) 軒に作業衣類を吊すために作った所。ハギバラー [hagibara:] の間に横木をわたして、農作業や漁業用の衣類を掛けるのに用いたもの。サン<sup>ン</sup>ヌパーカドゥ [sannupa:kadu] (西南の角) や家の東側に作って、網などを干すのにも用いた。例、マンタヌ<sup>ン</sup> ナーラ<sup>ン</sup>シナー ユグリキン<sup>ン</sup> サイシキ [mantana na:raʃina: jugurikin saijiki] (前方のナーラ<sup>ン</sup>シに汚れた作業着を掛けておきなさい)。

ナカグス<sup>ン</sup>ク [nakagusyku] (名)「中石垣」の義か。ウブ<sup>ン</sup>ヤー [ʔubuja:] (母屋) とペーラ<sup>ン</sup>フチ [pe:raΦ<sup>u</sup>tʃi] (門、「入り口」の義) の中間にある石垣。目隠し用に積んである。門より内側へ向って右側は上手(東)、左側は下手(西)となる。祝儀の際の客人は上手

より家に入り、親しい人は、普通は下手より出入りした。不祝儀や法事の際も下手より出入りしていたが、今は忘れられている。ピン<sup>ツ</sup>ブン [pim<sup>ツ</sup>pug] ともいうが、借用語であろう。普通は長さ約4メートル、高さ約2メートル、幅約50センチに積む。両側は石を組んで積み、ナカフク<sup>ツル</sup> [naka<sup>ツ</sup>Φ<sup>ツ</sup>ukuru] (「中袋」の義か。中央部)には小石を詰め、組み石の隙間を埋め、石垣を固めるようにする。ナカグスクの内側の石垣の付け根に、パナ<sup>ツ</sup>ギ [panagi] (「花木」の義、クロトン類)を植え、トゥラヌ・ズー [tura<sup>ツ</sup>nu-dzu:] (とらのを)を植えて、シキダ<sup>ツチ</sup>・ズングニチ [ʃikidat<sup>ツ</sup>ʃi-dzuggunit<sup>ツ</sup>ʃi] (朔日・十五日)の朝には床の間の神前や仏壇の仏前に花木を生け、サー<sup>ツド</sup> [sa<sup>ツ</sup>do] (茶湯)を供えた。例、イツァン<sup>ツ</sup>パイキヌ パーヤ ザー<sup>ツ</sup>トゥクナー パナ<sup>ツ</sup>ゲーヤ トゥクニ<sup>ツ</sup>ナ イキ<sup>ツ</sup>リ [ʔitsampai-ki<sup>ツ</sup>nu pa<sup>ツ</sup>ja za<sup>ツ</sup>tukuna<sup>ツ</sup> panage<sup>ツ</sup>ja t<sup>ツ</sup>ukunina<sup>ツ</sup> ʔiki<sup>ツ</sup>ri] (榊の葉は床の間に、花木≪クロトン≫は仏壇に活けなさい)。

ナカ<sup>ツ</sup>ザ [nakadza] (名) 台所の土間。三番座とカマチ [kamat<sup>ツ</sup>ʃi] (竈)の間に設けられた土間のこと。農家では畑から帰って来て着替える間もなく台所作業にとりかからなければならぬので、土間の方が便利であった。農家の女は、下駄を履いて、板の間へ上ったり、土間へ下りたりする暇はなかった。例、ツファイグル<sup>ツ</sup> ナカ<sup>ツ</sup>ザナ ウタ<sup>ツ</sup>シ パニポー<sup>ツ</sup>リ シラー<sup>ツ</sup>シ シケー [ffaiguru nakadzana ʔuta<sup>ツ</sup>ʃi panipo<sup>ツ</sup>ri ʃira<sup>ツ</sup>ʃi ʃike:] (食べ残した残飯を土間に落して、散乱させて、散らかしてある)。

ナカ<sup>ツ</sup>ザ (土間)は、母屋の西側に約1間幅の張り出し(スイヤー [suija:] ≪添え出し≫の義か)を作り、板壁を張り、土の竈を作って、三番座の床との間を土間にするのが普通であった。ナガザに塵埃が散乱していると、その家の娘の躰が悪いといわれていた。

ナカ<sup>ツ</sup>バラ [nakabara:] (名)「中柱」の義、大黒柱のこと。イチバン<sup>ツ</sup>ザ [ʔit<sup>ツ</sup>ʃibandza:] (一番座)とニーバン<sup>ツ</sup>ザ [ni<sup>ツ</sup>:bandza:] (二番座)の境に立つ柱。普通はキャーギ [kja<sup>ツ</sup>ŋgi] (イヌマキ、榎)などの最高級の材木を使用することを誇りとした。ドゥス<sup>ツ</sup>ヌ [dusu<sup>ツ</sup>nu] (タイワンオガタマノキ)、ツイゾイ<sup>ツ</sup>キー [ʔidzoi-ki:] (モクコク)などの大木が使われることもあった。例、ヤー<sup>ツ</sup>ヌ ナカ<sup>ツ</sup>バラ ツヌー<sup>ツ</sup>キー シウカウタ<sup>ツ</sup>カヤー [ja<sup>ツ</sup>nu nakabara: nu<sup>ツ</sup>ki: ʃikautakaja:] (家の中柱には、何という木を使ったかねえ)。

ナカ<sup>ツ</sup>フタ [naka<sup>ツ</sup>Φ<sup>ツ</sup>uta] (名)「中蓋」の義か。本蓋の下におく芭蕉の葉やクバの葉のこと。おとし蓋の一種か。芋をふかしたり、煮しめものを炊く際に用いた。蒸しもの場合はナカ<sup>ツ</sup>フタをよく用いたものである。例、シミ<sup>ツ</sup>ウン バカ<sup>ツ</sup>ス<sup>ツ</sup> ピン<sup>ツ</sup>マー ナカ<sup>ツ</sup>フタ イリ<sup>ツ</sup>ティル<sup>ツ</sup> バカ<sup>ツ</sup>ソー<sup>ツ</sup>ツタ ナー<sup>ツ</sup> メー [ʃimium bakasu pimma: naka<sup>ツ</sup>Φ<sup>ツ</sup>uta ʔiritiru bakaso<sup>ツ</sup>ttta na<sup>ツ</sup> me:] (煮しめいもを煮る際にはナカ<sup>ツ</sup>フタを入れて炊かれましたねえ、もう)。

ナカ<sup>ツ</sup>ヤドウ [nakajadu] (名)「中戸」の義か。一番座や二番座の仕切りに立てる板張りの戸。襖の代りに用いられていた。ソー<sup>ツ</sup>ジ [so<sup>ツ</sup>:dʒi] (障子)をたてる家は少なかった。例、

ナカ<sup>ナ</sup>ヤ<sup>ヤ</sup>ドー ムール パンツァシティ<sup>ツ</sup> ザー ピスミラン<sup>ミ</sup>ノレー [nakajado: mu:ru pantsafjiti pjsumiranno:re:] (中戸<sup>ナカ</sup>内戸<sup>ナカ</sup>みんなをはずして、座敷を広めないか)。

ニーバン<sup>ニ</sup>ザ [ni:bandza] (名)「二番座」の義。戸主夫婦のニビシキニ [nibifikini] (寝室、寝所)となる所。普通、この部屋にトゥクニ [tɥkuni] (仏壇)がしつらえられる。一番座や三番座とは、ナカ<sup>ナ</sup>ヤ<sup>ヤ</sup>ドゥ [nakajadu] (中戸、板戸)で仕切ってある。法事や仏事に関する行事は、この部屋から西側の部屋を使ってなされる。トゥクニの下の空間を利用した押入、物置きを、ダン<sup>ダ</sup>トゥク [dantɥku] という。

ニカイヤー [nikai-ja:] (名)「二階家」の義。二階建のこと。鳩間島には二階建の家はなかった。鯉節工場のバイカン<sup>バ</sup>・ヤー [baikan-ja:] (「焙乾家」の義)は切妻屋根の構造で、中二階、屋根裏の三段に仕切ってあった。最上段まであげて焙乾したものを<sup>ニ</sup>ピギティ [pigiti] (剥いで、削って)出荷した。例、イサナケー パラバ<sup>パ</sup>ル ニカイヤーヤ ミラ<sup>ミ</sup>リ [ʔisanake: parabarunikai-ja:ja mirari] (石垣島へ行ったら二階家は見える)。

ニビパンツァスン [nibipantsasug] (動)ねそびれる。例、ユーキ<sup>ユ</sup>ヌ シジキティ キュー<sup>ク</sup>ヤ ニビサー<sup>ニ</sup>リル<sup>リ</sup>ティ ウムイ ベータ<sup>ベ</sup>ヌ プスヌ オー<sup>オ</sup>リ ニビパンツァシナー<sup>シ</sup>ヌ [ju:kinu fidzíkiti kju:ja nibisa:riruti ʔumui be:tanu pɥsunu ʔo:ri nibipantsafi na:nu] (夜更しが続いて、今日は寝ようと思っていたのに、人が来られて、みすみす寝そびれてしまったよ)。

ニンゴー<sup>ニ</sup>ビン [niggo:big] (名)「二合瓶」の義。二合入りの瓶。酒瓶のこと。例、ニンゴー<sup>ニ</sup>ビン プス<sup>プ</sup>ツク カーニ<sup>カ</sup>テー ムティ パララ<sup>パ</sup>ン ヲ<sup>オ</sup>ー [niggo:bim pɥsukku ka:nite: muti pararan jo:] (二合瓶一個だけとは持って行けないよ)。ニンゴー<sup>ニ</sup>・クビン [niggo:kubig] (二合瓶)ともいう。

ヌーヌ・マッフア [nu:nu-maffa] (名)布製の枕。「布枕」の義。布袋に粳殻を入れたり、小豆を入れたりして作った枕。ハイカラな枕として若い男女に好まれたが、一般の家底では木枕が愛用されていた。例、ヌーヌマッファー<sup>マ</sup> バカー<sup>バ</sup>ムンドゥ シタル ウイ<sup>ウ</sup>ブソー ソーラン<sup>ソ</sup>セン [nu:numaffa: baka:mundu fɪtaru ʔuipɥso: so:ranseŋ] (布枕は若者がしたのであって<sup>ナ</sup>使ったのであって<sup>ナ</sup>老人はしなかった)。

ヌキ [nuki] (名)「貫き」の義。「貫き柱」のこと。柱と柱を貫き通して連結し、柱を固めるもの。幅11~12センチ。厚さ約3センチ、長さ約1間半の板状の材。瓦葺きの場合、壁板(ゴブ・イツァ [gobu-itsa] <sup>ナ</sup>五分板<sup>ナ</sup>)は、この「ヌキ」(貫き板)に釘を打ちつけて作った。例、ヤー<sup>ヤ</sup>ヌ ヌキ イリティ<sup>イ</sup> ッサビ<sup>ツ</sup> ウティティ シミ<sup>シ</sup>リ [ja:nu nuki ʔiriti ssabi ʔutiti fimiri] (家の貫きを入れて、楔を打って締めなさい)。

ヌキ・ヤー [nuki-ja:] (名)「貫き屋」の義。アナ<sup>ア</sup>プリーヤー [ʔanapuri-ja:] (穴掘り家)の対。角材に貫き穴を掘ったり、杣穴や杣を作って連結し、家を組み立てる方式で建築する

家のこと。例、ワツテヌ プソー<sup>ㄱ</sup> ヌキヤー<sup>ㄱ</sup> スク<sup>ㄱ</sup>ローツタティ<sup>ㄱ</sup> ミー ツォー<sup>ㄱ</sup>  
[wattenu p̥sɔː nukijaː s̥kuroːttati miː tsoː] (君の家の人は、貫き家を作られたそ  
うだねえ。でしょう?)。

ヌシ<sup>ㄱ</sup>トゥル [nuʃ̥turu] (名) 語源不明。「乗せ取り」の義か。タキフンツァ<sup>ㄱ</sup> [t̥aki ɸ̥  
untsa] を編む際、ユカム<sup>ㄱ</sup>チ [jukamut̥ʃi] (大曳) の下から竹を掛けて縄で締め、フン<sup>ㄱ</sup>  
ツァ [ɸ̥untsa] (床) が持ち上がらないようにしたもの。タキフンツァ (竹床) とヌシ  
トゥルを所要所で強く締めておくことが必要である。例、タキフンツァーヤ ヌシ<sup>ㄱ</sup>  
トゥルナ<sup>ㄱ</sup> シナ<sup>ㄱ</sup> カキティ<sup>ㄱ</sup> フミ ヨー [t̥aki ɸ̥untsaːja nuʃ̥ituruna ʃina k̥akiti  
ɸ̥umi joː] (竹床はヌシトゥルに綱をかけて編みなさいよ)。

パイ [pai] (名) 灰、カマチヌ・パイ [kamat̥ʃinu-pai] (竈の灰)、ウールパイ [ʔuːrupai]  
(石灰)、アチ<sup>ㄱ</sup>パイ [ʔat̥ʃipai] (熱い灰) などがある。カラパイ [karapai] (乾燥した  
灰) ともいう。例、カラパイヌドゥ<sup>ㄱ</sup> カジン<sup>ㄱ</sup> トゥバサリティ<sup>ㄱ</sup> ミー<sup>ㄱ</sup>ヌ<sup>ㄱ</sup> ナカー  
ペー<sup>ㄱ</sup>リ ミツ<sup>ㄱ</sup>ム ナリ ベー<sup>ㄱ</sup> [karapainudu kad̥ʒin tubasariti miːnu nakaː peːri  
mitsumu nari beː] (灰が風に飛ばされて目の中に入って目潰しになっている)。

フバウ [bau] (名) 「棒」の義。①木や竹の荷い棒のこと。②棒踊に用いる木製の武具。棒。  
③棒踊り。普通は<sup>おうこ</sup>カシンキー [kaʃ̥igkiː] (オキナワウラジロガシ) の若木で作っていた。  
てんびん棒や荷物運搬用の 杓 などの総称。豊年祭の棒踊りに対してもいう。例、パトゥ  
マ<sup>ㄱ</sup>ヌ バウ<sup>ㄱ</sup>ワー イッケナ<sup>ㄱ</sup> ウム<sup>ㄱ</sup>ツサン [p̥at̥umanu bauwaː ʔikkena ʔumussaŋ]  
(鳩間の棒踊りは非常におもしろい)。

フバウ ウトゥン [bau ʔutug] (句) 「棒を打つ」の義。「棒踊りをする」の意。豊年祭には  
奉納踊りとして、棒踊りが演じられていた。西村と東村に分れて競演した。西村では、サ  
ク<sup>ㄱ</sup>ボー [s̥akuboː]、ルクサク<sup>ㄱ</sup>・ボー [rukusaku-boː] (六尺棒)、ナギナタ [naginata]  
(長刀) などが演じられた。東村の棒踊りは一般的に力強く、激しい動きが特徴で男性的  
であるのに対し、西村のそれは動きが柔かで、型を重視するものであった。

バキ<sup>ㄱ</sup>チ [bakit̥ʃi] (名) ばけつ。bucket の転訛したもの。アルミや鉄板などで作った水桶。  
普通は1斗入りで、円形。半円形の柄がついて、それに紐をつけて天秤棒で担ぐ。水を運  
ぶのに用いる。四角の1斗入り石油罐を利用したものは、バキチとはいわない。これは<sup>ㄱ</sup>  
ガンガング [gaggangangu] という。例、バキ<sup>ㄱ</sup>チナ ミジ マーシ<sup>ㄱ</sup>クー [bakit̥ʃina  
mid̥ʒi maːʃikuː] (バケツに水を入れて運んでください)。

ハギバラー [hagibaraː] (名) 「脛柱」の義か。軒下の柱のこと。ヌキヤー [nukijaː] (貫き  
家) は、茅葺きでも瓦葺きでも、南側と東側に半間ほど軒を出すのが普通であった。その  
軒を支える柱をハギバラーという。ハギバラーを「脛柱」とすると、これは建築史の一面  
を照らし出す語となるであろう。竪穴式住居の屋根はテント型で、直接地面に落ちていた  
とされているが、これに、「脛」がつくと、切妻屋根の構造が成立するように思われる。

バク [p̄aku] (名) 箱。箱の総称。主として、杉板を利用して箱を作ることが多かった。杉板は本土より輸入された。ナーブク [na:buku] (縄箱)、ジブク [d̄zibuku] (重箱) モミバク [momipaku] (粃箱) などがある。例、イサンケーラ シギイツァ カイフキーティ バク スクラ ディー [ʔisagke:ra ſigiitsa kaiki:ti p̄aku ſukura di:] (石垣島より杉板を買ってきて箱を作ろうよ)。

バクジミ [p̄akudzimi] (名) 箱詰め。箱の中に物を詰めこむこと。大事なもの。貴重なものは箱に詰めて保管したり、輸送したりした。例、カンネヌ プソー ヤーウツリ スンティ シー ニームチ ナビ カマ マカルドンゲン ドーレー バクジミ シー ス コー レー [kannenu pyso: ja:utsuri sunti ſi: ni:mutſi nabi kama makarudongun do:re: pakudzimi ſi: ſuko:re:] (あの家の人は、家移り《引っ越し》するといって、荷物、鍋、釜、お碗などを箱詰めにしておいてあるよ)。

バク・マッフア [p̄aku-maffa] (名) 箱枕。板で箱形の枕に作ったもの。縦約12センチ、横約18センチ、高さ約7センチの箱を作って枕としたもの。軽くて扱いやすいので老人たちに重宝された。例、バク・マッファー ヨー カニフンマー ピットシン シュカーンドーシ スクルタ [p̄akumaffa: jo: kaniɸum pittſin ſika:ndo:ſi ſukuruta] (箱枕はねえ、鉄釘を一本も使わないで作ったものだ)。

パコーマ [p̄ako:ma] (名) 小箱。小さな箱。コーブク [ko:buku] (香箱) やジンバク [d̄zimp̄aku] (銭箱) などは、小さな箱であった。例、ウブパコーラ パコーマー ンベーマナー バキ イリリバ [ʔubup̄ako:ra p̄ako:ma: ʔmbe:mana: baki ʔiririba] (大きな箱から小さな箱へ、少しずつ分けて入れなさいよ)。

ハシゴ [h̄aſigo] (名) 梯子。二本の柱の間に横木を渡して、それを踏み登って、高い所へ登る道具。普通は、幅約40センチ、長さ約4メートルの大きさに作る。使用する際にユクンツァメー [jukuntsame:] (床下) より出して軒にかけ、屋根になかけて屋根葺きなどに使用した。例、アーネーラ ハシゴ カリクー [ʔa:ne:ra haſigo kariku:] (東隣の家から梯子を借りてきなさい)。

パダムス [padamusu] (名) 「肌筵」の義か。就寝の際に畳の上に敷く筵。上質の備後産の藁で編んだ蓆。直接肌に接触する筵であることから命名されたものであろう。普通は幅3尺、長さ6尺の筵であるが、長さ9尺で、二枚続きのものもある。6畳敷の筵は特に長いので、ナームス [na:musu] (長筵) という。例、パダムス タンガ シクカー ミサン [padamusu tagga ſikuka: misaſ] (肌筵だけ敷げはよい)。

ハチバンセン [haſjibanseſ] 「八番線」の義か。直径約7ミリ程度の針金。ワイヤーに用いる針金。長さ約30センチ程に切り、先端部を研いで鉗に使った。それを3メートルほどの竹につけて、魚突き用の鉗とした。例、ハチバンセン キシティ フチ トウイティ ユイ シキルカー ユクン ナリスヨー [haſjibanseſ kiſiti ɸuſti tuiti



jui ʃ̥k̥iruka: jukun narisuj̥o:] (八番線を切って、先端部(口)を研いで柄をつけると、銚になるよ)。

ハツリ [h̥ʌtsuri] (名) 樹木をはつること。山で材木を伐り、運び出した後、斧で軽く斜めに切りつけて、次に本格的に削り落して角材に仕上げていく。このように少しずつ削っていくことをいう。左足を丸太にかけ、右足で体重を支えながら、ヤマブーヌ [jamabu:nu] (山斧) で木の右側から切りこんでいき、10センチ間隔で斧を打ち込むと削りやすい。これを繰り返して角材に仕上げる。

ハツルン [h̥ʌtsur̥uŋ] (動) 山出しの材木を斧で削る。ハツラヌ [h̥ʌtsuranu] (削らない)、ハツリティ [h̥ʌtsuriti] (削って)、ハツリプサン [h̥ʌtsuri-pusaŋ] (削りたい)、大工用語で、おそらく、家屋建築の技術が導入されたときに定着した語であろう。例、クヌキーヌ ピダリンカ タンメーマ ハツリ ミー [kunu ki:nu pidariŋkata ʔmme:ma h̥ʌtsuri mi:] (この木の左側の方を少し削ってごらん)。

ハナゴザ [hanagodza] (名) 花莫座。莫座の表に花柄のプリントのある筵。ビーグ [bi:gu] (備後藺) を細く裂いて、細い麻糸などで織りあげた筵。肌ざわりがよく、夏場は、この筵を敷いて、その上に横になると涼感があり、喜ばれたものである。畳が古くなると、花莫座を敷いて、畳の表がえの代りにした。例、タタミヌ フルミ ブンダハナゴザ シキバ [t̥ʌtaminu ɸurumi bunda hanagodza ʃ̥k̥iba] (畳が古くなっているので花莫座を敷きなさいよ)。

パラ [para:] (名) 「柱」の義。総称。一般称。ナカパラ [nakabara:] (「中柱」の義、大黒柱のこと)、ムヤーパラ [muja:bara:] (「母屋柱」の義。家の内部に立つ柱)、ハギパラ [hagibara:] (「脚柱」の義か。軒に立つ柱)。シティハギ [ʃ̥iti-hagi] (軒から更につき出した屋根の軒柱) などがある。例、パラヌ ミー ピッキ [para:nu mi: pikki] (柱の枿穴をあけなさい)。例、ヤーヌ パラ キジバ [ja:nu para: kidziba] (家の柱にする材木を削れよ)。

パラヌ・アナ [para:nu.ʔana] (名) 「柱の穴」の義。枿(ほぞ)のこと。ヌキヤー [nukija:] (貫き家) を作る際、柱に穴を掘って柱と梁、桁材に連結する。その枿穴のこと。枿のことを、マラ [mara] ともいう。例、パラヌ・アナ ピッキプス タランバ テーナイ シーフオーリ [para:nu-ana pikkip̥su tara:mba te:nai ʃi:ffori] (柱の枿穴をあける人手が足りないなので、手伝をして下さい)。

バラフタジナ [bara ɸ̥ʌtadzina] (名) 「藁綱」の義。稲藁で織う綱。綱の中で最も利用度が高い。ヤーフキジナ [ja:ɸ̥ukidzina] (家葺き綱) もバラフタジナであるし、日常生活のあらゆる面で、物を縛ったり、荷を運搬したりするのに用いる。昭和40年頃までは、稲作も行なわれていたので、稲藁は豊富にあった。例、バラフタジナ ナイティ カースン [bara ɸ̥ʌtadzina naiti ka:suŋ] (藁綱を縛って売る)。

バラフタポーキ [baraΦ̣ɽapo:ki] (名) 稲藁箒。座敷用に作った箒で、稲藁の芯を抜いて、それを直径1センチほどに束ね、その束を扇形に編みあげて作ったもの。編みあげる縄は、アダナフシ・ジナ [ʔadanaʃi-dʒina] を用いた。ユーフル [ju:ru] (「より糸」の義か。細い縄のこと) の一種である。例、バラフタ・ポーキシ イチバンフザー ポーキ [baraΦ̣ɽapo:kɽi ʔitʃibandza: po:ki] (藁箒で一番座を掃け)。

フパル [paru] (名) 「針」の義か。竹製の矛。竹の先端を鋭利に削り、穴をあけて綱を通すことができるようにしたもの。縫い針の形状を示すことから命名されたものであろう。茅葺き屋根を葺く際、内側に居るパルシキフス [paruʃiki-pʊsu] (針突き人) が竹製のパルを屋根の上へ突き出して、ヤーフキフ・フス [ja:Φ̣ɽki-pʊsu] (屋根葺き人) からシミナー [ʃimina:] (締め縄) をパルフヌ・ミー [parunu-mi:] (針の目≪穴≫) に貫いて貫き、それを引いてタルキ [taruki] (垂木) に掛け、再びパル [paru] を屋根の上へ突き出して、シミナーを屋根葺き人に届けるのに用いる道具。例、フパル スクフ ピンマー フユー アイフジ セーフティ シカンフカー ナランフダー [paru sʊku pimma: ju: ʔaidʒi se:ti ʃikaŋka: naranda:] (家葺きの竹針を突く際は、よく合図をしながら突きささないといけないう)。

パルシキフ・フス [paruʃiki-pʊsu] (名) 「針突き人」の義。茅葺き屋根を葺く際、内側にいて、フパル [paru] (竹製の矛) を屋根の上に突き刺し、パルフヌ・ミー [parunu-mi:] (矛の穴) に締め縄を貫いてもらい、引き出して縄をタルキ (垂木) に掛けて再び屋根の上の屋根葺き人へもどす役の人。勘の鈍い人がこの役を受けもつと、屋根葺きは非常に危険で、作業もはかどらないといわれている。

パルフヌ・ミー [parunu-mi:] (名) 「針の目」の義。屋根葺き矛の穴のこと。この穴に、シミナー [ʃimina:] (締め縄) を通して引き抜き、タルキに掛けて屋根葺き人の所へ突きかえすのに用いる。縫い針の穴にも同様にいう。例、パルフヌ・ミーナ シミナー ヌキティフ ピキシキフバ [parunu-mi:na ʃimina: nukiti pʃikɽikiba] (「針の穴」≪屋根葺き矛の穴≫に締め縄を貫き通して、引っぱりなさい)。

ハンフダイ [handai] (名) 飯台。新しく共通語より借用された語。普通は、幅約70センチ、長さ約1メートルほどの飯台に、約30センチほどの高さの脚が付いていた。飯台の中央には大皿に御数を盛り、イモの煮たものなども竹かごに盛って飯台の中央に置き、各自欲しいものを取って食べた。御飯と御汁だけは各自の前に配膳され、カティフムヌ [katimunu] (かて物、お数) は共通の皿から取って食べた。

フピー [pi:] (名) 火。「明り」の意はない。「明り」は、ガル [garu] という。フピー ケーシ [pi: ke:ʃi] (火を消しなさい) フピー タシキ [pi: taʃiki] (火を焚きつけなさい)。ピー ヌクミ [pi: nukumi] (火にあたって体を温めなさい)。ピーフヌ ムイルン [pi:nu muiruŋ] (火が燃える)。アガピー [ʔagapi:] (真赤な火)。

フピー [pi:] (名)「火事」のこと。原義は「火」である。昔は火事が出ると、ピードーピードー（火事だ!! 火事だ!!）といって大声をあげて村中にふれまわった。人々は手に手に桶を持って集まり、浜に下りて海水を汲み、それを手わたして運び、水をかけて消火した。戦後45年間で火事が起きたのは二度だけである。例、パトゥマナテー ナンゾーピーヤ ンジランセン [patumanate: nandzo: pi:ja ʔndʒiranseŋ] (鳩間では火事はあまり出なかった)。

フビー [bi:] (名) 樋。屋根に降る雨水を受けて水タンクに天水を通すためにかけた竹の半筒状のもの。直径約10センチの大竹の筒を半分に分けたものも利用した。それを支えるために軒から出した支柱を、フティー [ti:] (「手」の義か。) という。例、カジヌフクカー ナーラシヌ フビー パンツァシヨー [kadʒinu ɸukuka: na:rafinu bi: pantsaʃijo:] (台風が吹いたら軒先の樋をはずしなさいねえ)。

フビー [bi:] (名) 蘭草。畳の表を作るのに用いる。沖縄本島産の蘭草で作った畳の表や本土産のものを輸入していた。西表で栽培された蘭草は、サーラ [sa:ra] といって、それで作った筵、サーラムス [sa:ra-musu] は三番座や炊事場の縁側などに敷いた。ビーグムス [bi:gu-musu] (備後表で作った筵) は最高級の筵として重宝された。例、パイタナー ビーヤ イバンシェン [paitana: bi:ja ʔibanʃeŋ] (西表島では蘭草は植えなかった)。

ピーフパサン [pi:paʃaŋ] (名) 火箸。「火挟み」の義か。二本の鉄線を長さ約20センチほどに切って、頭部を円環で連結したもの。竈の中から、ウキル [ʔukuru] (燠火) を挟み出して火鉢に移すのに用いられた。例、ピーフパサンシ カマチフチヌ フキル パサミクラー [pi:paʃaŋʃi kamatʃi ɸutʃinu ʔukuru paʃamiku:] (「火挟み」火箸で竈の燠火を挟んでもってきなさい)。

ピサビ [pisabi] (名)「火錆」の義か。鍋底に付着する煤。「竈黒」と同じ。ナビヌ ピサビ [nabinu pisabi] (鍋の煤)。鍋底は、薪を燃やして炊飯するために、煤がたくさん付着する。それは熱効率を妨げるので、時々軽石などで擦って落したものである。例、ナビヌ スクヌ ピサビ カラフイシシ フッシ ウタフシ [nabinu sukuŋu piʃabi karaʃiʃi ʃʃi ʔutaʃi] (鍋の底の煤を軽石で擦って落しなさい)。

ビダーシキビリ [bida:ʃikibiri] (名) べたっと坐ること。特に女性が床の上に、または地面にべたっと尻をついて坐ること。このように坐ると、次の動作がとりにくいので、働き者の農家の女性の嫌う坐り方である。この坐り方は、怠け者のシンボルであったので、農家の娘たちは親からこの坐り方をきつく窘められた。例、ビダーシキビリ スー ッファー フ スブットウ [bida:ʃikibiri su: ɸfa: subuttu] (ビダーシキ坐りをする子は怠け者だ)。


ビダリフジナ [pidaridʒina] (名) 左縄、「左綱」の義。左綱いにする縄。左縄は悪霊を祓う力があると信じられている。神事を行なう所では、左縄を綱って注連縄にし、それを張り

めぐらして神聖な場所を確保した。例、パトゥマナター ヨーピダリジナー ヌキムヌティ アザリブー [pə̌tumanate: jo: pidaridzina: nukimunuti ʔadzaribu:] (鳩間ではねえ、左縄は、悪霊祓いになるといわれている)。

ビチル [bitʃiru] (名) 屋敷の東側の庭の一角に、約一坪ほどの面積を聖域として石垣で囲い、信仰している所。シトゥッチ [ʃituttʃi] (そてつ) や、イツァンパイキー [ʔitsampai-ki:] (榊)、パナギ [panagi] (「花木」の義か。クロトン)などを植えてあり、山石が据えつけてある。ウブシケー [ʔubufʃike:] (大城家)、ヨーカヤー [jo:kaja:] (西原家)、クシケー [kuʃʃike:] (小底家)のビチルは有名である。ヨーカヤーのビチルについては、「昔、ウイヌウガン [ʔuinu-ʔugag] (友利御嶽)でユーニンガイ [ju:nigai]をすませると、サカサ [səkasa] (ツカサ。坐女、神女)たち、カンプス [kampʃu] (神人、ティジリビ)たちがヨーカヤーのビチルに集って神遊びをしてアマイヨーッタ (飲えられた)、三日三晩、神遊びをされた」という口碑が残っている。そこからウイヌウガンへ通じる神の道が通じていて、セズ高い所であるといわれている。

ピバチ [pibatʃi] (名) 火鉢。灰を入れて、炭火をおこし暖をとるのに用いる陶製の器。広口の甕状の器。一般的には直径約25センチ、深さ約20センチ程度の広口の壺型をした器であった。青磁製のものも輸入されていた。旧暦の1～2月頃に用いる程度であった。木製のものは、縦約50センチ、横約70センチ程の箱に30センチ四方の灰を入れる部分を作って炭火をおこせるようにしたものである。

ピビザヌ・ヤー [pibidzanu-ja:] (名) 山羊小屋。家の裏、または北西部の隅に、2坪ほどの小屋を作って山羊を飼育した。山羊汁は蓬を入れて炊き、冷え症に効くと言って食した。各家庭では2～3頭の山羊を飼育していた。畑の芋かずらや桑の葉などを刈りこんで飼料として与えた。山羊小屋から出る下肥は畚で担いで畑に入れた。例、ピビザ・ヌッサカリク [pibidzanu ssa kariku:] (山羊の草を刈りてきなさい)。

ヒラクギ [çirakugi] (名) 「平釘」の義。ティンマ [timma] (伝馬船)を造る際に、板と板を接ぎ合わせるのに用いる釘。幅約1センチ、厚さ約3ミリ、長さ約12センチの型をした釘。この釘を打ちこむ際には、マキワラ [makiwara] (杉の皮の繊維を十分に乾燥させたもの)をまきつけて打った。例、ティンマナ シュカウ フンマーヒラクギティ アズ [timmana ʃʃkau ʔumma: çirakugiti ʔadzu] (天馬船に使う釘は平釘という)。

ヒラ・ヤー [çira-ja:] (名) 平家。一階建ての家のこと。鳩間島には二階建の家はない。瓦葺きや茅葺きの一階建ての家の総称。ヌキヤー (貫き家)は一般に寄せ棟造りであった。ユーピサ・ヤー [ju:pʃsa-ja:] (四つの「<sup>ひら</sup>平」(屋根)のある家、寄せ棟造り)やフタピサヤー [ʔutapʃsa-ja:] (二つの「<sup>ひら</sup>平」のある家、切り妻屋根造りの家)ともいう。パトゥマナー ヒラヤー タンガール アル [pə̌tumana: çiraja: taggaru ʔaru] (鳩間には平

家だけがある<平家しかない>。

ビリダイ [biridai] (名)「座り台」の義。椅子のこと。学校教育の普及によって、背もたれのあるものに「椅子」といい、それ以外の、物を載せたり飾ったりするに用いる器具を、<sup>ㇿ</sup>ダイ [dai] という傾向がある。老年層は「椅子」をビリダイという。例、ビリダイ サンギ<sup>ㇿ</sup>・キー ビリバ<sup>ㇿ</sup> ミサムヌ [biridai sangi-ki: biriba misamunu] (椅子<座り台>を引っぱってきて座ればよいのに)。

ビン<sup>ㇿ</sup>ダライ [bindarai] (名)「びんた(髪)洗い」の義か。洗面器のこと。直径約25センチ、深さ約10センチほどの板製の桶。戦後、金属製の洗面器や、プラスチック製の洗面器が出まわるようになった。例、ビンダライ<sup>ㇿ</sup>ヌ ミジ<sup>ㇿ</sup>シ ウム<sup>ㇿ</sup>ティ <sup>ㇿ</sup>シミティ ウヌ<sup>ㇿ</sup>ヌカルシ ティー<sup>ㇿ</sup>・パン アライ [bindarai-nu midzifi ʔumuti jimiti ʔunu nukaruʃi ti:pan ʔarai] (洗面器の水で面<sup>オモテ</sup><顔>を洗って、その残りで手足を洗いなさい)。

フー<sup>ㇿ</sup>カラジナ [Φu:karadzina] (名) 棕櫚縄。棕櫚の幹頂部の枝の分出した所に、黒色の強い繊維がからみついている。その繊維をとって編った綱がフー<sup>ㇿ</sup>カラジナである。雨や風に強く、茅葺き屋根の葺を締める際にこの綱を用いる。また、この綱を3本かけ合わせて、イダフニ(板舟)のアンカーロープに利用したりした。牛の鼻綱にもこれを用いた。例、フー<sup>ㇿ</sup>カラジナ <sup>ㇿ</sup>ヌイバ [Φu:karadzina nuiba] (フーカラ綱を編いなさいよ)。

フー<sup>ㇿ</sup>タイ [Φu:tai] (名) 桁材の一種。屋根の勾配を考えて、湾曲した大木を桁材に利用したもの。フクン [Φy:kun] (福木) やドゥス<sup>ㇿ</sup>ヌ [dusunu] (モクレン科、タイワンオガタマノキ) などがよく利用されていた。例、クヌ<sup>ㇿ</sup> マガ<sup>ㇿ</sup>レー シウカ<sup>ㇿ</sup>バラーナ アティティ フー<sup>ㇿ</sup>タイ シー<sup>ㇿ</sup>ヨー [kunu magare: sikabara:na ʔatiti Φu:tai ʃi:jo:] (この曲った木は、つか柱に合わせてフータイにしなさいね)。

フーン [Φu:ŋ] (他動) ①閉じる。しめる。戸をしめる。②「目を閉じる」には用いない。<sup>ㇿ</sup>ミー ッサウン [mi: ssaun] (目を閉じる) のようにいう。ホーヌ [ho:nu] (しめない。戸をしめない)。フィティ [Φu:iti] (戸をしめて)、フィ<sup>ㇿ</sup>プサン [Φui-pysaŋ] (戸をしめたい)、フータン [Φu:taŋ] (戸をしめた)。例、アミ<sup>ㇿ</sup>ヌ フィ ウチ<sup>ㇿ</sup>アミ スーバ <sup>ㇿ</sup>ヤドゥ フィ [ʔaminu Φui ʔutʃiami su:ba jadu Φui] (雨が降って、うちこむので、戸をしめなさい)。

フクイ [Φy:kui] (名) ほこり(埃)。細かな塵。砂塵。肉眼で見えないような塵埃。フクイ<sup>ㇿ</sup> カブン [Φy:kui kabuŋ] (ほこりをかぶる) 例、<sup>ㇿ</sup>アミーン ホー<sup>ㇿ</sup>ムティ カラフキ スンダ<sup>ㇿ</sup> フクイヌ<sup>ㇿ</sup> トゥビ<sup>ㇿ</sup>キー <sup>ㇿ</sup>ミー アキララヌ<sup>ㇿ</sup> [ʔami:n ho:muti kara Φukisunda Φy:kuinu tubiki: mi: ʔakiraranu] (雨も降らないで、から吹きするので、ほこりが飛んできて、目を開けることができない)。

フクジ [Φ̣̄kud̄zi] (名) 塵、ごみ。主として木の葉などの塵をいう。島では枯れ葉などのフクジを集めて堆肥にし、畑に入れた。例、タイフーヌ フクター ミナカヌ キーヌパー ムール アイコ ウティティ フクジ ナリ ベー [tai Φ̣̄u:nu Φ̣̄kuta: minakanu ki:nupa: mu:ru ʔaiutiti Φ̣̄kud̄zi nari be:] (台風が吹いたので、庭の木の葉がみんな落ちて塵になっている)

フスマ [Φ̣̄s̄uma] (名) 襖。フスマヌ・サン [Φ̣̄s̄umanu-saŋ] (襖の棧。木の骨組み) に新聞紙を張り、その上に障子紙を張って仕上げていた。フスマヌ・サン (襖の棧) に対して、障子の場合は、ソージン・プニ [so:d̄zinu-puni] (障子の骨) とともにソージンサン [so:d̄zinu-saŋ] ともいていた。例、フスマヌ ヤレーントン カビシ クーシ [Φ̣̄s̄umanu jare:ntoŋ kabifi ku:ʃi] (襖の破れたところを紙で補修しなさい)。

ブスマニビ [p̄s̄umanibi] (名) 昼寝。「昼間寝」の義。夏の盛りの、マープスマ [ma:p̄s̄uma] (真昼間) には、暑くて畑仕事が可能であるから、老人たちの中には、ヨーコイ [jo:koi] (「夕陰」の義か。午後3時頃) になるまで、風通しのよい木の下や家の縁側などで、よく昼寝をする人がいた。例、ドゥク ブスマニビ スー カー クン キブラーリ シース [duku p̄s̄umanibi su:ka: kuŋkibura:ri ʃi:su] (あんまり昼寝をするとふらふらするよ)

フタ [Φ̣̄ʔ̄ta] (名) 蓋。ナビヌフタ [nabinu-Φ̣̄ʔ̄ta] (鍋の蓋)、カミヌフタ [kaminu-Φ̣̄ʔ̄ta] (甕の蓋)、パクヌフタ [p̄akunu-Φ̣̄ʔ̄ta] (箱の蓋) 等がある。ウン [ʔ̄uŋ] (いも) をふかす際に、いもの上に芭蕉の葉などを覆いかぶせて、その上から本蓋を被せるが、その本蓋の下に置くものを、ナカフタ [naka-Φ̣̄ʔ̄ta] (中蓋) という。例、ウンマー ナカフタ イルバル ネーシャツサ [ʔ̄umma: naka-Φ̣̄ʔ̄ta ʔ̄irubaru ne:ʃijassa] (いもは中蓋を入れた方が煮やすい)

フチマルン [Φ̣̄ʔ̄f̄imarun] (動、自) 燻る。燃料が湿って、燃えないで煙がふき出る。煙だけがもうと出る。フチマラヌ [Φ̣̄ʔ̄f̄imaranu] (燻らない)、フチマリティ [Φ̣̄ʔ̄f̄imariti] (燻って)、フチマルカー [Φ̣̄ʔ̄f̄imaraka:] (燻ると)。例、クヌ タムノイコーラ モーサバン フチマリティ ムイラヌ [kunu tamuno: ʔ̄iko:ra mo:saban Φ̣̄ʔ̄f̄imariti muiranu] (この薪はいくら燃しても燻って燃えない)

フトゥミカザ [Φ̣̄ʔ̄tumikadza] (名) 部屋の中が湿気と高温のために放つ臭気。畳などが古くなり、湿気を含むようになって、夏場になるとフトゥミカザを放つようになる。「火とめき香」の音韻変化した形か。例、ッフヤー ナリティ ヤドゥフジ シー シケーティ アミヌ フーター フトゥミカザ シース [ffuja: nariti jadu Φ̣̄ud̄zi ʃi:ʃ̄ke:ti ʔ̄aminu Φ̣̄ʔ̄ta Φ̣̄ʔ̄tumikadza ʃi:su] (古い家になって、戸をしめきってあるので、雨が降るとフトゥミカザがする)

フミダイ [Φ̣̄umidai] (名) 「踏み台」の義。高い所にあるものを取る際に、台の上に立って

取ったり、作業をしたりするが、その場合の足場となる台をいう。足継ぎ。共通語からの借用語。例、タキ<sup>u</sup>ヌ ピコー<sup>u</sup>ンダー フミダイ<sup>u</sup>ナー ヌーリ<sup>u</sup> タティバ [t̤akinu p̤iko:nda ɸumidaina: nu:ri t̤atiba] (身長が低いので、踏み台に登って立ちなさいよ) フヤ [ɸuja] (名)「火屋」の義。ランプの火をおおうガラス製の円筒。火を覆う部分が最も大きく、煤のつく部分は最も細くなっている。瓢箪型をしたガラス製の円筒。子供たちは、小さな手を入れて塵紙などで煤を拭いた。例、ランプ<sup>u</sup>ヌ フヤ<sup>u</sup>ヌ<sup>u</sup> ピサ<sup>u</sup>ビ ッスリ<sup>u</sup> ウタ<sup>u</sup>シ [rampunu ɸujanu p̤sabi ssuri ʔutaʃi] (ランプの火屋の煤を拭いて落とさない)

フルマイ<sup>u</sup>ール [ɸurumai:ru] (名)「車錐」の義か。錐の柄の下に重り(錘)をつけ、錐の柄の中に横棒を貫き通し、その両端から縄を錐の柄の先端部に通して結え、縄を巻いて下へ押すと錐が回転する仕掛けとなっているもの。錘が惰力をつける役割を果たす。例、フルマイ<sup>u</sup>ールシ ピッ<sup>u</sup>クカー ティー<sup>u</sup>ユン ブガラ<sup>u</sup>ヌ [ɸurumai:ruʃi pik̤kuka: ti:ʃum bugaranu] (車錐で穴をあけると、手を疲れない)

ブン [buŋ] (動)居る。～ている。ブラ<sup>u</sup>ヌ [bura:nu] (居ない)、ブリティ [buriti] (居て)、ブー<sup>u</sup>カー [bu:ka:] (いたら) ベー<sup>u</sup>カー [be:ka:] (いたら)、例、クヌ<sup>u</sup> ヤーナ<sup>u</sup> タール ブー<sup>u</sup>カヤー、アーイ<sup>u</sup> ターン<sup>u</sup> ブラ<sup>u</sup>ヌ<sup>u</sup> [kunu ja:na ta:ru bu:kaja:, ʔai ta:m bura:nu] (この家に誰がいるのかねえ。いや、誰もいないよ)。トーキョー<sup>u</sup> ナ ドウシ<sup>u</sup>ヌ ブン [to:kjo:na duʃinu buŋ] (東京に友人がいる)

フン [ɸuŋ] (名)釘。「釘」の総称。カニフン [kaniɸuŋ] (金釘、鉄釘)、タキフン [t̤akiɸuŋ] (竹釘)、キー<sup>u</sup>フン [ki:ɸuŋ] (木釘)などがある。「釘 久岐、鉄杖也」(『和名抄』)。「鐙 岐<sup>キリ</sup>久岐、無<sup>ギ</sup>蓋釘也。栓 岐<sup>キ</sup>久岐、木釘也」(『和名抄』)とある。例、ヤドゥ<sup>u</sup>ヌ パガ<sup>u</sup>リ ナーン<sup>u</sup>バ フン カイ<sup>u</sup>キ ウタン<sup>u</sup>ノレー [jadunu pagari na:mba ɸuŋ kaiki: ʔutanno:re:] (戸が剥がれてしまったので釘を買ってきて打たないか。《打ってくれ》)

フン<sup>u</sup>ドゥー [ɸundu:] (名)木釘の一種。杉板でサバニを作る際、板と板の接合部分をタキフン(竹釘)を打ちこんで接ぎ合わせ、竹釘を補強するために嵌めこむ<sup>カスガイ</sup>型<sup>カスガイ</sup>の釘。幅約3.5センチ、長さ約6センチ、厚さ約1.5センチのイヌ楨で作った釘。一種の<sup>カスガイ</sup>の機能を果たす釘。例、タキフン<sup>u</sup>マー ヨー<sup>u</sup>タンティン フン<sup>u</sup>ドゥー イル<sup>u</sup>カー コイダ<sup>u</sup>フネー ウーカ<sup>u</sup>ヌ [t̤akiɸumma: jo:tantin ɸundu: ʔiruka: ʔidaɸune: ʔu:kānu] (竹釘は弱くても、フン<sup>u</sup>ドゥーを入れると、イダフニ《板舟》は動かない。《びくともしない》)

フンナー<sup>u</sup>マ [ɸunna:ma] (名)「小釘」の義。[-na:ma]の美称の指小辞(diminutive)。語尾が撥音[n]で終る場合は、[n]を重ねて[pan] (足) → [panna:ma] (小さな足)、語尾が母音[i]で終る場合は、[ɸuni] (舟) → [ɸune:ma] (小舟)、語尾が母音[u]で

終る語は、[p̄aku] (箱) → [p̄ako:ma] (小箱)、語尾が母音 [a] で終る語は、[j̄ima] (島) → [j̄ima:ma] (小島) のように形態変化を示す。

ペーラフ・フチ [p̄era-Φ̄ɯt̄ʃi] (名)「入り口」の義。門のこと。門は、門前の路面より2～3段上げて作られていた。最低一段は上げて作るようになっていた。門の両側の石積は、大きな石を削って形を整えたものを使っていた。葬列が門前を通過する場合は、竹竿をX型に交叉させて立て、悪霊の侵入を防ぐ習慣が終戦後まであった。また旧盆(ソーラン [so:raŋ]) には、13日の夕方になると、祖霊を迎えるために、門の内側に藁束に燵を入れて煙をたてる習俗があり、島では今も行なわれている。最近では線香を立てる家もあるようである。祖霊は、この煙に乗って下りて来られると信じられている。例、ウキナーフ・ブソー ペーラフチヲバ ヲゾーティ アゾールヲヌ ペーヲシマ・ブソー ペーラフチヲヌ ヲフ カン タ バ ヲゾー ティ アゾー ル [ʔukina:pu:so: p̄era-Φ̄ɯt̄ʃiba dzo:ti ʔadzo:runu be:jima-pu:so: p̄eraΦ̄ɯt̄ʃinu Φ̄ɯkantaba dzo:ti ʔadzo:ru] (沖縄の人は門をゾーといわれるが、我が島人は、門の外側(道路)を、ゾーというのだ)。

ペーリフ・フチ [p̄eri-Φ̄ɯt̄ʃi] (名)「入り方、入った時」の義。熟睡して、他人が家の中に入ったことを知らない場合にいう。「フチ」[Φ̄ɯt̄ʃi] は、「口、やり方、方法」などを表す。例、ニビシキティヲ イチヌマドウヲル ムドウヲリ クーヲタユー ウリヲ ペーリフ・フチ ヲサンヲ ツォー [nibif̄ʃiki ʔit̄ʃinu maduru muduri ku:taju: ʔurinu p̄eriΦ̄ɯt̄ʃi ssan tso:] (眠りこけて、いつの間に戻って来たのか あれ(彼)の入り方を知らないそうだ)

ポーキ [po:ki] (名) 箒。タキポーキ [t̄aki-po:ki] (竹箒)、バラフヲタポーキ [baraΦ̄ɯta-po:ki] (藁箒)、フーカラポーキ [Φ̄u:kara-po:ki] (シュロ箒) などがある。竹箒は庭を掃くもの、バラフヲタポーキは藁の芯で作った室内用の箒である。直径1センチほどに束ねた藁の芯を扇形に編みあげてつくり、片手に持って、屈みながら掃く。上座の箒と下座の箒を別々に作って利用した。タキポーキは西表島の北岸の田地の近くの山からポーキダキ [po:kidaki] (箒竹) を伐ってきて、六七本束ねて作ったものが最も簡単なもの。筆状の形をしており、子供にも手軽に作れた。後に石垣から輸入された新式の箒は、30センチほどの竹の枝を平たく結えて、それに約1メートルほどの柄をつけたものであった。ナカヲザポーキ [nakadza-po:ki] は、台所の土間を掃くために作った、ソテツの葉を四五枚合わせて結えた箒。

ポークン [po:kun] (動) 掃く。ポーカナ [po:kanu] (掃かない)、ポーキティ [po:k̄iti] (掃いて)、ポーキヲプサン [po:kip̄usaŋ] (掃きたい)、ポークカー [po:k̄ȳka:] (掃いたら)。例、シトゥムヲテー ミナヲカ ポーキティ ガツヲコー ヲパリ [ʃit̄umute: minaka po:k̄iti gakko: pari] (朝は庭を掃いてから、学校へ行きなさい)。朝、昼は外側へ向けて掃くが、夜は先ず3回内側に掃いてから室外へ掃き出す習慣がある。



シーナヤシキ [ʔn:na-jaʃiki] (名) 空き屋敷。人の住むんでいない屋敷。人家のない屋敷。

シーナ・カク [ʔn:na-kaku] (空き屋敷) ともいう。例、マルケーティーナ シマナー  
ギー ミッタヌ シーナ ヤシキヌ ゴーラー ナリティ サボーリブタ  
[maruketina simana: gi:mittanu ʔn:najafkinu go:ra:nariti sabo:ri buta] (久々に、  
島に行ってみたが、空き屋敷が増えて、さびれていたよ)

ロースク [ro:syuku] (名) 蠟燭。綿のより糸を芯にして、蠟を直径約2センチの円柱状に  
固めたもの。普通はほとんど用いなかった。お盆のときには仏壇に提灯をさげ、それに蠟  
燭をともして祖霊を迎え、もてなした。例、ロースコー チョーチンナ イリティ  
トクニナ サイリ [ro:syuko: tʃo:tʃinna:ʔiriti tykunina sairi] (蠟燭は提灯に入れて、  
仏壇につるしなさい)

ルクサク・ボー [rukusaku-bo:] 「六尺棒」の義。西村の棒踊名称。西村の棒踊りの代表的  
なもので、六尺の棒を持った一組の勇壮な男たちによって演ぜられる。例、インヌムラヌ  
ルクサクボーヤ ガマク イリティ ウトゥンダー イッケン ウムッサン  
[ʔinnumuranu rukusaku-bo:ja gamaku ʔiriti ʔutunda: ʔikken ʔumussag] (西村の  
六尺棒は、ガマクを入れて打つので、非常におもしろい)

リョーバーヌキル [rjo:ba:nukiru] (名) 「両歯鋸」の義か。サイクヌキル (細工用の鋸)  
の一種。鋸の両方に歯のついたもので、一方がヨコビキ [jokobiki]、他方がタテビキ  
[tatebiki] (縦びき) となっている。タテビキは木材の木目にそって鋸をひくもの。ヨコ  
ギキは輪切にするように鋸を使うこと。例、リョーバー・ヌキルシ ツァー キシ  
ティ シウカウタ [rjo:ba:nukirufi ʔitsa: kʃiti sʃkauta] (両歯鋸で板を切って使っ  
た)。

ランプ [rampu] (名) 「ランプ」のこと。「lamp (洋灯)」の転。人によっては、ダンプ  
[dampu] ということもある。ゴブランプ [goburampu] (五分ランプ)、ハチブランプ  
[hʃtʃiburampu] (八分ランプ) 等がある。灯心の大きさを示すもので、それが明度を示  
すこともある。例、ゴブランポー ッファーヌ ハチブランプ シキリ [gobu-  
rampo: ffa:nu hʃtʃiburampu ʃʃkiri] (五分ランプは暗いから、八分ランプをつけな  
さい)

ユチル [jutfiru] (名) えつり (棧)。屋敷の垂木の上に、ユチルダキ [jutfirudaki] (えつ  
り竹) を並べて、クージ [kurdzi] (とう蔓もどき) の皮で編みあげたもの。竹を根と末  
の部分交互にヤラザイ [jaradzai] (交差させ) つつ編みあげる。瓦葺きの場合は、竹と  
竹の間隔が1ミリ程度になるよう、密に編み、茅葺きの場合は、1センチ程度の間隔をあ  
けてユチルを編む。屋根葺きの下地としたもの。瓦葺きの場合は、その上に土を水で捏ね  
て乗せ、その上に瓦を並べて固定して葺いていく。「取置蘆葦<哀都利>者、此家長御心  
之平地」(顕宗前紀)。「柵 屋乃衣豆利」(『新撰字鏡享和本』)、「棧 瓦乃衣都利」(『和名

抄』)とある。例、ユチルフミシンカヲヌ タラーンバ テーヲナイ シーッフィーリ  
[jutʃiruΦumi-ʃigkanu taramba tenai ʃiʃfi:ri] (えつりを編む人手が足りないので、  
手伝ってくれ)。「アーパーレー」には、「ヤー たましだり ゆちるばしーヤーば すく  
り あんでいすー」(ああ、玉簾をえつりにして、家を造ってあるという)と歌われている。  
「玉簾」は、「玉のような立派な簾」の意。この場合、茅葺きの家を造ることを前提と  
しているので、ユチルを粗く編んだものをさすと考えられる。

ユコー [juko:] (名) 裏座の総称。イチバン・ウラヲザ [ʔitʃiban-uradza] (一番裏座)、ニー  
バン・ウラヲザ [ni:ban-uradza] (二番裏座)を総称していることば。一番裏座は、青年期  
に達した息子たちが利用したり、年頃の娘たちが利用した。二番裏座は物置きに利用され  
たり、ヲシラ [ʃira] (産室)に利用されたりした。例、ユコーヲナー ノーンコーレ カ  
ザミ シケー [juko:na: no:ŋko:re: kadzami ʃi:ke:] (裏座にいろんなものを隠してあ  
る)。

ユクンツァメー [jukuntsame:] (名) 床下。「床下・目」の義か。「-メー」は「~の中、間、  
奥まった空間」の意。普通は「-ミー」[-mi:] (~の中)という。床下には竿や櫓、銚な  
どを収納しておくことが多い。例、ユクンツァメーナ ヲサウラ ヲヤク ヲユクン カナ  
パインヲドーレ フジナキヲ シケー [jukuntsame:na saura jaku jukuŋ kanapaindo:re  
Φudʒinaki ʃi:ke:] (床下に竿から櫓、銚、鍬などをおしこんでおいてある)

ユカムヲチ [jukamutʃi] (名) 「床持ち」の義か。床板を張る際に、それを支える梁の一種。  
イツァフンヲツァ [ʔitsaΦuntsa] (板床)は、このユカムヲチに ヲサン [sag] (棧)をわ  
たして釘を打つ。タキフンツァ [tʰakiΦuntsa] (竹床)の場合は、ユカムチにわたした ヲ  
サン [sag] (棧)に竹をかけて編み、床竹がユカムチからあくれぬよう、ヌシヲトゥル  
[nuʃituru] (ユカムチの下から掛けた竹)を入れて、締めつけながら編みあげていく。

ユーヲフル [ju:Φuru] (名) 風呂。鳩間島では風呂のある家は二、三軒しかなかった。普通  
は海に入って、ヲオンダー [ʔonda:] (海水浴)をして体の汚れを落とし、井戸水をかぶって  
海水を洗い流すことで入浴にかえていた。例、パトゥヲマナテー ユーヲフルティ スモー  
ペーヲリ ミランヲセン [pʰatumanate: ju:Φuruti sumo: peri miranseŋ] (鳩間では、  
風呂というのは入ってみなかった)

ヲヤルン [jaruŋ] (動) 破る。衣類や紙類のように、うすいものを破る意。ヤラヲヌ  
[jaranu] (破らない)、ヲヤリティ [jariti] (破って)、ヲヤルカー [jaruka:] (破ると)。例、  
ヲアイニ ピキスクヲカー ヤリヲスンダ ピキスクナ [ʔaini pʰikisʉkuka: jarisunda  
pʰikisukuna] (あんなに引っぱると破れるから、引っぱるな)

ヤマヌキヲル [jamanukiru] (名) 山鋸。伐採用鋸。幅約10センチ、長さ約60センチの鋸。山  
中での伐採作業に便利な、小型の鋸で、よく切れるものを持参した。山に入る前にヤシヲ  
ル [jaʃiru] (鋸)で鋸の歯をたて、板で作ったケースに入れて持参した。例、ヤマヌキヲ

ロー ヤマ<sup>1</sup>ー パー<sup>2</sup>ル <sup>3</sup>マイナー ヤシ<sup>4</sup>ルシ パー タティ<sup>5</sup>シタ [jamanukiro: jama: pe:ru maina: jaʃiruʃi pa: tɔtʃita] (山鋸は山へ入る前に鋸で歯をたてた)

ヤブ<sup>6</sup>ルン [jaburug] (動) ①破る。紙や布を裂く。②機械をこわす。器機類の機能をこわす。③人間の気持、性質等を異常にする。ヤブラヌ [jaburanu] (破らない)、ヤブリティ [jaburiti] (破って)、ヤブリ<sup>7</sup>ンギサン [jaburiggisag] (破りそう)、ヤブ<sup>8</sup>ルカー [jaburuka:] (破ったら)。例、キカイ<sup>9</sup>ヲ ヤブ<sup>10</sup>リティ ウーカ<sup>11</sup>ヲヌ [kɪkaija jaburiti ʔu:kanu] (機械はこわれて動かない)

ヤシ<sup>12</sup>キ [jaʃiki] (名) 屋敷。ウブ・ヤシ<sup>13</sup>キ [ʔubu-jaʃiki] (大きな屋敷)、ヤシケー<sup>14</sup>マ [jaʃikema] (小さな屋敷)、<sup>15</sup>サンカク・ヤシキ [sagkaku-jaʃiki] (三角屋敷、このヤシキはフン<sup>16</sup>シ (風水) がよくないといわれている)、ヤーヤシ<sup>17</sup>キ [ja:jaʃiki] (家屋敷、財産) などの語がある。例、ヤーヤシ<sup>18</sup>キーン アラ<sup>19</sup>ヲシ マイフナー<sup>20</sup>ヲ ドー [ja:jaʃiki:n ʔaraʃi maiɸuna: do:] (家屋敷も持つことができ、立派な男だ)

ヤキ<sup>21</sup>バイ [jakibai] (名) ススキの原野を焼きはらって枯らしたススキ。これを刈りとして燃料とした。ススキの原野は焼きはらっても、後から新芽が出てくる。焼畑開墾をする際は、先ずススキの原野を焼きはらい、ユシ<sup>22</sup>キムトゥ [jaʃikimutu] (すすきの根っこ) をコーシ<sup>23</sup>ティ [ko:ʃiti] (掘りおこして)、畑を耕した。例、ヤキ<sup>24</sup>バイ<sup>25</sup>ヲ スリ<sup>26</sup>キー モーシ<sup>27</sup> [jakibai suriki: mo:ʃi] (ヤキバイを刈りてきて燃しなさい)。

ヤー<sup>28</sup>マ [ja:ma] (名) 小屋。-マ [-ma] は美称辞。ウシヌ ヤー<sup>29</sup>マ [ʔuʃinu ja:ma] (牛小屋)、ピビザン ヤー<sup>30</sup>マ [pibidzap ja:ma] (山羊小屋)、トゥルン ヤー<sup>31</sup>マ [turup ja:ma] (鶏舎) などがある。

例、ヤー<sup>32</sup>ヲヌ <sup>33</sup>シンタナー ピビザン ヤー<sup>34</sup>マ スク<sup>35</sup>リティ ピビザ<sup>36</sup> シッカナウ<sup>37</sup>ヲタ [ja:nu ʃintana: pibidzap ja:ma sɯkuriti pibidza ʃikanauta] (母屋の後に山羊小屋を作って山羊を飼った)

ヤー<sup>38</sup>フキ<sup>39</sup>・プス [ja:ɸuki-pusu] (名)「家葺き人」の義。屋根葺き職人。屋根葺き担当の人の意。島の大人 (男) は誰でも屋根を葺くことはできるが、新築の際は部落民総出で当たった。いわゆる<sup>40</sup>ヲバコー [bako:] (共同作業) であったから、若い力のある青壮年の人たちが進んでその任に当たった。長老たちは地上から作業を眺めては細かな助言を与えつつ進行させた。茅を屋根まで投げ上げるのも若い人の仕事であった。

ヤー<sup>41</sup>バカ<sup>42</sup>リ [ja:bakari] (名)「家分かれ」の義。本家から二男・三男などが分家すること。例、ジナン<sup>43</sup>マー<sup>44</sup>ヲ ニー<sup>45</sup>ビキ スー<sup>46</sup>ヲカー イチン<sup>47</sup>バー<sup>48</sup>キン ヤー<sup>49</sup>ヲナ シキラ<sup>50</sup>ラ<sup>51</sup>ンダー ヤー<sup>52</sup>バカ<sup>53</sup>リ シミ<sup>54</sup>ス<sup>55</sup>ヲヨー [dʒinamma: ni:biki su:ka: ʔitʃimba:kɪp ja:na ʃikiraranda: ja:bakari ʃimisujo:] (二男は結婚したら、いつまでも家におけないから、分家させるよ)

ヤー<sup>56</sup>ヲヌ・ピサ [ja:nu-pisa] (名)「家の平」の義。屋根のこと。ユー<sup>57</sup>ピサ・ヤー [ju:pisa-

ja:] (「四平家」の義、寄せ棟の家)、フタピサヤー [Φ̣ʉtapisa-ja:] (「二平家」の義。切妻屋根) などがある。マンタヌ・ピサ [mantanu-pisa] (前の平)、シントヌ・ピサ [ʃintanu-pisa] (後の平)、アントヌピサ [ʔantanu-pisa] (東の平)、インタヌ・ピサ [ʔintanu-pisa] (西の平) などがある。

例、ㄱ이노ーカジヌㄱフキティ ヤーㄱヌ マンタピサヌ カーㄱラ ウコーㄱシ トゥバシ  
ㄱ・パリ ナーㄱヌ [ʔino:kadzinu Φ̣ʉkiti ja:nu manta-pisanu ka:ra ʔuko:ʃi tubaʃi-  
pari na:nu] (竜巻が吹いて、家の前平の瓦をおこして飛ばしていった)。

ヤーㄱヌ・カク [ja:nu-kaku] (名)「家の囲い」の義。屋敷のこと。シーナ・カク [ʔn:na-kaku] (名)は「空家敷」の義。人の住まない家敷のこと。ンナヤシキ [ʔn:na-jaʃiki] (空家敷) ともいう。シント・カク [ʃinta-kaku] (後の家敷)、マンタ・カク [manta-kaku] (前の家敷) のようにいう。例、ヤーㄱヌ・カクㄱナー ヤラブㄱ イビルモー ㄱアラヌ [ja:nu-kakuna: jarabu ʔibirumo: ʔaranu] (家敷内にヤラブの木を植えるものではない)。

ヤーㄱヌ・カキ [ja:nu-kaki] (連語) 家の垣根。分家筋で、新しく家を構えた人などが屋敷の囲いとして竹垣や木の柵を作ったもの。板垣で囲う人もいたが、古い家はすべて石垣で囲ってあった。例、ヤーㄱヌ・カキㄱ イツァシ スクㄱリ シケーメ [ja:nu-kaki ʔitsaʃi sykuri-ʃike:me] (屋敷の垣根を板で作ってあるよ。もう)。

ヤーザイㄱ [ja:dzaiku] (名)「家大工」の義。「細工」の転訛したもの。家を造る大工のこと。例、ㄱ아부ヂュー ヤーザイㄱ シー オーㄱㄱ타 ㄱ켄ヌ サイクダングㄱヌ マナーㄱキ アン [ʔabudʒe: ja:dzaiku ʃi:otta kennu saiku-daggunu mana:ki ʔaŋ] (おじいさんが家大工をしておられた時の大工道具が今まである)

ヤーウツㄱ [ja:utsuri] (名) 家移り。引越。

例、ミーヤーン スクㄱローレーンティ シティテーㄱ イチル ヤーウツㄱ ソールㄱ  
[mi:ja:n sykuro:renti ʃitite: ʔitʃiru ja:utsuri so:ruwa] (新しい家も造られたというのに、して、いつ引越しなさいですか)。

ㄱ야ー [ja:] (名) 家。カーㄱラ・ヤー [ka:ra-ja:] (「瓦家」の義、瓦葺きの家)、ㄱ가야・ヤー [ga:ja-ja:] (「茅家」の義、茅葺きの家)、ヌキ・ヤー [nuki-ja:] (「貫き家」の義、柱や桁材、梁などに枘や枘穴を作って連結し、楔を打ち込んで固める工法で作った家)。アナㄱプリヤー [ʔanapuri-ja:] (「穴掘り家」の義。掘建て小屋)、ヤーㄱ마 [ja:ma] (小屋)、キー・ㄱ야ー [ki:ja:] (木材乾燥用の小屋)、アラ・ヤー [ʔara-ja:] (新築した家。「新家」の義)、ㄱㅍㄱ야ー [ffu-ja:] (「古家」の義、建築して長い年月のたった家)。ヒラヤー [çira-ja:] (「平家」の義。二階建てに対する一階建ての家のこと)。ヤーㄱ・キンナイ [ja:kinai] は「家庭」の意。

例、ワーㄱ 메ー ヤーㄱユン スクㄱリ イッケナㄱ 마이フナーㄱ 도어 [wa: me: ja:-

jun sykuri ʔikkena maiΦuna: do:] (貴方は、もう家も新築して、大変立派な男だ、働き者だよ)

モミパク [momipaku] (名) 糶箱。もみを入れる大きな箱。幅約3尺に長さ約6尺、高さ約5尺ほどの木製の箱で、普通は裏座に置いていた。いったん脱穀した糶を一日ほど夏の太陽に干して、糶箱に移して保管した。これから必要に応じて糶攪りをし、搗き臼で精米した。例、ㇿキュー ㇿプセー モメーㇿ モミパクㇿナー イリㇿバ [kju: puse: mome: momipakuna ʔiriba] (今日干した糶は、糶箱に入れなさいよ)

モースン [mo:suŋ] (動・他) 燃やす。モーサヌ [mo:sanu] (燃やさない)、モーシティ [mo:fʃiti] (燃やして)、モーシㇿプサン [mo:fʃipʃaŋ] (燃やしたい)、モーシンㇿギサン [mo:fʃigisaŋ] (燃やしそうだ)。

例、ㇿウナー ポツㇿアーリベㇿー カビンㇿキシ アツァㇿミティ モーシㇿバ [ʔuna: pottsari-be: kabigkifi ʔatsamiti mo:fʃiba] (そこに散らかっている紙きれを集めて燃やなさいよ)

メーㇿヌ・ウチ [me:nu-utʃi] (名) 「メー」は、一定の区域。一定の広さのある地区。転じて、「屋敷」の意となる。敷地。空き地の意。古謡語。「しるうちぬ めーうち やーば すくり あんていす、以下略」のように用いられる「アーパーレ」(新室寿歌) 参照。「メーヌ・ウチ」で「屋敷の内」、「敷地の内」、「一定の空き地の内」の意となる。

ㇿムヤーバラー [muja:bara:] (名) 「母屋柱」の義。ハギバラー [hagibara:] (脛柱) の内側に立つ柱。この柱は、ヌキヤー [nuki-ja:] (貫き家) の柱に対して言う。アナㇿプリヤー [ʔanapuri-ja:] (穴掘り家。掘建て小屋) の柱には言わない。普通は、フクンキー [Φ ũkukki:] (福木) を四寸角、五寸角の角材にして用いた。例、ヤマㇿー ペーㇿル アーシㇿ ムヤーバラー プスムトㇿㇿナーンザㇿシ クーㇿタ [jama: peru ʔa:ʃi muja:bara: pʃusmutuna: ʔndzaʃi kuta] (山に入るたびに母屋柱を一本ずつ出してきた)

ムニアギ [muniaŋi] (名) 「棟上げ」の義。吉日を選んで棟上げをする。ㇿムヤーバラー (母屋柱) を立て、ナカㇿバラー (大黒柱) を立てて、ㇿキタ [kita] (桁材) をかけ、棟木を上げる。ンニギー [ʔnnigi:] (棟上) には「天宮賜福柴微鑾駕」と墨書し、ピル [piru] (にんにくの種子) と塩を包んでそれに吊す。棟上げ式は、潮の満ち時に合わせて行なう。よすみ四角のㇿムヤーバラーの上には紅白の餅を供え、ナカㇿバラーの上にも紅白の餅を供えて祈願する。祈願が終ると、家主と大工の棟梁が、屋根の上から餅まきをする。子供たちや村人たちは、その餅を拾うためにたくさん集まって来る。例、バンㇿテヌ ウブㇿヤー ムニアギ ソーㇿㇿタバス イㇿㇿトㇿ ムチ ポーローㇿㇿタン ダーㇿ [bantenu ʔubuja: muniagi soʔta basu ʔittu mutʃi poroʔtan da:] (私の家の母屋の棟上をされたとき、一斗の餅を撒かれたよ)

ムチアーㇿスン [mutʃia:suŋ] (動) 漆喰をつく。ムチアーサㇿヌ [mutʃia:sanu] (漆喰を搗か

ない)、ムチアー<sup>フ</sup>シティ [mutʃiaʃiti] (漆喰を搗いて)、ムチアー<sup>シ</sup>プス [mutʃia:ʃi-pysu] (漆喰をつく人)、ムチアー<sup>フ</sup>スピン [mutʃia:su-pig] (漆喰をつくとき)、ムチアー<sup>フ</sup>スカー [mutʃi-a:syka:] (漆喰をつくと)、ムチアー<sup>フ</sup>シ [mutʃia:ʃi] (漆喰をつけ)、ムチアー<sup>フ</sup>セー [mutʃia:se:] (漆喰つきは)。

ムチアー<sup>フ</sup>シ [mutʃia:ʃi] (名)「もち合わせ」の義か。漆喰を搗いて捏ねること。ムチシ<sup>フ</sup>ッキ [mutʃiʃikki] (漆喰つき)ともいう。

例、ムチアー<sup>シ</sup><sup>フ</sup>ヌ アタロー バン<sup>フ</sup>タン ナリ<sup>フ</sup>スヨー ムチ<sup>フ</sup>ッファーシル<sup>フ</sup> ナラン<sup>フ</sup>タル [mutʃia:ʃinu ʔataro: bantan narisujo: mutʃiffa:ʃiru narantaru] (漆喰搗きぐら  
いは 僕らも出来るよ。漆喰塗りが出来ないんであって)

ムチ [mutʃi] (名) 漆喰。「もち(餅)」の義。粘着力があるところから、ムチと名づけられたのであろう。海中の枝珊瑚を採取して焼き、これを粉末にし、藁などを切って加え、水で捏ねあわせたもの。粉末状のものを、ウールパイ [ʔu:rupai] (石灰)という。ムチヌーリ・プス [mutʃinu:ri-pysu] (左官屋)は、特にいなかったが、島人は各自で自家の左官の仕事もこなしていた。鳩間島で左官を専業としたのは小浜真栄氏、鳩間昇氏らが最初であろう。例、カー<sup>フ</sup>ラシ <sup>フ</sup>ヤー フクタンティン<sup>フ</sup> ムチ<sup>フ</sup> ッファーサン<sup>フ</sup>カー タイ<sup>フ</sup>フナー カー<sup>フ</sup>ラ パガリ<sup>フ</sup>スツォー [ka:raʃi ja: ʔukutanim mutʃiffa:sagka: tai ʔu:na: ka:ra pagarisu] (瓦で家を葺いても漆喰を喰わさないと《塗らないと》、台風で瓦は剥ぎとられるよ)

ムサ [musa] (名) 荒波。台風が接近して風が強くなると、波頭がたち、白波がたつようになる。漁師は波頭に白波がたつようになると出漁しない。ムサ<sup>フ</sup> ウク<sup>フ</sup>ルン [musa ʔukuruŋ] (ムサがおこる、白波がたつ)、ムサ <sup>フ</sup>ズー<sup>フ</sup>ワン [musa dzu:wag] (ムサが強い)などという。例、キュー<sup>フ</sup>ヤ ムサヌ<sup>フ</sup> ウク<sup>フ</sup>リティ イガメー<sup>フ</sup> <sup>フ</sup>ンジララ<sup>フ</sup>ヌ [kju:ja musanu ʔukuriti ʔigame: ʔndʒiraranu] (今日はムサがおこっていてイカ漁には出られない)。

ムイルン [muirun] (動、自) 燃える。ムイラヌ [muiranu] (燃えない)、ムイティ [muiti] (燃えて)、ムイン<sup>フ</sup>ギサン [muiggisag] (燃えそうだ)、ムイル<sup>フ</sup>カー [muiruka:] (燃えたら)、ムー<sup>フ</sup>カー [mu:ka:] (燃えたら)ともいう。例、キー<sup>フ</sup>ヌ ムイルン [ki:nu muirun] (木が燃える)、ゾッフィタイムノー ピッ<sup>フ</sup>チン ムイラヌ [dzoffitamuno: pittʃim muiranu] (濡れた薪はちっとも燃えない)

ミルクヌ・オン<sup>フ</sup>ギ [mirukunu-oggi] (名)「弥勒神の扇」の義。豊年祭や結願祭のゾーラキ [dzo:raki] (踊り、余興)の中で踊られる「弥勒踊り」の弥勒神が持つ扇。軍配団扇の形に似る。例、インヌムラヌ<sup>フ</sup> ミルコー<sup>フ</sup> ミルクヌ・オンギ<sup>フ</sup>バ <sup>フ</sup>ムテーティ ブドゥルソー<sup>フ</sup>ル [ʔinnumuranu miruko: mirukunu ʔoggiba muteti buduru soru] (西村のミルク神はミルク扇を持って踊りをされる)

ミナ<sup>ナ</sup>カ [minaka] (名) 庭。母屋の前の空間。穀物を干したり、仕事をしたりする所。稲の脱穀や米搗きをしたり、イガ [ɪga] (烏賊) をシダ<sup>ル</sup> [ʃidarʊ] (ススキで編んだすだれ) の上に置いて干すのに利用した。イー<sup>シ</sup> [ɪ:ʃi] (つのまた) なども庭で干して乾燥させた。アンタヌ・ミナ<sup>ナ</sup>カ [ʔantanu-minaka] (家の東側の庭)、マンタ・ミナ<sup>ナ</sup>カ [manta-minaka] (家の前の庭) などというが、後や西側にはあまり言わない。家の後方は、普通は菜園に利用され、西側には鶏舎や畜舎が建てられたので、庭としての空間がとれなかったからであろう。例、カジフキ<sup>ナ</sup>ー キーヌパー<sup>ヌ</sup> ヲウティティ ミナ<sup>ナ</sup>カ シラー<sup>シ</sup> シケーバ ミナ<sup>ナ</sup>カ ポー<sup>キ</sup> [kadʒiΦkina ki:nu-pa:nu ʔutiti minaka ʃira:ʃi ʃike:ba minaka po:ki] (「風吹き≪台風≫で木の葉が落ちて庭を散らかしてあるので、庭をはきなさい」)

ミチエー<sup>マ</sup> [mitʃe:ma] (名) 路地。狭い通路。グマ・ミチエー<sup>マ</sup> [guma-mitʃe:ma] (「小さい・小道」の義。<sup>ひと</sup>一人通ることができるような小路。畑の畔道など) はミチエー<sup>マ</sup> より小さい路をさす。例、ウブ<sup>マイ</sup>・ミチエー<sup>ラ</sup> パタキ<sup>ヌ</sup> ヲアザダー<sup>チ</sup> ヤラーバー<sup>キ</sup> ミチエー<sup>マ</sup>ヌ トゥー<sup>リ</sup> ブン [ʔubumai mitʃe:ra patakinu ʔadzada:tʃi jara:ba:ki mitʃe:manu tu:ri buŋ] (大前道から畑の畔にそって屋良まで小路が通っている)

ミズ<sup>ヤ</sup> [midzuja] (名) 「水屋」の義。茶器や食器類を入れて置くもの。台所のある三番座の一角に置かれる。型には大小さまざまあるが、普通は奥行約45センチ、幅約80センチ、高さ約120センチ程度のものがよく利用されていた。例、ミズヤ<sup>ン</sup> ナカ<sup>ナ</sup>ー ッフ<sup>サ</sup> タ イリ<sup>シ</sup>ケーバ ンザ<sup>シ</sup> ミー<sup>ヲ</sup> [midzujan nakana: ʃfusata ʔiriʃike:ba ʔndzaʃi mi:] (水屋の中に黒砂糖を入れてあるので、出してごらん)。借用語。

ミジン<sup>ダ</sup>ナ [midʒindana] (名) 「水棚」の義。台所の流しのこと。食器類を洗って水切りのために伏せておく所。炊事場の近くに、約1メートルの高さに、幅約60センチ、長さ約80センチの長方形の棚をかけ、簀をかけたもの。例、ミジン<sup>ダ</sup>ナ ナカ<sup>ル</sup> アラシティティ<sup>ヲ</sup> ウスンフカシ<sup>ヲ</sup> シキ<sup>リ</sup>バ [midʒindanana makaru ʔaraʃititi ʔusunΦɸkaʃi ʃikiri:ba] (流しに、お碗を洗って伏せておきなさいよ)

ミジクブ<sup>サー</sup> [midʒikubusa:] (名) 素焼きの鉢。直径約30センチ、深さ約15センチほどの女性用小水入れ。女性は、夜間の小用は、土間に置いてあるミジクブサーでたして、翌朝便所に流した。戦後は若い女性は使わなくなり、病人が使用するようになった。例、バカー<sup>ヲ</sup>モー バカヤ<sup>ヲ</sup>ティ シー<sup>ヲ</sup> ミジクブ<sup>サー</sup>ナー シバ<sup>ル</sup> サンセン [baka:mo: bakajati ʃi: midʒikubusa:na: ʃibaru sansen] (若い人は、恥かしいといってミジクブサーでは小用をたさなかった)

ミーガー<sup>ヲ</sup>ラ [mi:gara] (名) 雌瓦。屋根のえつり(棧)に粘土を乗せ、その上にミーガー<sup>ヲ</sup>ラを二枚ずつ重ねて敷き固定する。その瓦のこと。雌瓦は台形をなし、ゆるく湾曲してい

る。軒のカーラシキの上から葺き始め、棟の方へと葺きあげていく。雌瓦と雌瓦の接合部分に粘土を盛り雄瓦を被せて葺く。接ぎ目には、ムチ [mut̚ʃi] (漆喰) を塗って固定し、赤瓦と白色の漆喰のコントラストを示す屋根に葺きあげる。例、ミーガー<sup>ㄱ</sup>ラー ニンマイ<sup>ㄱ</sup>ナー アー<sup>ㄱ</sup>シティ ッサ<sup>ㄱ</sup>ンタ<sup>ㄱ</sup>ナー シキ<sup>ㄱ</sup>ティ<sup>ㄱ</sup> フク [mi:ga:ra: nimmaina: ʔa:ʃiti ssantana: ʃikiti Φyuku] (雌瓦は、二枚ずつ合わせて、下に敷いて葺く)

マルカナ [marukana] (名) 丸鉋。曲面を削るために用いる鉋。ウー<sup>ㄱ</sup>キ [ʔu:ki] (桶) やミジタン<sup>ㄱ</sup>グ [midʒitaggu] (水担桶) の板の曲面を削ったり、舟 (ㄱ<sup>ㄱ</sup>イダ<sup>ㄱ</sup>フニ [ʔidaΦuni] (板舟)) の底面を削ったりするのに用いる鉋。例、マルカナ<sup>ㄱ</sup>シ ウー<sup>ㄱ</sup>キ<sup>ㄱ</sup>ヌ ヲ<sup>ㄱ</sup>スバ キジ<sup>ㄱ</sup>バ [marukanaʃi ʔukinu suba ʃikiba] (丸鉋で桶の側面を鉋かけしなさい)。

マッ<sup>ㄱ</sup>ファ [maffa] (名) 枕。枕の総称。キーマッ<sup>ㄱ</sup>ファ [ki:maffa] (木枕)、ヌーヌマッ<sup>ㄱ</sup>ファ [nu:numaffa] (布枕)、パクマッ<sup>ㄱ</sup>ファ [pəkumaffa] (箱枕) などがある。ティーマッ<sup>ㄱ</sup>ファ [ti:maffa] (母親が子供を寝かす際に、母の腕を枕にして寝かすことをいう。「手枕」の義)。「しきたへの麻久良さらずて」(『万』-809)、「枕 方久良、承<sup>ㄱ</sup>頭木也」(『和名抄』)。makura→makkwa→maffaのように音頭変化を起こしたものであろう。

マキワラ [makiwara] (名) 杉の皮の繊維を十分に乾燥させて、船の板の接合部分にさしこんで水もれを防ぐのに用いるもの。また、平釘を打つ際にも、平釘の頭部に巻きつけて打ちこむのに用いる。例、マキワラ<sup>ㄱ</sup>バ<sup>ㄱ</sup> ヒラ<sup>ㄱ</sup>クギ<sup>ㄱ</sup>ヌ<sup>ㄱ</sup> ス<sup>ㄱ</sup>ブル<sup>ㄱ</sup>ナ マ<sup>ㄱ</sup>キ<sup>ㄱ</sup>ティ<sup>ㄱ</sup> ウ<sup>ㄱ</sup>トゥ<sup>ㄱ</sup>カー ム<sup>ㄱ</sup>リ<sup>ㄱ</sup>ラ<sup>ㄱ</sup>ヌ [makiwaraba ɕirakuginu suburuna makiti ʔutuka: muriranu] (マキワラを平釘の頭に巻いて打つともれない。水もれしない)

マイグス<sup>ㄱ</sup>ク [mai-gusɕku] (名) 「前の石垣」の義。家の前面 (南側) の石垣。ㄱ<sup>ㄱ</sup>シン<sup>ㄱ</sup>タ<sup>ㄱ</sup>・グ<sup>ㄱ</sup>ス<sup>ㄱ</sup>ク [ʃinta-gusɕku] (後の石垣)、イン<sup>ㄱ</sup>タ<sup>ㄱ</sup>グ<sup>ㄱ</sup>ス<sup>ㄱ</sup>ク [ʔinta-gusɕku] (西側の石垣)。アン<sup>ㄱ</sup>タ<sup>ㄱ</sup>・グ<sup>ㄱ</sup>ス<sup>ㄱ</sup>ク [ʔanta-gusɕku] (東側の石垣) などがある。マイグス<sup>ㄱ</sup>クは高く、頑丈に積むのが一般であった。例、マイグス<sup>ㄱ</sup>コ<sup>ㄱ</sup>ー タ<sup>ㄱ</sup>カー<sup>ㄱ</sup>タ<sup>ㄱ</sup>カー<sup>ㄱ</sup>ㄱ<sup>ㄱ</sup>シ シ<sup>ㄱ</sup>モー<sup>ㄱ</sup>ッ<sup>ㄱ</sup>タ [maigusɕko: təkə:təkə:ʃi ʃimo:tta] (前方の石垣は高く積まれた)

マー<sup>ㄱ</sup>リ<sup>ㄱ</sup>ザ [ma:ridza] (名) 薨止めのティ<sup>ㄱ</sup>ブ<sup>ㄱ</sup>ク [tibuku] (手矛)。薨を固定するためカ<sup>ㄱ</sup>キ<sup>ㄱ</sup>ナー [kəkina:] (掛け縄) を掛けて引き締めるのに用いる。直径約3センチ、長さ約3メートル程のティ<sup>ㄱ</sup>ブ<sup>ㄱ</sup>:クを棟の両側から斜めに突き刺してあるもの。例、カ<sup>ㄱ</sup>キ<sup>ㄱ</sup>ナー<sup>ㄱ</sup>ヤ マー<sup>ㄱ</sup>リ<sup>ㄱ</sup>ザ<sup>ㄱ</sup>ナ ヲ<sup>ㄱ</sup>カ<sup>ㄱ</sup>キ<sup>ㄱ</sup>ティ シ<sup>ㄱ</sup>ミ<sup>ㄱ</sup>リ [kəkina:ja ma:ridzana kəkiti ʃimiri] (掛け縄は、マー<sup>ㄱ</sup>リ<sup>ㄱ</sup>ザに掛けて締めなさい)

マー<sup>ㄱ</sup>シ<sup>ㄱ</sup>・ヤ<sup>ㄱ</sup>ドウ [ma:ʃi-jadu] (名) 「回わし屋戸」の義。戸の片方の棧に蝶番をつけて、それを戸口の柱に付けて、押したり、引いたりして開閉する戸。開き戸。ドア形式の戸。例、マー<sup>ㄱ</sup>シ<sup>ㄱ</sup>・ヤ<sup>ㄱ</sup>ドー<sup>ㄱ</sup> ド<sup>ㄱ</sup>ウ<sup>ㄱ</sup> グ<sup>ㄱ</sup>チ<sup>ㄱ</sup>ホ<sup>ㄱ</sup>ー<sup>ㄱ</sup>ニ ア<sup>ㄱ</sup>キ<sup>ㄱ</sup>フ<sup>ㄱ</sup>イ スー<sup>ㄱ</sup>ㄱ<sup>ㄱ</sup>カー ヤ<sup>ㄱ</sup>ブリ<sup>ㄱ</sup>ヲ<sup>ㄱ</sup>ス [ma:ʃi-jado: duku gutʃiho:ni ʔaki-Φui su:ka jaburisu] (開き戸は《回わし屋戸》、あんまり、むてっぽうに開閉すると、破れてしまうよ)



マーシヌキル [ma:ʃi-nukiru] (名)「回わし鋸」の義か。桶の底やㇿイダフニ [ʔidaΦuni] (板舟、サバニ) の底の板を接合するために、幅の小さい鋸を入れてひきながら、接合部分を密着させ、水もれをとめるようにするための鋸。例、タングㇿヌ スクヌㇿ ㇿイツァー マーシヌキルㇿシ ピキティ アーㇿシ [taggunu sɯkunu ʔitsa: ma:ʃinukiruʃi pɯkiti ʔa:ʃi] (担桶の底の板は回わし鋸を入れて引きながら合わせなさい)

マーキ [ma:ki] (名)「真木」の義か。樹木の幹や枝を切って薪としたもの。木の薪。タムㇿヌ [tamunu] (薪) となる樹木のこと。西表島の北岸のタータバㇿル (田地) の近くの山から、田仕事の合間に木を伐り出して鳩間島へ運び、それを約40センチの長さに切って、斧で割り、竈の上のタムㇿヌダナ [tamunudana] (薪棚) にあげて乾燥させ、燃料とした。一時期、それを束にして石垣へ売り出したこともあったが、石油におされて続かなくなった。

マー・ガヤー [ma:gaja:] (名)「真茅」の義か。鍋蓋や、フィㇿバ [Φuiba] (茅で編んだ穀物入れ) などを編むのに用いる長い茅。約150センチ程の長さに成長する。この茅を根っこの方から刈り取って二、三日陰干しにし、軟くなった頃に、直径約1センチの太さに束ねて、マーニの皮やクージの皮で巻き締めながら鍋蓋やフィバを編みあげていく。  
例、マーガヤーㇿ スリクー [ma:gaja: suriku:] (真茅を刈り取って来なさい)